機動戦士ガンダム0079 Universal Stories 泥に沈む薬莢

Aurelia7000

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球連邦政府が地球の環境問題、人口問題を抜本的に解決すべく行った宇宙移民。

宇宙には人類の住処であるスペースコロニーが数多浮かび、それらは巣立った人類の可能性を眩いまでに輝かせていた。

人類がこれまでの神の世紀《西暦》に別れを告げ、人類の内なる可能性という名の神の世紀に《宇宙世紀》と名付けてから半世紀余りが過ぎた、宇宙世紀〇〇七九。

地球から最も遠く、スペースコロニー群の中で唯一、地球をじかに見る事のできないサイド３が《ジオン公国》を名乗り地球連邦政府に対し独立戦争を挑んだ。

ジオン公国は新型機動兵器、モビルスーツを投入。絶対視されていた地球連邦軍の勝利を揺るがし、やがて戦火は地球へと広まった。

業火は数多の生命を焼き、開戦から一週間の戦闘で全人類のおよそ半数が死に絶えた。

―人類は、自らの過ちに恐怖した―

焼け付くような太陽が見下ろす熱帯、ユーラシア大陸とオーストラリア大陸に挟まれた大小様々な島嶼が形作る東南アジアでも、戦火は轟々と燃え盛っている。

これは、燃え上がる戦火の中で必死にもがく、名もなき将兵達の物語。歴史に刻まれる事のない、もう一つのガンダム。

ガンダム、一年戦争中の東南アジアを主な舞台とする外伝です。
ＭＳパイロット以外の兵器に焦点を当てつつ、個々の将兵の視点で表舞台のライトが当たらない戦場を描きます。
感想、アドバイス、ビクビクしながら待っております。感じたことなど何でも構いませんので、筆者の励みになります。どうかよろしくお願いします。

目次

エピソード一覧、登場人物紹介
全話目次・登場人物紹介 ―― 1
Ｅｐ１．大人と子供の戦場 ―ＰＶＮ．４／３ ＷＡＰＰＡ― 10
第一章 ―― 10
第二章 ―― 15
第三章 ―― 28
第四章 ―― 37
第五章 ―― 43
第六章 ―― 54
第七章 ―― 64
Ｅｐ２．翼を広げよ！ ―ＦＦ―３ ＳＡＢＥＲＦＩＳＨ― 76
第一章 ―― 76
第二章 ―― 89
第三章 ―― 99
第四章 ―― 112
第五章 ―― 119
第六章 ―― 132
第七章 ―― 136
第八章 ―― 139
第九章 ―― 144
第十章 ―― 152
第十一章 ―― 157
第十二章 ―― 165
第十三章 ―― 176

Ｅｐ３．　密林航路には似合わない　―ＭＳＭ―０４　ＡＣＧＵＹ
―
第一章　179
第二章　186

エピソード一覧、登場人物紹介

全話目次　・　登場人物紹介

エピソード一覧
Ｅｐｉｓｏｄｅ．１　大人と子供の戦争
全章数　：　七章
総文字数　：　４２，２７９字（修正前につき誤差有り）
主人公の陣営　：　ジオン公国軍

Ｅｐｉｓｏｄｅ２．　翼を広げよ！
全章数　：　十三章
総文字数　：　６，８７６０字（修正前につき誤差有り）
主人公の陣営　：　地球連邦軍

登場人物紹介

Ｅｐ．１

ジオン公国軍

??エトムント・ビエナート曹長

男性。２４歳

Ｅｐ．１　主人公。パトロール兵でワッパと呼ばれる小型浮遊機を使いジャグルで警戒任務に就く。不器用な性格から恋愛は大の苦手で、これまで彼女がいた経験はない。愛機であるワッパを愛しており、整備は欠かさない他自分に合う改造まで施している。

??ルカ・シャヘト軍曹

男性。２２歳。

エトムントの訓練学校からの友人で、エトムントとは相対して非常に軽薄かつ人当たりが良く学生の頃からモテた。チヨという婚約者を本国に残しており、彼女への愛は深い。エトムントと同様にパトロール任務に就く。

??サラ・ハルティヒ曹長

女性。２３歳。
エトムントの基地の通信士で、エトムント達の所属する第三七パトロール小隊も担当している。彼女の真摯な兵士達への態度と美しいルックスは基地内でもかなり人気らしい。読書家で、本を読む時は眼鏡をかける。似合わないと周囲には不評。
??中佐
男性。不明。
エトムント達の基地の司令官。
??エルマー・エンゲルハルト少佐
男性。４５歳。
豪快かつ快活な性格のジオン軍人。普段は中佐の補佐をするが彼が不在の際は代わり指揮をとることもある。
??シャーリーン
女性。２４歳。
高飛車な態度と高身長が印象的な女。訓練学校ではルカと同じ訓練小隊だった。元来恋愛なぞ興味がなかったものの訓練中のアクシデントでルカに助けられたことにより惚れ、以後彼の前では急にしおらしくなるという分かりやすさで彼に好意を寄せ迫った。だが彼女はルカにガールフレンドがいる事を知ると素直に諦め、以降は再び高飛車な女へと戻った。最後までエトムントは彼女らの恋愛劇に気づかなかった。
??シンイー
女性。２３歳。
ひねくれ者の女で訓練学校でエトムントと同じ訓練小隊だった。いつのまにかルカに好意を寄せて居たがひねくれた性格が幸いし気持ちを伝えようとしたのに何故か罵倒したことが三回。最終的に他の女子の援護を受け気持ちを伝えるもルカには彼女が居たことが判明。別にあんたなんか好きじゃないと言い張った。エトムントはそれを鵜呑みにした。
??整備長
男性。４８歳。

ジオン軍の整備士。主にバイクや車両、ワッパなどの小型なマシンを対象に点検整備を行う整備士達の取りまとめ役。腕は確かで、独自の改造を施したエトムントのワッパも的確に修理して見せている。

??ヨナス曹長

男性。２６歳。

ジオン軍ＭＳパイロット。エトムントの友人で金髪と愛用するギャリソンキャップがトレードマーク。地味に作者に気に入られている。

??新人伍長

男性。２２歳。

ドジっちゃったジオン軍パイロット。６１式戦車の集中砲火を浴び、彼のザクは中破に追い込まれた。

??グラハム・グラバー中尉

男性。３１歳。

神経質なジオン士官。軍規を体に刻み込まれたかのような男で、ギレン・ザビに陶酔している節がある。勿論兵達には嫌われている。ついでにいうとエンゲルハルトにも嫌われている。

??エンゲルハルトの副官

男性。２８歳。

真面目で優秀なエンゲルハルトの副官。だがグラバーとは違い融通が利く。

地球連邦軍

??アシュレイ・ホーカー少尉

女性。２６歳。

北米出身の連邦軍兵士。特殊部隊が人数合わせのために引き抜いた女性兵士。

民間人

??チヨ

女性。２２歳。

ジオン本国の看護師。ルカの婚約者で、彼には自身のセクシーな写真を持たせている。優しい笑顔の可愛い女性。

??ハンナ
女性。１４歳。
東南アジアの農村のごく普通の娘。愛に溢れる家庭に生まれ、仲の良い友達も多い活発な少女である。中でもスードラという同い年の少年とは親友で、よく一緒に遊んだり散歩したりしていた。
??ハンナの父親
男性。３９歳。
村を守る為とジオン軍と戦うゲリラの一人。
??少年（サイード）
男性。１４歳。
街のカフェに住む戦争孤児。郵便配達を生業としている。
??エトムントの父親
男性。故４９歳。
エトムントの父。ジオン公国軍宇宙艦艇所属の兵士。
??エトムントの母親
女性。４７歳。
　エトムントの母親。
??エトムントの妹
女性。１９歳。
エトムントの妹。
??戦場カメラマン　ユーリ・ブヌトー
男性。３０歳。
適当な性格のリボー・コロニー出身。
??洋服屋の店主
男性。不明。
ぼったくり。
??カフェの店主
女性。不明。
豪快な性格の老婆。
Ｅｐ．２
ジオン公国軍

??アルフォンス・フォン・ハルツハイム少佐
男性。３５歳。
義手のジオン戦闘機エースパイロット。黒をパーソナルカラーとしており、愛機は決まって漆黒に塗られる。コーヒー派。モデルは映画「スターリングラード」のケーニッヒ少佐とＯＶＡ、ＭＳ　ＩＧＬＯＯ２のエルマー・スネル大尉を足して二で割った感じ。
??フィコ中尉
男性。２６歳。
ハルツハイムの部下のパイロット。ハルツハイムには及ばないが、彼と行動を共にできる技量を持つ。幼い頃に飛行機に乗った記憶が忘れられず民間の航空会社にパイロットとして勤めていた所、軍に引き抜かれた。
??ベルタ中尉
女性。２５歳。
ジオン軍パイロット。フィコと双璧をなしハルツハイムの背中を守る優秀な部下。通常の兵士志望だったのだが航空機パイロット適正が高いことが判明し戦闘機パイロットとなった。
??基地司令中佐
男性。３４歳。
若いが基地の司令を務める男。ハルツハイムには信頼を置いている。
??アルマーダ少尉
男性。２３歳。
ジオン航空部隊を情報面で支援する。若さもあり、任務にはまだ不慣れなようだ。
??レギーナ・ケストナー大尉
女性。２７歳。
ジオン、第三爆撃中隊長の女性。自分らを守ってくれる戦闘機パイロットを守護神にたとえ、敬語を使う。部下への示しを気にしたりとどこか武人気質のある女。
??モビア

男性。２４歳。
ジオン軍パイロット。
??カッパ隊
ジオン軍の攻撃隊。友軍陣地に近い連邦軍陣地に爆撃を加えていた。
??カッパ・フォー
男性。２４歳。
カッパ隊のパイロット。隊のコールサインを《カッパ》にしようと言い出したのは彼。隊員達は響きがおかしいと反対したが彼の「カッパは水の守護霊だ」という説明により言いくるめられている。
地球連邦軍
??メルヴィン・ライアン大尉
男性。３２歳。
主人公の戦闘機パイロット。無口で無表情。コールサインは《クローバー・ワン》。第三小隊の隊長であり真っ白に塗られた機体に大きくクローバーのマークを描く。ちなみにこのパーソナルマークの発案はリア・オルグレン及びエドワード・ライナーである。実家はイギリス。
愛機は制空戦闘機フライアローと専用にチューンされたＦＦ３Ｃセイバーフィッシュ。紅茶派。無口なキャラはエース戦闘機乗りは無口、というエースコンバットで培われた作者の偏見によるもの。
??グラハム・マーカット中尉
男性。３４歳。
フライアローは複座機であり、メルヴィンの相棒として後部座席を担当していた。ミノフスキー粒子によってレーダーや兵装の管制をする自分が無用になっていたことを嘆いている。
??リア・オルグレン少尉
女性。２４歳。
金髪のオペレーター。クローバー隊の面々とは仲が良く不思議とメルヴィンに構う。実家がイギリスにある。
??サネプト航空基地司令

男性。４２歳。
優しい顔と力の抜けた態度から誤解されるが、実は切れ者でジャブローへの転勤を狙っている。既にパイプは持っていたようで、ジャブローで最高峰の技術研究をしていた技術士官をひきぬいている。クリーム色の髪が特徴の空軍少佐。ベレー帽。
??基地司令の副官
男性。３６歳。
キツイ喋り方の男。大尉。
??クローバー・トゥー中尉
男性。３４歳。
飄々としているが腕は確か。クローバー隊のナンバー２として隊員達を指導もしている。
愛機は制空戦闘機フライアローからＦＦ３Ｃセイバーフィッシュ。
??クローバー・スリー中尉
男性。２８歳。
言葉使いが荒い。トリガーハッピーの疑いすらある戦闘好き。それでいて生き延びる優秀な腕を持つ。
愛機は制空戦闘機フライアローからＦＦ３Ｃセイバーフィッシュ。
??クローバー・フォー少尉
男性。２３歳。
新米の隊員。本名エドワード・ライナー。リアに恋する若者。若いがセンスはあり、経験の無さを補うようにして生き残った。早くクローバー隊に並べるよう精進中。
愛機は制空戦闘機フライアローからＦＦ３Ｃセイバーフィッシュ。
??タチアナ中尉
女性。２４歳。
ミデア輸送隊の副隊長。赤い髪と青い瞳、白い肌が美しいロシア美人。よく子供と見間違われる幼い顔立ちが特徴。空軍の人はベレー帽という作者の謎の偏見によってこの人もベレー帽着用。
??ルーカス軍曹
男性。２７歳。

映画によく出てくる典型的な陽気な黒人。ミデア輸送機《フラミンゴ》のレーダー手。
??フラミンゴ操縦手
男性。２８歳。
無口な性格で常にサングラスをしている。《フラミンゴ》の操縦手。
??アツシ・ユン技術中尉
男性。２５歳。
日系の技術士官。セイバー専任で魔改造も行える優秀な人。ジャブローに居たというのだから折り紙つきだ。飄々とした性格でコーラを好む。
??ナスカ隊
マングース攻撃機隊
??マンタ隊
　フライマンタ爆撃機隊
??アロー隊
フライアロー護衛隊
??アロー・ワン
男性。２７歳。
アロー隊隊長。士気は高く部下からの信頼も厚い青年。
??アロー・スリー
男性。２４歳。
僚機を墜とされた事でハルツハイムを恨む空軍兵士。
??マニアニ伍長
男性。２５歳。
地球連邦陸軍の兵士。基地の見張り台に交代で立ち索敵を担当する。
??パーシー
男性。２６歳。
地球連邦陸軍の兵士。対空自走砲でサネプト航空基地周辺の防空を担っている。
??陸軍大尉

男性。３０歳。
第２００歩兵連隊第一中隊隊長。サネプト航空基地に集結して居た陸軍部隊の指揮をとる一人。
??陸軍少佐
男性。４３歳。
第七機甲師団第二大隊第二中隊指揮官。以下は同上。

民間人…?
??ボーニャー
黒い毛並みに青い瞳を持つ子猫。

Ｅｐ１．　大人と子供の戦場　―ＰＶＮ．４／３
ＷＡＰＰＡ―
第一章

第一話　大人と子供の戦場
第一章

七月。ジオン軍はブリティッシュ、ルウムといった宇宙での華々しい戦果に続き、地上でも地球連邦軍を押しやっていた。なおも激戦は続いており、また、地元のゲリラとの小競り合いなどもあり、ジオン公国軍にとって安息の時間はなかった。しかしそれは連邦軍にとっても同じことであり、常に後退と散発的な戦闘を繰り返していた。ジオンには慣れない地球環境の中で心身を疲弊していく者が。連邦では度重なる敗走の中で徐々に規律や士気を失う者が後を絶たなかった。

夕方。ジオン公国軍、第三七パトロール小隊に所属するエトムント・ビエナート曹長は、愛機であるホバーバイク、ワッパの整備を一人で行っていた。ワッパは大型のバイクにタイヤの代わりにホバークラフトを装着したようなデザインで、座席の上から機銃のついたアームが垂れ下がる。ブーム懸架式機関銃だ。

彼がワッパの前部フィンモーターをいじっているこの基地はこの地域を担当する、兵站基地を含めた中型の基地だ。大型の司令部が一カ所あり、それに付属するのかこのような中型基地だ。ここより更に前線になるといくつかの衛星基地がある。北京などの方面軍の拠点から送られてくる物資は集積所からここへ届き、そして最前線に送られる。更にこの基地より後方になると飛行場を備えた航空基地があり航空支援などの為に航空機が待機している。

この重要な基地の警備を担うエトムントのパトロールは夜に始まる。彼はその出撃に備えて一人愛機の整備のため目を覚ましたのであった。まだ他の夜勤の兵士達はみなテントの中で寝ている。パトロール部隊にはワッパしかいないのだが、それでいて特に火力に悩

まされることはなかった。パトロールにおいて敵を発見した場合はすぐに増援を呼ぶのが基本であるし、この地域は湿地が多いので移動速度が地面の質に左右されにくいホバー式のワッパはパトロールに最適であったからだ。

しかしいくら浮いているからといって泥は付着するし、こびりついた汚れは動作不良の原因となる。だから整備する事は良い事だが、それは昨日もした事だし、整備兵がチェックもしている。彼がこのワッパを自ら整備するのは、こいつが自分の命を握っているという意識と、愛機への愛着からである。

「エトムント。もう少し早く寝てはどうだ？」

エトムントとペアを組む、ルカ・シャヘト軍曹が兵舎のテントから出てきた。彼はどうやら寝起きのようで、かなり制服―第二種戦闘服―を着崩している。

「俺は心配性なんだ」

エトムントはまだ若かったが、無骨で隆々とした顔と体つきからそんな台詞は似合わなかった。ルカが笑うとエトムントは刈り込まれた短髪を掻いた。

「まあ、いつもの事だけど」

言いながらルカは金髪を簡単に整え、制服を正した。フィールドキャップの角度を直し、通信機のインカムを首に下げたら、腰に巻きつけていたジャケットを着込む。いつも通り、ルカの服装だ。

ルカはエトムントの養成学校時代からの同期で、同じ部隊に配属されてからも友人としての関係を保っていた。元々年齢が二つ上のエトムントが彼より高い地位に昇進してからも敬語を使う事のない信頼関係を保っている。

「やれやれ。また前線が広がったらしいな」

言いながらエトムントがワッパのエンジンを始動させ、フィンの動作音やその他異常がないかを確認し、また止めると工具をしまい始めた。

「ジオンが勝ってるんだから、いいじゃないか」

「いや、俺が言ってるのはな……」

そこでエトムントは愚痴をやめた。これ以上言っても仕方がない。士気が下がるだけだ。
「まあ、ここは最前線じゃないから俺たちのルートは変わらんがな」
「いいや、あながちそうでもないぞ」
低く年齢を感じさせる声で会話に割り込んだのは、この基地の司令の補佐役を務めるエルマー・エンゲルハルト少佐だった。驚きつつも二人は敬礼をする。慣れない将校だ。自然とその仕草も堅くなる。
「まあまあ、気にすんな」
エンゲルハルトが手を振る仕草で押さえると、二人はぎこちなく敬礼を解いた。
「若いのは堅すぎる。もう少し力抜かんと、いつまでも新米だと思われるぞ」
少佐は豪快に笑った。その所為で敷地内の兵士の注目が集まり、エトムントは顔を隠すように少し俯いた。
「それで……何かご用で？　後方じゃあないというのはどういう―？」
ルカが恐る恐る聞くと少佐は声をやや潜め二人だけに聞こえるよう言った。
「作戦区域が変更になった。すまんが君たちはいつもと違う場所で任務に就いてもらう。詳しくは……場所を変えるか。ここは暑苦しい」
連れてこられたのは基地の建物内だった。司令部がある棟だ。他はハンガーなんか以外はテントなどが多くいつも寝起きしている兵舎もテントだが、ここはちゃんとしたコンクリートによる作りになっている。その中の一部屋に連れてこられた。
少佐は部屋の中に着くと椅子に座り、扇風機をつけた。どうやら暑いというのは嘘や方便ではないらしい。扇風機の静かなモーター音だけが室内に響く。
エトムントとルカも座らせてもらったが、その内心ではいろいろな考えが駆け巡っていた。場所を変えるような重大な話なのだろうか。
「詳しい事を話そう。あー、ハルティヒ」

ハルティヒと呼ばれたその茶髪の女は、机の上に地図とタブレット端末を出した。赤いマーカーで狭い弧が描かれている。
「私はサラ・ハルティヒです。よろしくお願いします」
階級は曹長。同階級にも迷わず敬語表現を使う彼女は基地の通信士だった。彼女をエトムントは知っている。若くてルックスも良く態度も非常に良い彼女は基地内でも有名だ。ちなみに彼氏はいない、という風に。
それだけではない。加えてエトムントらが任務の時に報告する無線の相手は彼女だったのだ。茶髪の間からはインカムのグレーが見える。ルカの装備する咽頭マイクとヘッドフォンがセットになったものではなく、通信士用のスマートなヘッドフォンであった。それに、通信士らしく内勤服であるのも印象的だ。
「先日、付近にあるいくつかの村が武装蜂起し我が部隊と交戦し、部隊がこれを鎮圧しましたがこれによって付近のゲリラが敵対行動を始める可能性があります。ですので付近一帯の警備を強化します」
彼女はスムーズに説明する。タブレットにはザクのものと思われるガンカメラの動画が映されていた。ゲリラがザクの周りを取り囲み攻撃を加える。が、いずれも大したダメージを与えることはできなかったようである。
「―この赤い線の地域をパトロールして下さい。パトロール中敵ゲリラと思しき目標を発見したら通報して下さい、討伐部隊が対処に出ます。あなた方は夜の担当を。明後日からゲリラによる被害がなくなるまで続けてもらいます。では、説明は以上です。質問は？」
「俺ら以外には？」
ルカが質問した。サラは少し表情を曇らせて答える。
「その……全員集めてお話しする予定だったのですが、時間が合わなくて」
「ま、つまりは大規模な山狩りはできねえからお前らが回って、発見するなり攻撃されるなりしてこいって事だ」
回答が終わった頃合いを見てエンゲルハルトが口を開いた。内容はこの任務を極端に表現するもので、サラは溜息でもつきたそうな

目でエンゲルハルトを見つめる。
「一応、我々の交戦規定では民間人は無抵抗である限り攻撃しない、ということを広報していきます」
彼女は申し訳程度にそう付け加える。
説明された任務はどうやら通常のものだった。危険度はやや上がるが隠すような事でもない。
やれやれ噂に聞く変人の少佐その人だと、エトムントは内心思った。特段難しい話でも隠し事になるような任務でもなく、本当にただ暑い中説明をするのが面倒だから、扇風機の稼働している室内で部下に説明をさせてしまおうという魂胆であったのだ。
「近々我が軍は前進する。こんな事に気を煩わせたくないのが本音だ。割ける人員は少ないが、よろしく頼むぞ」

第二章

第二章

いつも通りのジャングルの中の道をワッパで進んでいく。暗いのでサーチライトを点灯しての哨戒だ。この任務で敵に遭遇した事はない。最前線からは離れているから、大抵の場合ここに到着する前に他の区域で発見される。そんな例すらもないのだが。

エトムントはエンジンの出力を上げた。ワッパが少し高く浮遊し、フィンを傾けるとまた沈み、今度は速度が上がる。バックミラーを見ると、ルカもちゃんと付いてきている。高速で熱帯雨林の上空を進み、木々を見渡しながら進む。敵を発見するため、赤外線暗視ゴーグルを装着していた。ＣＧ補正された緑色の景色をゴーグル越しに眺めていた。

『エトムント、彼女に気に入られてるようだな』

不意にルカが口を開く。任務中の私語は慎むべきだが、前線の兵士にそんなルールはあまり関係がなかった。

「そんな事ないだろ」

エトムントは警戒を続けながら短く答える。咽頭マイクが喉の振動を直接拾ってくれるので、ワッパのモーター音は邪魔にならない。

『分かるのか？』

エトムントに大した経験がない事を知っての発言だった。エトムントが何かいいかえす前にルカは、俺はわかるぜ、と続ける。

『こう見えてもモテるんだ。養成学校に、シャーリーンっていただろ？』

「ああ」

エトムントは訓練学校時代の事を思い出す。シャーリーンはルカの訓練小隊にいた女で、高身長と高飛車な態度が印象的だった。

『あいつに迫られた』

エトムントは吹き出してしまった。あのシャーリーンとルカが。それは愉快な事に思える。

『笑うなよ。まあ、俺にはチョがいたから断ったけど—あとはシンイーとか』
知らなかった。ルカのガールフレンド、ルカの学生時代からの恋人であるチョは知っていたがあの捻くれ者のシンイーまで。エトムントは自分の鈍感さに呆れた。まさか、ずっと近くにいた男に好意を寄せる女の存在にこれっぽっちも気付かなかったとは。
しかし、ルカがモテるというのは分からない話ではない。気も使え、空気も読める。顔も悪くなく、それでいて志の高い軍人志望。それでモテない方が不思議なぐらいだ。
エトムントはここらで雑談をやめ、任務に集中するように促した。真面目な彼の性格である。
「相変わらず硬いんだから」
とルカは肩を竦めるような声を出した。実際に竦めていたかは知らない。
「む?」
エトムントが未舗装の道路を見かけるなり降下した。
『おっ……と。なんだ?』
エトムントはホバリングさせ道路の窪みを見つめている。そして、疑問を呈したルカに説明してやった。
「タイヤの跡だ。恐らくはジープタイプで、まだ割れてもないし崩れていないから新しいはずだ」
『ああ、確かに。なんだってこんなところに?』
ここらにあるのは小さな村がいくつかだけだ。中でもこの道を使う者はいない。わざわざこんな所を通るのは、やはり見つかりたくないような連中だろう。自分達の仕事はそういう連中を意地悪く発見してやることだ。
「一応仕事だ。調べるぞ」
エトムントとルカは道の上で泥に残された足跡をゆっくりたどっていく。エトムントは無線機を手に取った。
「こちらパトロール・パパラッチ。第七区画ポイント・ブラボーで不審な車輪の跡を発見」

『了解しました。周囲を警戒してください。何かあればすぐに報告を』
サラ・ハルティヒ―もとい本部に報告を済ますと、エトムントはワッパに取り付けられている機関銃、マズラＭＧ７４のグリップを握った。額に汗が滲む。不審車となれば敵の可能性がある。それも敵地の奥まで入ってくるような連中だから恐らくは特殊部隊。そして交戦になれば当然、戦死することもあるのだなら当然だ。
『エトムント！　あれ』
ルカに言われ暗視装置の中で目を凝らすと、遠くに光が見えた。この夜間では間違えようがない。一台の車両がジャングルを切り進む道の中を進んでいた。
「こちらパトロール！　不審な車両を捕捉した！」
『こちら本部、十分警戒して下さい。気を付けて』
「了解。対象の追跡を継続する」
エトムントとルカはワッパのエンジンの出力を落とし、高度を下げ、対象に見つからぬよう追跡した。
対象の車両は随分とスピードを上げて、まっしぐらに突き進んでいる。この先にあるのは小さな川だったろうか。
追跡し続けていた最中、敵はどうやらエトムント達に気付いたらようでマズルフラッシュの閃光がちらちらと光った。すぐに銃弾が近くの木の幹を削り、地面の泥を抉った。
「ちっ、気付かれたか。応戦だ、散開！」
『了解。―こちらパトロール！　敵の攻撃を受けた！　勢力は不明！交戦する！』
エトムントとルカは散開し引き金を一度引いて安全装置を解除する。もう一度引くと機関の中で針が弾薬の尻を叩き、火薬に引火する。爆発のエネルギーは弾頭を銃身へと強引に押しやる。銃身を通る弾丸はライフリングによって回転。解き放たれた後も直進し、風を切り進んだ弾丸は車両の後部に突き刺さる。
「くそ！」
車に乗っていたのは連邦軍の兵士達だった。彼らは車の速度を

更に速め、一斉に反撃を始めた。武装はＭ７２Ａ１アサルトライフルと、Ｍ２２９分隊支援火器である。
敏捷なワッパに暗闇の中追われる連邦の兵士達は、暗視装置の緑色の映像を頼りにライフルを乱射した。しかし木の間を縫うように移動するワッパには中々当たらない。今度は木を盾にしながら的確に発砲されるマズラＭＧ７４の弾丸に、ある連邦の兵士が被弾した。そして一人分の死体が車から転がり落ちて泥に浸かった。
「グレネード！」
連邦兵が円筒形の手榴弾を投擲する。泥の上に鈍い音をたてて沈み数秒後に炸裂した。だが手榴弾は、三次元的な機動を取るエトムントとルカにダメージを与える事はなく、泥の中に窪みを作り、近くにあった木を傾けただけであった。
エトムントはマズラを細かく途切れ途切れな射撃する。それに合わせて鉛の弾丸がリズミカルに殺意を持って突き進んだ。
車両の荷台に乗っていた兵士の背中にその弾は当たり、背骨と肺をぐちゃぐちゃにして突き抜ける。
「畜生！」
負傷した兵士が呻く荷台で別の兵士がＭ２２９を乱射する。別の兵士は銃身の下に備え付けられたランチャーでグレネードを射出した。飛び出したグレネードは飛んでいたエトムントのすぐ横の木に着弾する。
「ぐっ！」
幸い負傷はしなかったが、爆風で強く揺さぶられ危うく転びかけた。フィンの向きを細かく調整して姿勢を制御する。
『大丈夫かエトムント！』
「ああ！」
もしひっくり返りでもしていたら確実に死んでいたがな、と彼は胸中で付け加えた。
『これで仕留める！』
叫び、ルカがロケットランチャーを構える。照準には勿論、例の不審車両が捉えられている。目印は敵の発砲炎だ。

彼はバックブラストを警戒した後方の安全確認を省略して引き金を引いた。圧縮ガスで発射機から押し出された弾体はロケットモーターを点火した。付近がオレンジ色に照らされる。

撃ちっ放し式の弾頭がロケット推進でまっすぐ飛んでいき、自らの赤外線センサーで車両を捉えて進んだ。しかしこの闇夜で排熱の少ないエレカーを完全に補足し続ける事は難しく、直撃はしなかったものの車体のすぐ近くに着弾した。

戦車の装甲対策のタンデム形成炸薬弾頭が炸裂すると至近弾の衝撃と爆風で車両が横転する。車に乗っていた兵士のうち、ある者は弾頭の破片で顔や内臓をめちゃめちゃにされ、ある者はひっくり返った車体の下敷きとなり生き絶えた。

『やった!』

戦闘の終結に二人は安堵し、警戒しながらもゆっくりと近づいていった。

死んだ味方の屍の下で意識を朦朧とさせる生き残りの兵士がただ一人だけいた。やがて記憶がはっきりと蘇ってくる。

任務中敵に発見されて—そうだ。数分間の記憶を思い出した兵士は、泥に浸かった顔面をゆっくりと上げる。目の前にはジオン兵の足がいた。どうやら自分には気付いていないらしい。

その時いくつかの選択肢が頭に浮かび、一つを選択した。それは無謀に思えたが、仕方あるまい、と覚悟を決める。悟られないよう、死体のふりをしつつゆっくり自分の尻に腕を伸ばした。尻の鞘からナイフを取り出す。

「確認する。報告はお前がやってくれ」

「おう」

ルカが本部に交戦終了の報告を行っている間、エトムントはワッパのサーチライトに照らされる中で懐中電灯と拳銃を構えて敵の死体を確認した。ドライバーはヘルメットや体にガラス、破片が突き刺さり明らかに死亡。その他の兵士も漏れなく死んでいると思われた。

生存者がいるとは思えないその惨状に油断したエトムントがタバコを取り出そうとしたその時、地面から—否、死体の下から敵が飛

び出した。
この距離だ。銃に手を伸ばすより先に足が出た。たまたま繰り出された蹴りに当たった敵兵は怯み、間合いを取り直す。だがその敵兵はまた間髪入れずに突進。
エトムントは顔を引きつらせて拳銃を構える。銃声が響いた。
「くあっ……！　……ああ！」
撃ったのは自分じゃあない。振り向けば両手に拳銃を保持したルカが見えた。足から血を流した兵士は苦痛に顔を歪ませながらもなお二人を睨みつけている。
「動くな！」
「こいつ、女だぞ」
確かにブロンドの女である。二人は緊張に胸を鳴らしながら拳銃を向け続けた。
タイラップ―プラスチック製の簡易的な手錠―を敵兵士の手首に巻きつけながら指示する。ルカは拳銃を向けていた。慣れない緊張状態ながら、彼はあまり興奮していないようである。
「質問には答えてもらえるか？」
「……」
木の前に座り込む敵兵は答えない。当然だろうか。
「ええと……」
そんな風に言いながら捕虜の胸元を漁り始めるルカ。なんのつもりだ！　と捕虜と口を揃えて叫んでしまったエトムントにルカは呆れた口調で理由を口にする。
「認識票」
確かにルカは認識票を取り出していた。チェーンに繋がれた薄い鉄板に個人情報が彫られている。それを引きちぎって懐中電灯の下で照らす。
「陸軍所属アシュレイ・ホーカー。階級章は曹長。血液型はO。スペースノイド」
連邦軍の階級章については座学で教わったが、正直エトムントの記憶には曖昧だ。しかしルカはその点強い。元々ミリタリーオタク

の気があったからだ。
「報告だな」
『パトロール・パパラッチからＨＱへ。追加報告。敵兵一名を拿捕。陸軍所属曹長。大したもんじゃないんだけど負傷がある。えー、左足に被弾で……血液型はＯ型』
『了解しました。ヘリコプターによる回収を行いますので、その場で待機してください。時刻は約一時間後』
『了解』
　通信を終えルカが戻ってきた。
「君はここで大人しくしているんだ」
　無言の捕虜からやや離れた場所で二人は待機した。
「はあ……。チヨはどうしてっかなあ」
「おいおい心配か？　あいつは離れやしないだろうよ。確か今はサイド3で看護師をやってるんだったな。この戦争が終わったら結婚するって言ってたじゃないか」
「だからこそだよ」
　ルカはジャケットの胸ポケットからチヨの写真を取り出した。愛する人の写真を持ち歩く。いつの時代でも兵士の心の癒しだ。
「美人だよな」
「ああ」
　写真の中でチヨはショートデニムパンツとノースリーブのシャツを着て優しく微笑んでいる。彼女から程よい色気が感じられるのは戦地に赴く彼の癒しとなる為だろう。隣にはルカが立っている。幸せな写真だった。
「戦争なんかしてないで帰りてえよ」
「だが祖国の為の戦争、だろ？」
　ジオン独立戦争。スペースノイドによる自治独立を求める正義の戦争はいつしか泥沼化していった。最初は誰もが賛成した戦争だ。棄民と呼ばれ地球に残ったエリートの為に資源を貪られたスペースノイドの地球連邦からの独立は悲願であった。しかしスペースノイドにとっての故郷、スペースコロニーまでもを兵器として転用し何億

人もの生命を奪い、奪い続けるこの戦争に疑問を抱く者は少しずつ増えていたのだ。
「こんな長期戦になるとは聞いてない」
　それでこの話題は終わり、と感じたエトムントが、今度は捕虜、ホーカーに向き直り問うた。
「お前は、なにをしにここに？　勢力圏から何十キロも離れたここで、あんな少人数で動くのか」
「答えちゃいけないんでね。知りたいの？」
「さあな。俺の仕事じゃないから答えなくてもいい」
「ねえ」
　答えたホーカーに喋りかけたのは、今度はルカの方だ。
「あんた、出身は？」
「……ハッテのアイランド・イフィッシュだ」
　ルカの顔が強張る。アイランド・イフィッシュ生まれのフェディには注意―ハッテ、サイド２にあるコロニーアイランド・イフィッシュはジオンが地球に突き刺したコロニーである。大質量兵器の効果は絶大で厚さ十キロにも及ぶ地殻を貫通しマグニチュード九の大地震を引き起こした。更に破片はオセアニアや東南アジアなど地球全土に降り注ぎ衝撃波、津波は世界中に影響を与えた。特に酷かったのは爆心地であるオーストラリアのシドニーだ。シドニーは消滅し新たにシドニー湾を形成し、周囲は汚染され、吹き飛ばされた海水は津波として周辺の沿岸を攫った。その威力は地球の自転速度を一時間あたり一・二秒速めたとすら言われる。
　もし自分の故郷のコロニーが兵器として使われたら。スペースノイドにとってそれは考えただけで吐き気を催すような悪夢だ。もし自分のコロニーをそんな風にした悪魔がいたとすれば。
　その恨みは容易に推し量れるものではない。
　当然だ。許せるものではない。そして、眼前の女にとって許せぬ悪魔は、自分達なのだ。
「……住んでたのは産まれて始めの数ヶ月。別にあんたらを恨んでやしない」

表情を強張らせていた二人を嘲るようにしてそう言った。
「足を撃たれたのには相当頭に来てるけど」
幸い弾は抜けていて、包帯を巻くことで応急処置を済ませてあった右太腿を見やる。止血剤を使ったから包帯は白いままだった。
「じゃなきゃ俺が死んでたからな」
「ええ、そういうものだもの。私だってあのままじゃ殺されると思った」
一部の兵士—少なくとも、この女兵士にとってはこの戦争は殺されるか殺すかであって、政府が掲げるような大義名分はあまり大きな理由ではなかった。ジオンが地球に来て、撃たなければ撃たれるから撃つ。それだけだった。地球連邦の兵士たちは入隊時、地球連邦市民のために戦う誓いを立てるそうだが、それがどこまで本心かはわからない。就職に悩み入隊する者や戦地で苦しい生活をするよりも、衣食住が保証される軍隊に入ったほうがマシ、と思い入隊する者も地球連邦軍には少なくなかった。
エトムントには国の為という人に誇れる動機があったが、彼女にはそれが無いのだった。
地球を守るという壮大な動機を明確に持っている連邦兵ばかりではない。
「南極条約は守ってもらえるの？」
「守るさ。ジオンには目的と意識がある」
そんな動機なき兵士を眼前に見下ろしながら、エトムントは答えた。
連邦軍の兵士は軟弱が多いと聞かされていたが、事実らしい。こんな兵士ばかりじゃあ、ジオンもやがて勝てるだろうな。そう素直に感じていた。
「あんたがそう思っても、ほかの連中はどうだか。コロニー落としをやった悪魔だから」
地球を守る精神に心を沸かせたわけでなくとも、その心にジオンの悪名は轟くらしい。
そしてホーカーが目を瞑りかけた時、夜空に爆音が響き、彼女は

もう一度目を見開くことになった。
空には輝く物体—そう見えたのはヘリコプターで、光はサーチライトだ。ジオン公国軍の輸送ヘリコプターである。ヘリコプターに遅れてサウロペルタ高機動車が到着する。連邦でいうラコタに相当する、ジオン公国軍のジープだ。
『名前は？』
「パトロール・パパラッチ！」
二重反転式ローターを装備する小型の輸送ヘリがサーチライトを真下に向けながら降下している。ローターを縦に二つ重ねる二重反転式のヘリコプターの利点は小型にできることと、このように安定した飛行が獲得できることだ。スピーカーからの声に、大声で答える。
ロープが垂らされ、兵士が数名降り立った。そして指揮官らしき男が二人と敬礼を交わす。
「エトムント・ビエナート曹長です」
「ルカ・シャヘト軍曹です」
「どうも。マオ中尉だ。この捕虜は我々が預かる。おい、あいつを引き上げさせろ」
ヘリコプターのダウンウォッシュに吹かれる中、エンジン音とローターの風切り音に負けじと大きな声で話す三人。その背後で、ホーカーはジオン兵によってヘリコプターに収容されていった。
「では、我々はこれで帰還するが、貴官らも無事に任務を終えることを祈ってる」
「ええ。ありがとうございます」
ホーカーを抱えた兵士がロープで引き上げられた直後、マオ中尉が敬礼を交わしてヘリの機体へ戻っていった。
「任務に戻るぞ」
エトムントは自分とルカにそう言い、ワッパに戻った。操縦桿を握り、エンジンを始動させる。エンジン音が響き、操縦桿を持ち上げると機体がふわりと浮き上がった。ヘルメットのバイザーを目元まで降ろし、ルカと共に再び空を舞った。

「きっちり調べとくぜ。南極条約も守るさ」
前線基地に帰還し、捕虜の管理をしている高身長の士官に会うと彼はへらへらと軽薄に笑いながらそう言った。その台詞で、エトムントは不意に彼女の身を案じる。
「任務お疲れ様」
朝焼けの森を物資の入れられた木箱の上に座って眺めていたエトムントの隣にサラが腰掛ける。手には二人分のコーヒーが握られていた。
「あ……あれがとう—ハルティヒ曹長」
「サラ」
そう呼べ、という事か。任務では常に敬語表現だったサラも、こんな時までその態度を貫きはしないらしい。
「……サラ」
急に息苦しくなって、エトムントはコーヒーを啜った。
「俺はエトムントだ」
「よろしく」
「ああ」
握手を交わすが、なんだか今更という感じだ。任務のたびに短い会話を交わしているから、既に詳しく知り合った友人のような気がする。
「顔を合わせて話すのは三回目か」
「そうね」
口下手なエトムントだから、会話には沈黙が生まれてしまう。サラが適当な話題を提供した。
「そういえばエトムントの家族は？」
エトムントは先日送られてきたメッセージの事を思い出した。実感がまだないが、どうやら確かなようだ。
「母と妹が。父は先日……、戦死したそうだ」
「それは残念ね……。ごめんなさい」
本国のコロニーから送られてきたビデオ・メッセージには母と妹が映り、父の姿は遺影の中であった。それを持ちながらエトムントの

残った家族が父の最期を語る。エトムントの父はエトムントが子供の頃から軍事に関わる人間であった。この戦争が始まるとムサイ級宇宙戦闘艦の乗組員として戦闘に参加し、サラミス級との戦闘で死んだ。認識票と遺体の回収ができたのは幸運だったそうだ。昔、核爆弾が実戦投入された時の話を聞いた事があるが、そこが通常の市街地であるにも関わらず正確な犠牲者数は分からないらしい。何故なら核爆弾の火球や熱線によって蒸発してしまった犠牲者が少なからずいるからなのだそうだ。

それと同じだ。宇宙での戦闘では艦砲がビームな為遺体が蒸発してしまうことも多い。そうなっては認識票は勿論、遺体の回収など不可能である。また、そうでなくとも爆発の衝撃波で飛ばされると回収は困難なのだ。止まることもなくどこかへと広い宇宙を旅する事となり、末路は息があろうとも酸素がなくなり窒息死するか宇宙を流れる無数の小さな岩と衝突し体を砕かれるかであろう。

「いえ、いいんだよ。父も軍人だ」

「そう……私も両親はいない。父は小さい頃に……母は一昨年に」

互いに親を失っている。その事実は二人の間の距離を少しだけ埋めた。

「綺麗ね」

「ん？　……ああ」

一瞬戸惑った。顔を下げていたエトムントには分からなかったのだが、森に朝日が昇ったその光景はまるで神話の世界のようだった。人類が宇宙に進出し、その宇宙開拓民と地球住民との間で凄惨な戦争が起きても、この世には美しい世界が残っているのだ。朝日を浴びて輝くサラの横顔が言った。不意にエトムントは見惚れてしまう。

「戦時中だなんて、信じられないわ」

「戦争が終わったら、二人で来ないか？」

エトムントが敬語も忘れてゆっくりと呟いた。口説こうとかそんな高い次元の発言ではなくて—ただの感想だとも言える—屈託のない本心だった。

「あ—……」

驚いたという表情のサラと目があってエトムントは言葉を濁す。しかしエトムントの背中を押すように—否、手を引くようにサラがエトムントの手を握った。顔を近づけて耳元で囁く。

「ええ、勿論。もう少し話しましょうか」

二人は兵舎の中に消えた。

第三章

第三章

翌日、エトムントとルカは休暇を得ていた。エトムントとルカの代わりの兵士が来て、今日から俺たちがこの任務を受けると言った。例の任務は明日からであるから、空白の時間ができてしまったらしい。翌日の任務時間が夜なら、今日も昼夜逆転の生活をして寝るタイミングを合わせるべきなのだろうがそうしなかった。実はサラも休暇がその日に設定されており、絶好のデートの機会としてサラは見逃さなかったからだ。

早朝、照りつける太陽の下車を用意しながらエトムントは腕時計を覗いた。

昨晩のベッドでサラに誘われ、約束の時間の五分前から待機しているのだが……。彼女が現れる様子はなかった。

「ごめんなさい！　寝坊しちゃった！」

まだ寝癖を残したサラが現れたのはその三十分後なのだか、エトムントの我慢強さが伺えるだろうか。

「さあ、行こうか」

エトムントがサウロペルタのハンドルを握った。

「そうね」

風が吹き、サラの纏った美しい白いワンピースが靡いた。

「私、このボルネオ島が舞台の小説を読んだことがあるのよね」

「……」

助手席でサラがその台詞をして口を開いた。

「無限に広がるサラダのようなジャングルに、数え切れないほどの動物達。今ではオランウータンも増えてきたそうよ」

「オランウータン？」

「猿の一種よ。赤褐色の毛に覆われた大きな猿」

「なるほど」

確かにこの島はほとんどが熱帯雨林に覆われている。パトロール中も数多くの動物を見かけ、なかにはオランウータンもいたかもし

れない。一体あれらの猿をどう何種類に分類できるのかエトムントには皆目見当もつかなかったが。
「読書家なんだな」
「そうね、本は好きよ。特にアナログな紙媒体のものは」
サラはえらく機嫌が良かった。自分から誘ったデートの最中に不機嫌な女は一般的ではないが、それにしても彼女の機嫌がいいのはエトムントにとって助かることだ。エトムントは女性と話すのが得意ではなかった。今もやっと話が振れて内心喜んでいるほどである。
育ちがいいのだろうか、とエトムントは思った。読書を趣味に掲げる人物は多いが、大抵の人は電子化されたものを読む。紙にまとめられた書籍はかさばるし重いし劣化するしであまり良いことはない。が、昔から育ちが良い部類はむしろ不便ですらある昔ながらの文化を好むのだ。金持ちの家には大きな本棚があるものだった。その例に則り、サラは育ちが良いのだろうかとエトムントは予測してしまう。
「そうか……」
「読まないの？」
「ああ……」
無愛想だなあ、とサラは笑った。少なくとも嫌な印象は持たなかったらしい。エトムントは安堵する。
サウロペルタが到着した。基地よりも都市部に近い街の市場だ。二人は車から降りて街を歩き回った。付近には東洋系の顔立ちの男や女が買い物に立ち寄っている。殺伐とした戦争は感じられない、平和な光景だ。並ぶ店舗は安作りの屋台で、果物や野菜、食品が木の板や籠の中に並べられている。そのうちのいくつかのフルーツを眺めて、サラが問うた。
「好きな食べ物とかってある？」
「特に……ない」
二人のデートの主導権は、終始サラの側にあった。エトムントは無口が加速していくのを自分で感じる。
「エトムント、あなたもしかして……女と付き合ったことないの？」
サンドウィッチを両手に持ったサラがエトムントの顔を覗き込

んだ。エトムントは顔をそらして言う。
「あるさ」
ふうん、と納得しかねる風のサラに今度はエトムントが問いかける。
「なんでそう思った？」
「だって、その格好―」
サラはエトムントの体を見て吹き出す。これで二度目だ。エトムントはさっきと同じ事を言う。
「私服がないんだ、これしか」
エトムントの服装の服装はカーキのハーフパンツの上に不似合いなアロハシャツという格好で、それがサラにとってはひどく愉快だったのだ。対してサラは黄色の袖なしワンピースに麦わら帽子、サングラス。お洒落な格好であると評価して妥当と言えるものだった。
サンドウィッチを受け取ったエトムントは、溢れそうになる具を不器用に口に詰め込んで頬張った。その隣でサラは器用に綺麗に齧っていく。
「じゃ、服を買いましょう。何度も来れるようにね」
そう言ってサラは悪戯に笑う。エトムントは新たな一面を見て更に惚れ込んだ。
「わかった。服選びは手伝ってくれ」
「勿論よ」
エトムントが選んだ服は尽く却下される―エトムントは自分のセンスを疑うようになり、次第にサラが服を選び始める。
エトムントはサラが持ってきた服を一着一着試着した。それをサラが見て感想を述べる。まるで男女が逆転したみたいだ、とエトムントは思った。サラの選んだ服を順に着ていく。ジーンズパンツやハーフパンツ、白いシャツ、充分な着数が買えると、エトムントが今度はと切り出す。
「次は君の服を選ぼう。気に入ったのをプレゼントするさ」
「本当！　ありがとう、なににしようかしら」
サラが笑顔を浮かべながら棚を徘徊する。あまり広くはない店

内だが、数着の服をサラは持って試着室に入った。
「じゃん」
　誇らしげにカーテンを勢いよく開けたサラ。華奢な手が当てられた腰にはデニム生地、ヒップハングのホットパンツ、上半身は白いシャツを纏っている。サラは両足を開いてどうだと言わんばかりの笑顔を見せた。
「ああ……綺麗だ」
　一瞬言葉を失いかけたがなんとか感想を紡ぐ。戦争には似合わないほど平和的で美しかった。
「うーん。もう一着着てみるわ。ちょっと待っててね」
　そう言うとサラはまたすぐに着替えた。今度はストライプ柄でノースリーブのワンピースだ。
「ワンピースが好きなのか」
「ええ、好きよ。着やすいしね。じゃあこれにするわ。申し訳ないけれど、ありがとねエトムント」
　サラが選ばれなかった服を商品棚に戻している間にエトムントは会計を済ませに店主に話しかける。
「あんた、ジオンの人だろう？」
　エトムントは一瞬で体の温度が下がっていくのを感じた。何も言わずに店員の男を見据える。今は休暇中でこの街に入ることは問題ないが、それをわざわざ確認してきたのは彼だけだ。ジオン軍は民心獲得の為地球の市民には危害を与えないように治めているが普通の市民ならばジオンの人間に積極的に関わろうとはしないのだ。中には否定的な意見を持つ者や、過激な者もいる。
　エトムントは、彼を反ジオンの過激派だと疑った。
「おいおい、気にすんな。顔がこっちの顔じゃなかったからな。かといって連邦の連中にも見えん。だから聞いてみただけだよ」
　そう言って皺の寄った顔を広げて笑う店主。エトムントは息を吐き出すと、会計の続きを始めた。財布を取り出して金を出す用意をする。しかしエトムントは提示された金額に驚愕した。
「こんなに、するのか？」

「ええ」
一応払えない金額じゃあない。エトムントは溜息をついて代金を支払った。
決して小さくない損失と悔しさにわずかに震えるその背中に店主が無駄に大きな声で叫んだ。
「毎度ありい！」
「あと一時間で戻るぞ」
「うん、わかった」
街を歩くエトムントと彼の左腕に自身の右腕を絡めるサラ。しばらく街を歩き満足すると、二人は街角の小さなレストランに入った。ガラス越しに店内が見える、木製の綺麗な作りだ。軽快なドアベルの音を聞きながら店内に入る。賑やかな声が聴こえる店外とは違い静かでモダンな印象を受けた。テーブルや椅子は色を落とした木製で、電気ランプと外からの光がちょうどいい明るさを保っている。
腕時計の時刻は午後四時を指している。食事を取るにはちょうどいい時間にも思える。なにより、二人は基地の糧食班が作る料理には飽きていた。
「パスタを」
「あ、私も」
店主の老婆に声をかけると、笑顔で了解してくれた。
「コーヒーでよろしいですかな？」
パスタができるまでの間、二人はコーヒーを啜りながら雑談に興じる。
「あんまり街とかに出た事ってなかったけれど、結構いい所があるのね」
「ああ。俺も始めて来た。場当たりだったけど、悪くないな」
「また来ましょうね」
ああ、と返しながらまたコーヒーを啜るエトムント。ほろ苦い味が口に広がる。カウンターの奥に視線を伸ばすと店主がせっせとパスタを茹でていて、香ばしい香りが流れてくるのが感じられる。基地の生活ではあまり嗅ぐ事ない香りにエトムントの食欲が刺激され、空

腹を強く感じ始める。
その時どたどたと木を鳴らす音が頭上から聞こえてくる。音のする方へ自然と視線を向けると、少年が階段を降りてきていた。
「あれ、お客かい？　珍しいね」
小柄な少年はハンチング帽を被り、半袖半ズボンに身を包んでいる。目立つのはやや大きな肩下げ鞄だ。彼はエトムントとサラを見てこんにちは、と軽く挨拶をした。エトムントとサラもそう返す。
「じゃ、失礼するよ」
たたたっと少年は走って行ってしまう。
「すみませんね……上の部屋を貸してるんですよ。彼、戦争孤児で」
「なるほど」
「戦争で親を亡くしたようでして、私が引き取ったんですがね」
そう続けながらトレイの皿を運ぶ店主。テーブルに重い皿が置かれる音がして二人はフォークを取った。
戦争が起きると戦争孤児が少なからず発生する。彼らはストリートチルドレンとなり物乞いをしたり窃盗、略奪、売春といった犯罪行為に手を染める事が多い。彼らに服を買ったり満足に体を洗える環境などあるはずもなく彼らには不衛生な生活を営み、凍死や伝染病の危険がつきまとう。それを嫌う地主やストリートチルドレンによる犯罪の被害者に依頼された街頭浄化部隊などといって犯罪を犯すストリートチルドレンを虐殺するケースもあるそうだ。
だから引き取り手がいるのは幸せな事だ。先の彼もまた、ストリートチルドレンになるかも知れなかったのだから。しかし戦争孤児という事は、間接的にとはいえ自分達が加害者だという事でもある。それがエトムントの気分を下げた。
「おっと、暗い話になってしまって申し訳ない。デートの邪魔をする趣味なんてありませんから、私は向こうに行きますね」
それを察してか店主はそう言って笑いながら奥のカウンターで腰掛ける。新聞を広げて読んでいた。記事には『ルナツー哨戒艦隊、奇跡の生還者』とでかでかと書かれている。この進展の早い戦争、数日の内に古くなる情報だ。しかし店主はそういった戦争の記事には

専ら興味がないようで、ここからは見えないが他のページを見て微笑んでいる。戦時中でも微笑ましいニュースはあるようだった。それがエトムントにとっての救いになった。
「さ、食べましょ」
パスタの麺をフォークに巻きつけて口に運ぶ。ナポリタンのソースの香りを堪能しながら……美味い。彼は忘却の彼方にあった、本国の料理店で食べた味を思い出した。
「美味しいわね！」
「ああ！」
飢えた舌で存分にパスタを味わう。口に広がる味に二人は感動を覚える。
「久しぶりに食べたわ……これもう、糧食班のなんて食べられなくなるわね」
「不味くはないけれど、味気ないっていうか、とにかくこっちの方が美味い」
二人で基地の飯の悪口を言いながら絶賛した。二人がパスタを食べ終わるのに、さして時間はかからない。すぐに食べ終えてフォークを皿に置いた。
「ごちそうさまでした」
律儀に礼を言い、コーヒーを口に流し込む。そのサラを席に待たせてエトムントは店主に代金を払った。
「良心的な価格だな……」
「細々とやっとるもんで、あまり大層なものは出せませんからね」
あくまでも謙虚な店主に、そして先の洋服店との対比で少なくない好感を抱きつつ、礼を言ってエトムントとサラは店を出た。
「さ、そろそろ帰るか」
「そうね」
目立たないように街の外れに停めておいたサウロペルタに乗り込む。運転はエトムント、助手席にサラがいる。電気駆動のエンジンをかけ、車を発進させる。舗装されてない道を走るので乗り心地はよくないが、それでも二人はドライブを楽しんでいた。

積み込まれたラジオからは穏やかな曲調の優雅な曲が流れている。それを背景にエトムントはハンドルを回した。
「あの洋服店……随分なぼったくりだったよ」
「みたいね」
後部座席にあるビニール袋を見てサラが嬉しそうに答える。
「戦争でみんな不景気だもの、仕方ないわ」
「だな。ところであのレストラン……」
「美味しかった！」
二人は今日の思い出を振り返っていく。レストランのナポリタンは絶品だった。それに店の落ち着いた雰囲気も二人は気に入っていた。
「ああ。久しぶりにあんな美味いもん食った」
今度ルカにも教えてやろうか。ルカだけにだ。基地のジオン兵の中で流行りに流行って街を休暇のジオン兵が跋扈してもあまりよくないから。
それぐらい美味な料理を出すレストランだった。
ドライブの途中、サラが景色を眺めているところにエトムントは尋ねた。デートの終わりに、次のデートの話を切り出す。そうすれば、終わりを残念に思うこともない。
「次はどこに行きたい？」
「海。あと……山も」
「山や海なら―」
ここにあるじゃないか、と言いかけてやめる。
「まあ、俺も平和な海の方が好きだ」
「連れて行ってね、海」
スペースノイドの二人は本物の海、母なる地球の海をまだ見た事はない。あるのは宇宙船から見たただひたすらに青い球と、戦場としての海だけ。エトムントには潮の匂いがして慣れなかったが、サラはすぐに好きになった。なんと素晴らしい事か。生命が生まれた海。生命の宿る海。その広さと青さに惹かれた。だからいつか恋人と来ると決めたのだ。

「ああ。リゾンデやウィルヘルムスハーフェンなんかじゃない本物の海や山に行こう」

答えたエトムントにサラが雑に抱きつく。エトムントは驚いてハンドルを切りかけた。危ない。死ぬところだった。任務の合間を縫って街に出かけて、彼女に抱きつかれたまま死ぬとか洒落にならねえ。エトムントは想像して笑ってしまった。きっとこの想像をサラは見ていないが、彼女も笑っていた。

第四章

第四章

昼。ハンガーに工具の音が響いている。電動ドライバーや金槌の音だ。その音をＢＧＭにしてエトムントはドックに入る。

「どうだ？」

愛機であるワッパを解体し修理している腹の出た男にエトムントは声をかける—が、返事は返ってこなかった。

しかしそれにも慣れているエトムントは気にせず周りを見渡す。ワッパのフィンのカバーが取り外されチェーンに吊られている。ブーム懸架式の機関銃も取り外されていて、まさに丸裸といった様子である。

「モーター周りを勝手にいじってただろ。お陰で修理が大変だったぞ」

遅めの返事が来た。いつもの事なのでエトムントも返す。

「ははは、しかし、その方が乗りやすいんだ」

「とんでもないじゃじゃ馬じゃねえか」

そう言って快活な笑い声をあげる彼はこの基地の整備長。常に酒気帯びとか色々問題はあるが、腕は確かだ。中年の彼はぼさぼさの髪を帽子で押さえつけ作業着を着て、いつも部下の整備士を怒鳴りつけているシーンが印象的である。

先日の戦闘で、実はワッパが被弾していたのだ。基地についた時に音を上げてしまったので信頼している整備長に預けていた。そして、任務に合わせ取りに来たのだ。

「しっかり修理したぞ。これなら任務もこなせるだろう」

エトムントが礼を言うと整備長がワッパの組み立てに入る。エトムントはその作業を見ている意味がないので、その間に部屋を移った。

ワッパや自動車といった比較的小型のマシーンの整備をするブースから、一際広いＭＳハンガーに移動する。全高はＭＳが格納できる二十五メートル。この基地の中でも特に高く大きな建物だ。小

型の整備場とは直結されている。
　ＭＳハンガーに格納されているのはＭＳ０６Ｊ、ザクＪ型と呼ばれる機体である。緑色の機体。足や腰にはパイプが通り、棘のついたショルダーアーマーと、盾が左右非対称に装備されている。そして最も特徴的なのがその頭部。今は光を灯していないが起動時には赤く輝く一つ目、モノアイである。そして人間でいうところの口と鼻はなく、代わりにダクトが設けられている。この鋼鉄の巨人はジオン公国軍快進撃の立役者であり、そして同時に連邦軍兵士のトラウマとなっている。一週間戦争、ルウム戦役の戦線で活躍したザクはＭＳ０６Ａ、あるいはＭＳ０６Ｃ、ＭＳ０６Ｆであり、この機体は地上戦用に改修されたＪ型である。それらすべての機体が緑色で塗装されている。いわゆるノーマルカラーであり、一機だけツノがついているのは隊長機だ。エースパイロットなどは赤色や青色、白色などの派手な色に期待を塗るが一般の兵士はそうはいかない。派手な色は目立つ上それを塗るのに使うペンキだって膨大な量になるからである。
「ようエトムント。ＭＳに乗りたくなったか？」
　ザクを見上げていたエトムントに話しかけたのは、ＭＳパイロット、ヨナス曹長だ。
「いいや。俺はワッパが気に入ってる」
「そうかそうか」
　ＭＳパイロットに配給される第二種戦闘服にギャリソンキャップを被った金髪の男、ヨナスは言う。
「昨日また戦闘があってよ、敵戦車隊への夜間奇襲。相手が６１式じゃあ造作ないが、新人がドジりやがった」
　ヨナスが背後を親指で指す。その方向には大破とはいかないまでも大きな損傷を負ったザクがあった。脚部スカートは外れている箇所があり、ショルダーアーマーには大きな穴が空いている。特に目立つのは頭部のパイプがない所だ。恐らくは被弾した際に損傷し取り外されたのだろう。ワッパ乗りの彼は詳しくないが、頭部へエネルギーを供給しているパイプなのだからなければ困るのは当然だろうという予想は簡単についた。他にも所々に損傷が見られ、被弾の壮絶

さを物語っている。
「パイロットは？」
「なんとか生きてる。まったく、次の補給まであいつは使えんよ」
ヨナスは呆れた口調で愚痴をこぼした。
「補給は今週中だと聞いたが……」
「さっさとしてほしいもんだな」
ああ、と返す。元々物資の少ないジオン軍だから、少しの損耗が進撃速度を鈍らしかねない。常に補給線を保つ事が重要なのだ。
「じゃあ俺はこれで失礼するぜ。寝てないんだ」
早めに切り上げると手を振ってヨナスは歩いて行った。
ハンガーを出ると停車してある戦車や装甲車が見えた。ＭＳの戦闘能力は歩兵から戦車や装甲車などを凌駕したが、歩兵を運び守る装甲車やＭＳより安価な戦車はいまだに第一線で活躍する兵器である。また砲兵などはＭＳへの代替が難しく、ＭＳに対抗可能な重要な戦力だ。初期の戦闘でも砲兵によって打撃を与え混乱を引き起こしたところへＭＳと戦車で構成された部隊が突破、歩兵で制圧するという戦術がとられた。ちなみにこの基地の航空機は連絡機と攻撃ヘリ程度しかない。主な航空機は専用の航空基地で待機しているのだ。戦車の車上では戦車兵が座り込んで酒と煙草を楽しんでいる。エトムントはそれを横目に兵舎を目指した。
兵舎はテントになっていて、この地方の橋頭堡となっているこの基地の兵士ほぼ全員が宿泊できる設備が整えられている。その為この広い基地の敷地内でも高い割合で土地を占めているのが兵舎などの簡易的な建物である。歩いているとやがてかまぼこ型のバラック兵舎が見えてくる。
兵舎の安い扉を引いて開ける。中に入ると、夕方に入り日の光はオレンジになっていたので電気ランプが点灯していた。
「よう、エトムント」
兵舎内の簡易ベッドの間を進んでいくとルカに声をかけられた。二人は成り行きで兵舎の外に歩み出る。むさ苦しい兵舎に長くいるのはあまり得策ではない。ストレスを溜め込んだ兵士と喧嘩になっ

ても面倒である。
「お前、まさか少尉とデキてる？」
「いや、まあ、ああ」
　デキてるのかデキてないのかよくわからないまま認めたエトムントに対して、どうやったんだよ、とルカは笑う。柔らかい色で基地を包む夕日は昨日とは違うものに見えた。
「お母さんと妹さんに教えてあげるまで死ねないな」
　おっと、忘れていた事にエトムントは気付き、サラとの結婚なんて思いつきを想像してみた。
「ああ」
　だがすぐに忘れる。それは任務のあとにゆっくり考える事だからだ。
「俺も早く帰ってチョと結婚してえや」
「そうだな……少なくともここに長居はしたくない」
　エトムントとルカは人殺しや殺人鬼ではない。少なくとも、当人達の感覚では。人は殺しているがあくまでも戦争をしている以上、相手を殺すのは兵士として普通の仕事なのである。恨めしい敵国の人間を殺していくのではく、国のための仕事をさっさと終わらせて帰りたい、そういう感覚なのだ。
　だがちゃんと殺し合いをする自覚はある。それがなければただの虐殺者、狂人と変わらない。だが逆にその自覚が重すぎる人間は兵士に向かない。殺し合いの意識を必要な分だけ受け止めればいいのだ。現にそうする事で、兵士として正常な精神を保てている。
　必要な分の殺しの自覚とはなにか、はさておくとして。
「この調子ならジオンは勝てる。少なくともここ東南アジア戦線はな。だから今は任務に集中だ」
「まったく、根が真面目なのは変わんねえな」
　いつも表情はややにやけていて飄々としているルカとそれに付き合いながらも真面目なところがあるエトムントは良いコンビとして訓練生時代からの親友であった。
　第三次降下作戦で東南アジア戦線に配属されてからもそれは変

わっていない。だからこそ互いの事を熟知しており、癒し合う事もできた。
短い会話を交わすと、二人は作戦前のブリーフィングに参加すべく簡易テントのある場所まで向かった。周辺に響く爆音に導かれ空を見上げると、戦闘機ドップが六機の編隊を組んで飛行しているのが見えた。
首の角度を元に戻して目線を自分の前に向けると、ヴィーゼル偵察警戒車、ジオン軍の機銃を装備した装甲車が横切った。軍用車ならではの大きなモーター音と鉄の装甲板同士が当たる音が騒がしく耳を刺激し、今度は巻き上げられた砂煙がエトムントとルカを襲う。
二人は咳き込みながらも砂煙の中を突破し、テントにたどり着いた。オリーブドラブの帆が張られたテントの下には簡易テーブルがあり、その上に通信機器やパソコンが置いてあり、奥に作戦指揮用のボードも見える。そして何よりその場にいたエンゲルハルトとサラに敬礼をした。
エンゲルハルトとサラが敬礼を返す。エトムント達は簡易的な椅子に座った。ぞろぞろと他の兵士達もやってきたのでサラが人数を確認し、全員いることがわかると口を開いた。
「それでは、本作戦の詳しい説明を始めます。本作戦の指揮を務めるのはグラハム・グラバー中尉です。では中尉、ご説明を」
紹介されたグラバーは前へ出た。三十代ぐらいに見える彼は細い顔の髭を綺麗に剃り、細長い長方形のレンズのメガネを掛けていて、それは見るからに神経質そうな男である。
「グラバー中尉だ。では説明をする。この地図にある赤い円のエリア内が我々がパトロールする事となった区域である。各員所定の区域を巡回してもらう。任務にあたっては実弾の使用を許可する。敵対行動を取るものは即刻射殺せよ。だがまず敵の勢力を確認の際は即座に本部に通報するんだ。常に装甲車と攻撃ヘリコプターの討伐隊が待機している。それと最後に。物資には限りがある。捕虜は必要ない」
グラバー中尉が説明を果たすと、エンゲルハルトが口を開いた。

「我々はキシリア様の意向、祖国で待つ国民の期待に応えるべく、一刻も早くこの地域を制圧しなければならない。その為にはこんなゲリラごときに戦力と人員を避けない。少ない人数の任務ではあるが、諸君の奮戦を期待する。これもジオンの勝利へ近づく一歩なのである」

落ち着いた語り口ではあったが、祖国の為である事や特命的な任務である事を語るエンゲルハルトの台詞に作戦前の兵士達は無邪気に士気を高めていた。

「では、〇九〇〇時をもって作戦開始とします。各員配置について下さい」

ハルがそう言うと兵士達は二つのグループに別れた。片方は交代時間まで待機すべく兵舎に戻る者達、もう片方がワッパに乗る為にハンガーへ向かう者達で、エトムントとルカは後者の部類であった。

エトムントの駐機スペースには当然のように整備されたばかりの愛機が停めてある。エトムントはそれに跨るとキーを回してエンジンを始動させた。心まで震わせるような駆動音とマシーンの震えに応えて、ワッパを浮遊させる。前脚部に取り付けられたサーチライトを点灯させて横を向くと、ルカも同じようにして浮遊していた。

「さあ、行くぜ」

時刻は〇九〇〇。作戦開始時刻であった。

第五章

第五章

その晩は晴れていた。気持ちのいい晴れ空で星々もよく見えた。木製の屋根の上で寝転がって星を見るのが好きだった。星の名前なんてよく知らないけれどそんな事はどうだってよかった。とにかくこの清らかで美しい星々が瞬く時間を過ごせればよかった。

しかし、その日いつものように星を眺めていたら星と村のランプ以外の光源が現れた。遅れて腹の底に響くような心地の悪い爆音。

「おい！　家の中に入れ！」

状況の把握に努めようと回転し始めていた少女ハンナの脳に、外部からの声が届いた。父の声である。

「う、うん！　どうしたの？」

「隣村がジオンの連中とやり合ったらしい。俺たちも加勢しに行く。あいつらが来てから林が焼かれたり畑が潰れたりいい事なしだ。いいかハンナ。お前はここにいるんだ。絶対に外に出るんじゃないぞ」

まだ十四のハンナでも、あんなものに生身の人間が勝てる見込みがない事はわかる。十八メートルの緑色の巨人だ。だがハンナが言うまでもなくそれは村の男達全員が知っており、しかしなお彼らは戦いを挑もうとしているのだ。ハンナには言うことを聞くことしかできなかった。

「よしお前ら！　行くぞ！」

村の若い男達が武器を持って走っていくと、村には女と老人、子供のみが残された。

森の向こう側が少しオレンジ色の光に照らされると、少し遅れて銃声や爆発音が鳴り響いた。ほんの十数分しかそれは続かなかったがハンナにとってはとても長く感じられる時間だった。それは村の人達も同じで、みな光しか見えない戦闘の行く末を見守っている。しかしすぐに勝敗は決したらしい。男達は半分ほどに数を削りながら逃げ帰ってきた。

「父さん！」

その言葉を聞いてくれる相手はいなかった。代わりに涙を溜めた母親が自分の事を抱き締めてくれる。

「お、おい！　あれ見ろ！」

村人の指差す方を見ると、遠方の稜線を越えこちらに迫ろうとする鋼鉄の巨人が見えた。闇夜でシルエットしか見えないが、月の光と森の中で何かが燃える炎の光でその存在は視認できる。ピンク色の不気味な一つ目が、自分達へ定まって光った。

一瞬にして村は恐慌に陥った。あんな巨人が自分達に牙を剥けばひとたまりもないだろう。ある者は武器のある倉庫へ向かい、ある者は子供を抱えて家の中に逃げ込んだ。またある者は既に村の外に出ようともしていた。

足音が近づいてくる。その巨人が大地を踏みしめる音はとてもこの世のものとは思えなかったが、脳が伝える恐怖だけがハンナを現実の世界に引き止めている。

「村を守れ！」

誰かがそんな事を叫んだ。彼らは当然ながらジオン軍の交戦規則など知らなかった。抵抗をすれば村を戦場にしかねない、などとは思わず、ただ村を守る使命感と興奮、恐怖だけで鋼鉄の巨人に戦いを挑んだのだった。

その言葉に呼応して村のどこかからロケット弾が放たれた。個人携帯用の簡易的な四連装ロケットランチャーだ。誘導機能はないので、特定の目標を狙う事なくザクに向かって突進する。光の尾を引きながら四発のロケット弾が風を切って進む。しかし初速の遅かったその弾頭を易々とザクはかわして見せた。今度はザクがお返しとばかりにザクマシンガンを数発撃ちこむ。機械が連動する音と発砲音が周囲に響き渡り、すぐに着弾の爆音が連なる。直撃弾ではないとしても、至近弾の爆風にさらされて生きていられる人間などいなかった。

ザクが村の人間を幾人か屠ると、他の場所からも次々と攻撃が始まった。村の光源が増え、機関銃の弾からグレネードランチャー、ロケットランチャーの弾が次々と放たれる。超高速で突き進む弾丸や

ロケット弾。しかしザクという巨人はそのことごとくを弾き、あるいはかわした。戦闘が始まって一分足らずでザクの圧倒的な優勢が示される。

「煙だ！」

村の誰かがそう叫んで煙幕を焚いた。白いスモークがもうもうと立ち込める。

「近付いて仕留めろ！」

今度は違う男が叫んだ。煙に紛れ小人を見失ったザクが一つ目を動かして探している隙に村人達は肉薄していく。だが巨人に群がり仕留めようとする小人は、あまりにも無力であった。

ザクは体のいたるところに設置されたSマイン発射装置を起動し、Sマインの弾頭は空高く放たれた。時限信管によって一定の高度まで跳ぶと、そこで炸裂する。

数千という子弾が地面に降り注いだ。ザクに近づきすぎていた村人達は肉を裂かれ骨を折られ、その痛みを人生最後の記憶として生涯の幕を閉じていった。

わかりきった事だった。あんな鋼鉄製の巨人にろくな装備も訓練もない男たちが勝てない事は。しかしそれでも戦う村を守る為に無惨に死んでいく村の男達。

何人もの人間を殺戮しなお、ザクはその一つ目で葬るべき相手を探している。

「ちくしょおおおおお！」

数人の男がジープに乗って飛び出した。剥き出しの後部座席にはロケットランチャーを抱えた男が立っている。Sマインを斉射しきったザクに猛スピードで近づいていくのが見えた。

通常ならためらうだろう。Sマインがあと何発あるのかわからないからであるが、この状況で冷静な判断ができる人間などいなかったのだ。

放たれたロケットランチャー、そして小銃の弾をすべて装甲で弾くと馬鹿にするな、と言わんばかりに簡単にジープを蹴り飛ばした。車はおもちゃのように何度か地面に弾かれながら飛んでいく。彼の

人生の続きは途絶えた。
結末は簡単に予想できるものだった。
まだ家屋の影などに潜んでいた男達に、ザクは攻撃を加えた。男に向かってザクマシンガンの射撃を始めたのだ。側にあった木造の家屋は次々と倒壊し、木っ端が吹き飛んだ。逃げ出していた女の背中にそれが突き刺さり、女はその場に倒れる。
村はまさに地獄の光景と言えた。一体の巨大な鬼が、無力な人間達を虐殺しているのだ。
ハンナはなんとか意識を保っていた。ここにいては死ぬだけである。とにかくその場から離れようと母の手を引いた。
「母さん、逃げよう！」
母は突然起こる悲劇の連続に意識を保つのが限界で、言われるがままぎこちなく走り出した。
「ハンナ！　逃げるんだ！」
小銃を持った男、幼馴染のスードラが駆け寄ってくる。小銃はどこかで拾ったのだろう。彼はまだ他の男達のように武器を握る年齢ではなかった。三人で逃げよう、そう言おうとした瞬間―
「危ない！」
―衝撃。ハンナのすぐ後ろでザクマシンガンの弾が炸裂した。しかしハンナが弾の破片や爆炎に呑まれることはなかった。
「母さん…スードラ！」
幼馴染を守る為盾になった勇敢な少年と共に、自らの命と引き換えに愛する娘を守った母は背中に無数の傷を負って息絶えていた。彼女らはハンナがいくら呼びかけても目を開く事はなかった。
「うあああああああ！」
天に輝く無数の星に向かって叫んだ。溢れ出る涙を堪え、ハンナはスードラの抱えていた小銃を持ち上げる。まだ少女の年齢であるハンナにとっては重かったが、今は気にならない。
とにかく必要なんだ。生きる為には少しでも多くの力が必要なんだ。
ハンナはそのまま森の中へと走って行った。村で上がる炎が見

えなくなり爆音が聞こえなくなるまで走り続けたかったが、ジャングルを走り続けたせいで体は泥だらけで、あらゆるところに痣や裂傷を作っていた。
もう、そこから動ける気がしなかった。
「現在地は？」
『折り返し地点まで半分。順調に進んでるよ』
エトムントはルカからそう聞くとまたワッパの速度を上げた。
『南の方角がゲリラの村があった方だ。向こうから逃げてきてここらに隠れている可能性が高い。ここら辺はザクじゃ入れないから』
確かに、この木の密集率と地面のぬかるみではザクは足を踏み入れられないだろう。エトムントは警戒心を高めて闇夜の熱帯雨林に目をやった。ワッパには布でできた簡単な屋根を張り、エトムントやルカはレインコートを着ていたがそれでも服の中までびっしょりと濡れている。ジャングルも同じようにいつもに増して高温多湿となっていた。乾季のはずだが、珍しく雨が降っているのだ。これでは着の身着のまま逃げ回っているゲリラは大変だなと、他人事ながらに同情した。
『ま、こんな任務なら死ぬ事はないだろうな。我が軍の進行は順調なんだから、きっとその内また講話に持ち込むんだよな？』
「ああ。一度はレビルの演説で抵抗を選んだ連邦も、地球本土に攻められたら怖気付くだろうよ」
エトムントが言ったレビルの演説というのはルウム戦役で大勝利を収めたジオンがその際捕虜として捕獲した連邦軍レビル将軍、彼がその後連邦軍の特殊部隊によって奪還され、更に事実上連邦政府への降伏勧告である停戦条約締結の場に現れ、ジオンの内情を暴露した通称『ジオンに兵なし』と呼ばれる演説である。
これによって連邦軍は継戦に傾き、停戦条約であった南極条約は戦時条約となった。ジオンにしてみれば目の前にあった独立の夢を摘み取った憎き敵将である。
『ジオンが独立できりゃ、生活が楽になる。今までは連邦政府の重税や経済制裁でろくな生活ができなかったがそれももうおしまいだ』

「そうだな。お前もチョと落ち着いて結婚しろよ」
エトムントはルカが最終的に言いたかった事を先回りして言ってやった。スペースノイドの悲願であった独立。それをかけた戦争。正義は我にあり、とジオン国民の誰もが信じていた。
『ああ。その為に結婚は取ってあるんだ。やっぱり戦後に結婚したいからな』
なるほど。もしかしたらそれは、自分が戦死しても相手の戸籍にバツが付かないようにという気遣いなのかも知れないとエトムントは思ったが、これまでの経験からそれを否定した。ルカはもし自分が死んだら、などと考えるようなか弱い—あるいは頭のいい—人間ではない。
『ところで、この先に開けた土地があるんだが、迂回するか？』
折り返し地点を通過し、あとは基地まで直進というあたりでルカが任務の話を始めた。今まで敵の攻撃はなし。お陰で二人は雑談に気を向けられたが、一応は任務の事も念頭に置かれているらしい。エトムントも雑談と少しを警戒に使っていた脳を動かし考えた。開けた土地にでると見つかりやすいが、この際問題はないとエトムントは判断する。開けているとはいえ周囲に高台があるわけではないので攻撃を受けたとしても退避、あるいは反撃はできる。それにそこまで神経質になっていては持たない。
「いや、ルート通りでいく。念とはいえの為少し散会して進むぞ」
『了解』
二人は間を開けて進んだ。少し進むとやがて開けた土地があり、そこだけ月の光が直に当たり明るくなっている。エトムントは攻撃を警戒してスピードを上げて突っ切る。ルカも同じように突っ切った。
どうやら攻撃はないようだ。そう思いまた進もうとした瞬間—
—発砲が始まった。連なる銃声に呼応して周辺の木々に弾が当たる音が聞こえる。それに応えてエトムントとルカは反撃を始めた。マズラ機関銃で弾をばら撒く。マズラの発砲炎で周囲が明るくなり、近くに着弾するのが見えた。するといきなり相手の発砲が止まった。

「撃ち方待て。やったか？」
なおも警戒しつつ接近すると、木の陰にもたれかかる人影が見えてきた。
木の陰で雨に打たれるその影は、ゲリラでもなく連邦の正規兵でもなく―
「おい」
「ああ……」
―子供だった。少女である。服は簡素なもので、この豪雨をしのげるものとは到底思えない。その証拠に顔色や唇は青ざめていて、この少女がそんな状態で小銃を撃ったのなら驚くべき事である。
エトムントはワッパから降りて少女の前でしゃがみ込んだ。少女兵という事だろうか。食料も弾薬も持っていない。服装も普通のものでその上裸足であった。
「よかった……。怪我はしていない。どうやら銃がジャムったのと、極限状態の中で衰弱して力尽きたらしいな。息はあるが放っておけばじきに死ぬ」
背中で両手を縛ると、エトムントはレインコートをかけてやった。保温効果もあるのでないよりはいくらかマシだろう。
「捕虜……なのか？」
ジオンではまだ学校に通っているような年齢だ。それを捕虜として捕らえた事に、エトムントとルカは強い違和感を覚えていた。しかし、それを拭うようにルカが言う。
「ああ、そうだろ」
ジオンの兵士は、重力圏での戦争に酷いストレスを抱える事があった。それを避けるのが、それをそういうものだと受け入れる事だ。戦場で味方が死んだ時、パニックを起こして逃げ出そうとする兵士、ＰＴＳＤになりかけたＭＳパイロット。戦争はそういうものなのだと無理にでも飲み込む事で、なんとか自分を保っているのだ。
天気、気温、日の出、日の入りをコントロールでき、自然災害など絶対にないような生活をスペースコロニーで過ごしてきたジオンの兵士か醜い戦争を理解するには苦しむのだと、そう言い聞かせた。

だから今回もルカは少女が戦場にいる事を認めようとしたのだ。
　こんな幼い少女がライフルを握って一人ジャングルで倒れている。そんな現実が、戦争では当たり前なのだと。
「報告だな」
　エトムントは無線機を取り出した。
『あー本部、こちらはロミオ・ナイナー。敵ゲリラ一名を拘束した。少女だ。繰り返す、敵ゲリラの少女を拘束した。オーバー』
『こちら本部、了解しました。帰還時に捕虜も連れて来てください。繰り返します、連れ帰ってください。オーバー』
『了解。アウト』
　交信を終えるとエトムントは少女の方へ向き直った。すると、少女が目を覚ましているのが目に入った。
「よ。怪我は―」
「お前たち、ジオンだな！」
　ルカの言葉を貫くように、少女が声を荒げて言った。その台詞には強い敵意が込められているのを感じる。
「ああ、そうだよ。ジオン公国軍だ。君は兵士か？」
　縄を解こうと暴れる少女と対照的にエトムントは落ち着いた口調で問う。
「……違う」
　その答え―いや彼女の放つ雰囲気で二人はおおよその事に見当をつけた。恐らくは彼女の村はゲリラの村であり、友軍が制圧したという村の一つなのだろう。それ故にジオンに敵意を持ち、銃の引き金を引いた。
「お前たちの所為で！　あたしの村は！　家族は！」
　涙を流しながら喚く少女の事を鎮めようとルカが手を伸ばしたが、彼女はルカの手に噛み付いて拒否した。
「いてててて！」
　グローブの上からでも痛いらしい。しかしルカが力づくで放す前に彼の手は解放された。少女にはもう、噛み付く体力もなかったのだ。しかし、彼女を突き動かす精神と気力は尽きず、憎きジオンの兵

士を睨みつけている。
「安心しろ、危害は加えない」
「ふざけるな！　あたしの村を焼いて、父さんと母さんを、スードラや村のみんなを殺した癖に！」
少女の気迫に気圧された二人は言葉を失った。この子も戦争孤児なのだ。そして自分たちがそれを生み出した。その事実に対して発するべき言葉が見つからなかった。
「まあ、敵だかんな」
ルカがあまりにも呆気なく、そして核心にあることを言葉にする。
「お父さんやお母さんの事は残念だった。俺が言える事か知らないがそう思うよ」
「お前たちが仇なんだ！　父さんや母さんの！」
呆気にとられていた少女がまた叫んだ。
しかし、今度は怯むことなくエトムントが口を開く。
「もう敵じゃない！　そして仇でもない！」
「敵だよ！　仇だ！」
「お前はまだ生きてるんだ、復讐なんてしてねえで自分の人生を生きろ！」
その言葉に、糸が切れた人形のように少女は泣き崩れた。溜め込んでいたものが一気に噴き出し、吐き出すように大きな声で泣いた。
「じゃあどうすればいいんだ！」
なおも叫ぶ少女を、エトムントは強く抱き締めた。この子をどう静かにさせるかなんて考えなくなった。そんな利口な思考なんかじゃあなく、ただ抱き締めてやりたかった。彼の胸で籠った泣き声をあげる少女の背中を優しく包み込む。少女は気がすむまで泣くと、やがて落ち着きを取り戻した。
「名前は？」
「……ハンナ」
少女―ハンナは自分をそう名乗った。
「そうか。ハンナ、俺たちはもう君の敵じゃない」

エトムントは優しく諭すように言って、立ち上がった。
「移動するぞ。予定時刻を過ぎちまう」
「ああ」
レインコートを羽織ったハンナをワッパの座席後部にある備品ラックに座らせた。単座で操縦手以外の人間を乗せる事を考えていないワッパにはそこしかスペースがなかった。後ろ手に縛ってある縄をワッパにも繋いだ。一応苦しくないようにしたつもりである。
「ハンナ、悲しい事は泣いて忘れろ。いつまでも囚われてても生きている意味がない。……俺に考えがあるんだ」
エトムントはハンナにそう言ってワッパのエンジンをかけた。座席を挟んでハンナの体温を感じながら。
ハンナはワッパの上で揺られながら考えていた。この男は何者なのだ。いつの間にか憎かったはずの男に心を許してしまっている。決して感情が色褪せたわけではない。今でもあの十八メートルの巨人に対する恨みも、あの凄惨な光景も、悲しみも忘れてなどいない。ジオンを恨まなくてはいけないと感じる一方で、ジオンの男の台詞を心に留めていた。
―自分の人生を生きろよ!―
あの時、自分を守る為にスードラと母親は死んだ。いやもしかしたらまだ生きていたかも知れない。けれど私は逃げてしまった。もしかしたら二人はまだ泥の中で私を待っているかも知れない。そう思うと自分が卑劣で下劣な裏切り者に思えてならなかった。思えば思うほど胸が締め付けられる。自分の人生は自分で決めていい、父が農場を経営して得た金で通っていた学校の先生が言っていた台詞だ。ハンナはその言葉を信じたくなった。自分は家族や幼馴染を裏切った最低の人間かも知れない。けれど、それでも生きている。お父さんお母さん、スードラ、村のみんな。ごめんなさい。ハンナは後ろめたさを振り払うように心の中で謝罪の言葉を並べた。そして決心したように口を開く。
「これから、私はどうなる?」
「普通なら捕虜だが―お前はまだ子供だからな」

自分を縛った男はそうとだけ告げるとまた操縦に戻った。冷たいはずの雨が少しだけ暖かく感じて、ハンナは目を閉じた。

第六章

第六章

「今日の成果は捕虜が一名。我が方に死傷者はなし。敵は発見ならず、か」

グラバー中尉が帰還した兵士たちの戦果を読み上げながらリストに書き込んでいる。側にいたサラが同じ事をボードに書き込んでいく。雨は止んでいた。テントの下で兵士達は小さな椅子に座りボードを睨んでいる。彼らはびしょ濡れの制服でブーツには泥がびっしり付いていたがもう数ヶ月が過ぎそれぐらいのことには慣れていたので彼らは事後報告も順調に済ませた。

そんな中エトムントは捕虜となり現在は独房に入れられているはずの少女、ハンナの事を考えていた。彼女はこのまま憎しみに駆られた人生を送るのだろうか。それとも自分の中で折り合いをつけて新しい人生を送れるのだろうか。それを選択する今、自分はできる限りの事をしてやりたい。そう思った。

「既に交代の部隊が巡回を始めている。敵がいるのかもはっきりしないが、被害が拡大してからでは遅い。明日の任務に備え、各員休んでおけ」

「では、解散です」

グラバー中尉に合わせてサラが解散を告げた。それに応え兵士たちは椅子から腰を持ち上げて弊社に戻り始めた。

しかし、エトムントだけは向きが違う。彼が目指したのはエンゲルハルトの元であり、つまるところ司令部の置かれる施設だった。

「あら、兵舎に戻らないの？」

歩き始めたエトムントにサラが声をかけた。

「ちょっと少佐に話があってな」

それを聞くと、サラは大袈裟に溜息をついてみせた。

「そんなびしょびしょの格好で司令部内を歩かれたら困るわ」

「あ―……」

自分の着ていたフライトスーツを見て思い出したとばかりに声

を漏らすエトムントに、サラはタオルを渡してやった。
「ありがとう」
エトムントはそのタオルで髪を拭きながら兵舎へ向かう。基地内に設置された光源装置のお陰で位置ははっきりと掴めた。
「まだ見てないけど、捕虜って女の子らしいわね」
「ああ。見た感じでは十五あたりだった」
「まあ！　なんでそんな子が戦闘に……」
サラが考えだしてしまいそうだったのでエトムントは話を濁して後回しにした。
「少佐に会う前に、二人で会いに行こう」
そうね、とサラが返したあたりで兵舎の前に着いた。
「じゃあ、着替えてくるから」
「ええ」
男性兵舎に女性兵士は立ち入り禁止である。その逆も言うまでもなく。
兵舎の中に入るとエトムントは第二種戦闘服に着替えた。濡れていたフライトスーツは端から端に張られているロープに引っ掛けておく。髪型を簡単に整えると、フライトスーツ用のブーツから通常の軍靴に履き替えた。
「なあ、兵隊さんよ」
男がエトムントに近寄ってきた。彼の名はユーリ・ブヌトー。フリーランスの戦場カメラマンでこの地域で戦闘が始まってからジオン軍に同行し写真を撮っている。普段はもう少し前線の方や難民キャンプなどで取材をしているらしいが最近はこの基地に寝泊まりしていた。
「なんだ？」
「聞いたんだ。捕虜は少女なんだろう？　ぜひこのカメラに収めたいと、思ってな」
ひょろりとした細身の体にカメラマンベストを纏い、顎髭を伸ばした金髪の男はカメラを握ってにやりと笑った。エトムントはその笑みがあまり好きにはなれなかったが

「勝手にしろ」
と投げやりな了承ともとれる返事をしてタオルで髪を雑に乾かした。
「よ、エトムント」
軽やかな笑顔と声音で、次いで声をかけたのはルカ。エトムントはよう、と返した。エトムントもルカに用があったのでちょうどいい。
「煙草と替えてもらった雑誌なんだが……」
『大人の雑誌』と銘打った雑誌をひらひらと揺らすルカ。
「次に貸してくれよ。それと―」
ルカの相手をしつつ、要件を伝える。ルカは少し声のトーンを落とし了承した。
「遅いわ。それとお隣さんは？」
サラはテントから出たエトムントとブヌトーに言った。
「捕虜の写真を撮りたいんだ。同行してもいいね？」
「私にどうこう言う権利はないわね」
そう言って歩き出したエトムントとサラに、ブヌトーは付いて来た。
もう雨のやんだ空の下、泥だらけの地面を歩いていく。捕虜を収容する独房と軍規違反の兵士を幽閉する営倉は基地の外側にある。兵舎を挟んで反対側だ。なので兵舎を出たエトムント達はそちらの方向に歩いていた。
「あんたらの出身はムンゾか？」
ブヌトーが口を開いた。ムンゾというのはサイド3、現在のジオン公国の事である。それは地球から最も遠いラグランジュポイント2に存在していた。
「ああ。11バンチコロニー」
「私は1バンチよ」
「11バンチとズムシティか。俺はサイド6、リーアのリボー・コロニーだ」
リーアという名前のサイド6は中立の立場を取っている。リー

アには多数の観光コロニーもあり、戦争とは無縁の平和な生活が送られていると聞く。そんな平和ボケしたコロニーの人間にも、こうして戦争に対し関心を持つ人間がいるらしい。その事にだけは、エトムントは感心した。
「これは出会った兵士みんなに聞いてるんだが……どうして兵士になった？」
「ジオンの男はみんなこの道を選ぶんだ。俺の家は上流階級じゃなかったし、生産者でもなかったからな」
　ジオンの兵士は士気が高い。みなジオンの人間としての自覚を持っており、志して兵士となったからである。徴兵もあるが志願兵の割合も多かった。特に女性兵士にその傾向は高く見られる。
「私も志願。ジオンの人間として、できることがしたかったの」
　二人の答えを聞いて、ブヌトーは頷いた。
「あなたはどうして危険な戦場カメラマンに？」
「俺は……俺は元々普通の風景を撮る写真家だったんだが、ある日乗っていたシャトルの近くで戦闘が起こった。ジオンのザクと連邦軍のトリアーエズの戦闘だった」
「ほう」
　ブヌトーが語ったのは、民間のシャトルが戦闘に巻き込まれたという話であった。連邦軍に配備されている宇宙戦闘機トリアーエズは地球連邦宇宙軍の主力を担う戦闘機である。二門の機関砲とペイロードは少ないが二発のミサイルを武装とする防宙任務向けに開発された。宇宙世紀に入り宇宙軍の整備を進めた連邦軍の戦力として大量に配備されていたがザクとの戦力差は歴然で多くが撃墜された。
　シャトルの窓越しに爆発の閃光、命の駆け引きを目撃した。すぐにシャトルはジオン軍のザクの手によって戦闘宙域から離れたところに退避させられたが、その光景はブヌトーの目に焼きついたという。
「それで、戦闘をカメラに収めたいと思ったのか？」
「まあ、そういうことだな」
　思っていたより酷い理由だな、とエトムントは思った。戦争の悲

惨さとか、反戦を訴えるわけではないのか。
「いや、これは俺が戦争に関心をもったというだけの話だから、俺が戦争大好きってわけじゃないぜ？」
　エトムントの胸中を見透かすようにブヌトーは言った。
「そうか、ならよかった」
「そういえば、捕虜の女の子ってのはどんな子なんだ？」
　エトムントはハンナの言っていた台詞を回想する。酷く取り乱し、そして憎しみに駆られる彼女の目が脳裏に浮かんだ。
「彼女の村は公国軍と戦闘になったらしい。彼女も小銃を持っていたから、ゲリラの村だったのだろうな。それで彼女以外は全滅したようだ。親も死んでいる」
「戦争孤児だな。今までもよく見てきた」
　ブヌトーがさして珍しくもないという風に反応を見せた。エトムントとサラにとっては非情な惨劇でも、この地球では珍しいことではないのだ。
「これからは、ああいうのがもっと増えてくるだろうな」
「そう……あれが収容所よ」
　案外捕虜収容所にはすぐに着いたので話はそこで終了してしまった。フェンスに囲まれた向こう側に金網張りの檻が幾つか並んでいるのが見える。
　さらに近づくと扉の前に警備兵の一人が見えた。煙草を吹かして仲間とへらへらふざけている。サラが軍曹の階級章をつける彼に声をかける。
「捕虜と会いたいのですが、開けてもらってもよろしいですか？」
「んーあ、了解。ああでも、彼には――……」
　彼の目線はブヌトーへ向けられていた。予感はしていたが、どうやらそういうことらしい。
「従軍記者はまずい、？」
「ええ。上からの命令でね」
　エトムントとサラはブヌトーの方を向く。彼は舌打ちを打つと観念したように

「わかった、俺はここで残るよ」
と言った。フェンスのドアが開くと、エトムントとサラは中を進む。フェンスの軋む音を聴きながらブヌトーはカメラを構えた。しかし、ファインダーから覗くことができるのは金網だけだった。
「よう」
声をかけたが応答がない。人違いだろうか。
「……」
まだ濡れた服のままだったハンナは足を抱えて座っていたが、顔を少し上げてエトムント達を見つめた。
「こんにちは」
サラがしゃがみこんでハンナと目線の位置を合わせた。しかし、ハンナの反応はない。それにもめげずサラは続けた。
「私はサラ。よろしくね」
返事を期待していなかったサラは続ける。
「その、ごめんなさい。我々も自分にできることをと、自分のやるべきことをと思って必死なの。私が今しなければならないのはあなたと話すことだと思うわ」
「……私はなにをすべき?」
ハンナが顔を浮かせて訊いた。小さな声だったが、そこに不安があるのは確かだった。
「誰になにを求められているのか、自分がなにをしたいのかに従えばいいのよ。あなたのご両親はなにを望んでいたか、あなたはなにがしたいか」
ハンナは本当にジオンに復讐がしたかったのか。それは違った。なにが償いになるのか、報復を実行するのが自分の役割だと思っていたのだ。そして自分の両親がなにを望んでいたかも知っている。だがそれはハンナにとって自己中心的で、ご都合主義に思えてならなかった。
「わからない……わからないよ」
「取り敢えず、お前はここにいるのにふさわしくないと俺は思うんだ。ここはお前のいるような世界じゃない」

エトムントが落ち着いた口調で言った。ハンナの目はエトムントに向く。
「だから、なんとかする。それが俺の役目だと思ったんだよ。いや違うな、大人の役目だ」
「そう、大人の役目よ。さあエトムント、行ってきて」
追い出すようにサラが続けた。エトムントはサラに押されその場を立ち去る。
「さ、女同士の話でもしようかしら。まずは—名前を聞かせてもらえる？」
エトムントは捕虜収容所から出ると司令部へ向かった。司令部が置かれているのはコンクリートと鉄でできた建物で、元からあった建造物を改造して作られている。屋上には無数のアンテナや配線が張り巡らされ、前線基地や後方の支援基地、通信基地と密に連絡を取り合うのだ。
エトムントは建物の外観から目を逸らし前の扉に歩み寄った。その隣にはガレージへと繋がる大きなゲートがある。警備の兵士に少し事情を話してやると、難なく通る事ができた。
建物の一階にはサウロペルタや一般的な車両などを格納するガレージと先日作戦の話をした会議室がいくつかある。エンゲルハルトはこの階のいずれの部屋にもいないと思われたので、エトムントは階段を使い上のフロアを目指す。確か士官の部屋があるのは三階である。二階には柱や壁を取り払って作られた大きな作戦指揮室があり作戦の有無に関わらず常に通信士や士官が出入りしている。ちなみにその隣にある小さな部屋もそのスケールダウンモデルのようなもので小さな作戦などはそこで指揮を行う。エトムント達パトロール隊への指揮もここで行っているのだろうか。すれ違う士官に敬礼をして階段を登っていく。
立ち止まったのは三階、エンゲルハルトの部屋の前だ。扉は閉まっていてその向こう側の様子はわからなかったが、どうやら部屋の中に人はいるらしい。指を曲げてドアを数回叩く。
「入りたまえ」

「失礼します」
　エンゲルハルトに促されて部屋に入った。
「君はこの前の―ビエナート曹長か」
「はい。少佐には、今回拿捕した捕虜についてお話があります」
　エンゲルハルトは手にしていた資料を引き出しに入れるとエトムントの目をまっすぐ見た。エトムントはそれに臆さないよう気をつけて話を進める。
「彼女はまだ十代の子供です。体力の消耗が激しかったので保護しましたが解放しても問題ないかと」
　エトムントは客観性を失わないようそう言った。
「それで？　解放するだけかね？」
「街で保護してもらいます。当ては一応、あります」
「グラバー中尉はなんと言うかね」
「……」
　彼ならば決して許さないだろう。そのことは容易に想像ができた。
「ビエナート、彼は好きか？」
　唐突に少佐が尋ねた。エトムントの持っていた答えはノーだったが、そういうわけにもいかないだろう。言葉に詰まるエトムントに、エンゲルハルトは言った。
「私はな、あいつが嫌いだ」
　そう言うとエンゲルハルトは豪快に笑った。
　エトムントは言葉が出ずにそれを見ていたが、少し愉快な気分になって顔の筋肉が和らぐのがわかった。
　しかし心配は拭いきれない。もっとも深刻なのがこの基地の司令官である。彼は常に冷静でありそして冷酷だ。恐らくは許してくれないだろう。
「実はな、基地司令は今ご不在だ」
　エトムントの胸中を見透かすようにエンゲルハルトはやや声を細めて言った。
「少々野暮用で。その間私が任されているのだ……。ゲリラの村出身

とは言えただの子供なのだろう？　許可する。明日の朝一番、行ってくるといい」
　案外簡単に進んでしまいエトムントとしては拍子抜けした気分だったが、損はない。すぐに礼を言って部屋を出た。
「……ハンナ」
　サラの質問に答えた。
「そう、ハンナっていうの。いい名前ね」
　ハンナは先の言葉が気になっていた。だからサラの反応に対しても特に返さない。頭の中では常に自分の状況がぐるぐると回っている。
「自分のすべきことって言ったじゃない？」
　そのハンナの黙考を見抜くようにサラが口を開く。優しい姉のような口調だ。
「みんなそれぞれ、自分のすべき事だと思った事をしているのよ。あなたの街を襲ったザクのパイロットだって、自分の仲間を守るためにしたんだと思う。だから許してやって。あなたの村の人達だって同じでしょう？　彼らとの戦闘で、三人の兵士が死んで二人が怪我をしてる。でもそれがすべき事だと思ってしたのなら仕方ない」
　ハンナは黙ってサラの目を見つめて聞いていた。
「あなたも自分のすべきを考えてみて。あなたが復讐をしたいのなら私達はそれを拒否できない。けれど、あなたのお父さんやお母さんはそれを望んでいるのか、よく考えてみて」
「……わかった」
　ハンナがそう呟くと、満足したように微笑んで、サラは別れを告げる。
「ねえ」
　収容所の扉へまっすぐ歩いていた内勤服のサラに、声をかける者があった。女の声だ。
「あのワッパ乗りの男に、あなたの言ってたことは嘘だったって伝えて」
「……わかったわ」

ああエトムントが捕虜にした女だ、とサラは気付いた。了解するとその女はまた壁に寄りかかって寝てしまったのでサラは収容所を後にした。

第七章

第七章

翌日の早朝、エンゲルハルトの手引きによって収容所に入ったエトムントとサラがハンナの檻までやってきた。ハンナは目を覚ましていて、二人が入ってくることにすぐに気づいた。

「私、これからどうすればいいの？」

「したいことをするんだ」

入り口の方からそう声を発したのはエトムントだった。彼は軍服から白いシャツとハーフパンツの私服に着替え、いくつかの鍵を握って寄ってくる。

「そのための自由だ」

エトムントは鍵のうちの一つを使ってハンナを独房から出した。

「え……」

エトムントの言った自由が、本当に自由だとは思っていなかった。彼の台詞がこうしてわかりやすく現実になると思っていなかったハンナは疑問符を浮かべエトムントを見た。

「少佐に話はつけてきた。というより乗り気だったな。お前はこれから街に行く」

「え……？」

未だ信じられないといった様子のハンナにエトムントは続けた。

「嘘なもんか。お前はここにいるべきじゃないと、言っただろう。まずはその格好じゃまずいな。サラ、私服をこいつに貸してやれるか？それと君も着替えてきてくれ」

ハンナは捕虜用の囚人服を着ていた。これでは目立ちすぎるので着替えさせるのが妥当だと思ったエトムントがサラに訊く。

「勿論よ」

すぐに、私服になったサラが私服を持ってきてエトムントを追い出すとハンナを着替えさせた。エトムントとのデートに使ったのはお気に入りのものだったのでサラがハンナに渡したのは比較的地味でサイズ感も誤魔化せるものだった。

「こんなものしかなくてごめんね」
「ううん。ありがとう」
簡単なズボンとシャツ、パーカーに身を包んだハンナを連れてエトムントとサラは収容所から出た。
警備兵ではなく、エンゲルハルトの副官が檻の鍵を貸してくれた。彼は警備兵とは違い真面目で優秀な男のようだ。エトムントは収容所から出ると副官に鍵を返す。礼を言うとハンナを連れて歩き出した。
「笑って?」
ブヌトーがカメラをハンナに向ける。陽気な台詞を吐いてハンナの笑顔を誘ったつもりらしいがハンナはむしろ不愉快そうに俯いたままだった。気を使って副官が止めにかかる。
「元気でやれよ!」
ブヌトーがエトムント、ハンナ、サラの後ろ姿をカメラに収めながらそう言った。どんな意図があったのか、ブヌトー以外には理解しがたいのだった。
「意味なんてないんでしょうね」
サラが簡潔に呟く。ハンナもエトムントも同意を沈黙で示した。
三人が向かっているのはサウロペルタなどが停めてあるハンガー横の駐車スペースだ。
できる限り人目につきたくない。特にあのグラバー中尉に見つかれば面倒臭そうだ。二人でハンナを隠すように囲みながら、足早に向かった。
「準備は済ませたぜ」
駐車スペースには同じく私服に着替えたルカが待っていた。荷物も整えてエトムントの頼んだ通りである。
「ありがとうルカ」
「おうよ」
運転席にエトムント、助手席にルカを乗せ後部二席にあとの二人を乗せエトムントはエンジンを始動した。
「ようし、ドライブだ」

四人を乗せたサウロペルタが、基地を出て街を目指した。
「えっと……俺はルカだ。改めてよろしくな」
「……よろ、しく」
あくまでも飄々と挨拶を繰り出すルカにやや怯えながらもハンナが返した。
「はは、手か？　気にすんな、気にすんなよ」
ルカが自分の素手をハンナの前に差し出して笑顔を見せる。それにハンナは少し安心したらしい。しかしルカが出したのがハンナに噛まれた方の手でないことをエトムントは見逃さなかった。
「危ねえから座ってくれ」
ハンナに見せるためにルカは後部座席に身を乗り出している。いつこいつが車から振り落とされるのだろうかというほどの不安定さに、エトムントはつい苦言を呈してしまう。
道中はルカが喋り倒してくれたのであまり不愉快なものではなかった。うるさすぎて別の不愉快さをエトムントは覚えつつあったが忘れる。終始はハンナもだいぶ慣れたようで笑顔を見せていた。
「着いたぞ。港町だ」
街のはずれに車を停めた。街の真ん中に軍用車で入り込んでは私服に着替えた意味が消し飛ぶからだ。
「どこへ向かうの？」
そう尋ねたのはサラだった。ハンナはルカと雑談をしている。なるほど、多趣味多分野オタクというのはこういう時に役に立つのかと、エトムントも少しは感心できる。
「この前のカフェテリアだ。申し訳のないことだが頼らせてもらうことにした」
エトムントとサラがデートで訪れた老婆の経営するカフェテリアである。二人の脳裏には彼女の笑顔が浮かんだ。
「カフェテリア？」
その単語に反応したのはハンナである。サラは納得したようで頷いている。
「少しだけ憧れだったの、カフェやレストランのウエイターって」

「カフェテリアのウエイターかは保証できないが……。ただハンナ。お前がここで生きていくためには働かなきゃならん。大変なことだが、やれるな？」
ジオンの人間である自分に『やれるな？』と問う権利があるのか、その疑問を持ちながらも、そしてその疑問にノーの答を持ちながらもエトムントは問うた。
「うん、私頑張るよ」
「そうか……」
しかしハンナの答えは無邪気なものだった。三人の大人に罪悪感を持たせたその態度はしかし、三人を安心させるものでもありエトムント、ルカ、サラの三人の心中は複雑なものだった。
「ここだな」
立ち止まったのは例のカフェの前ではなく、服屋の前である。どこかレトロなショーウインドウにはおしゃれな服が飾られている。
「なにか服を買わないとな」
「欲しいものあるか？」
この店の値段の高さを知っていたエトムントは気が進まなかったが、幸か不幸かそれを知らないルカがハンナにそう言った。
「えっと……これ」
ハンナが指さしたのは黄色いワンピースだ。ルカは即決し、他数点、下着などと共にカウンターへ運んだ。金具の小気味いい音と共に薄気味悪い値段が表示される。
「……」
ルカが観念して財布ごと差し出そうとしたので慌ててエトムントとサラが協力する。
「毎度あり！」
二度と来るもんかとエトムントとルカは誓い合った。
「……ありがとう」
礼を言うハンナにルカが見栄を張ってなにやら吹き込んでいる間に、エトムントはカフェテリアの位置を再確認すべくあたりを見回した。分かれ道がそこにはあったのだ。

「えっと、右だよな」
「えっと、左よね」
　同時に自信がよく覚えていない事に気付かされたサラとエトムントは溜息をついた。
　老婆のレストランに住んでいる少年、サイードは自分の仕事が好きだった。極めて育ちの悪い自分にレストランの店員が向くはずもなく、また料理の腕も劣悪だった為に昼間はこうして郵便配達の仕事をしているが、彼はこの仕事を大いに気に入っていた。
　街中を自転車で走り、住人達に手紙を渡していく。
　この戦争が始まると、電波通信の信頼性は大きく下がった。通信衛星はジオン軍によって破壊され、長距離電波通信も各地で散布されるミノフスキー粒子によって阻害される可能性がある。
　そんな中これまでポピュラーな連絡手段ではなくなっていた紙媒体による手紙が、電波通信に替わる連絡手段として注目されると、これまで規模が縮小され続けた郵便局は大いに困った。何故なら人員とシステムがパンクしたからである。その為、暫定的に取られた対策が彼らのような下請けのバイトだ。
　老婆に引き取られた彼がなんとかして自分でもできる仕事を探し手に入れたのがこの仕事だ。初めは小遣い程度にしかならなかったが、本格的に電波通信が不便になると需要も増してきたので満足な額が貰えている。無職の人間にとっても羨ましい職業らしい。
「へい！　これ持ってきな！」
「お、ありがとう！」
　出店の主人からよく焼けたチキンを受け取ると、片手でそれを頬張る。車道の人々の隙間を縫ってスイスイ進んだ。大通りの交差点を左に。その先に見えるコンクリートのビルが目的地兼最後の送り先だ。
「よっ……と」
　プラスチック製の軽量な自転車のペダルを楽に漕いでビルの前に止める。サイードは緑色の大きな肩下げ鞄を抱えてポストまで歩く。

「お、郵便かい」
「うん。五通あるんで、任せるよ」
五通の封書をまとめて管理人の男に渡すと、軽快な足取りで自転車に跨った。
「それじゃ！」
軽くなった鞄を籠に入れてペダルを漕ぐ。誰だってさっさと昼休みは早く取りたいものだ。
彼がこの仕事が好きなのは、単に報酬が理由ではない。一番の理由は、自転車で街を走り回るのが気に入ったからだ。こうして街に溢れる人々やビルの谷間から顔を覗かせる太陽を眺めながら自転車で風を感じるのは最高だった。
「ん？」
市場の広い道の真ん中で立ち止まっている白人の―この宇宙世紀〇〇七九にそんな表現はいささか時代遅れだが―一行が目に入った。
あんな場所で立ち止まるなんて、余程非常識なよそ者らしい―と思えば、見覚えがあるではないか。確か昨日、レストランに来ていた男女だ。その二人に、知らない男が一人付いている。
「レストランなら右だよ」
声をかけると、白いシャツを着た男は振り返った。
「ありがとう。君は……」
「あら、レストランにいた子ね」
女の方も顔を出す。レストランにいた時は大して気に留めなかったが、よくよく見るとかなりの美人であることが伺える。
「そうだよ」
そう言ってサイードは下を向く。すると目が合う少女がいた。
―その時サイードが受けた衝撃は、彼がこれまで受けたことの無いものであり、彼に全身の血液が沸騰するような感覚を覚えさせた。顔が熱くなり、途端に頭の中身は真っ白に脱色する。
「あ、あああの子は？」
顔を真っ赤に染め上げ落ち着かない口調で聞き立てる少年を見

て、エトムントはなんだか懐かしい感覚を覚えた。自分にもああして恋い焦がれた時分があった。質問に答えてやる。
「ああ、彼女は……訳ありでな。お前んとこでお世話になるかもしれん子だ。詳しくは本人から聞きな」
「……決めた、俺が案内するよ。俺がいた方がばあさんとも話が通しやすいだろ？」
少々無理があるようにも聞こえたが、では頼むとエトムントも彼の小細工に協力してやる事にした。子供の恋愛に大人が首を突っ込むのはよろしくないが、協力してやっても悪くはないだろう。
てくてく先導して歩いていく少年にエトムントは声をかけてみた。
「そういえば、お前の名前はなんて言うんだ？」
「サイード！」
「そうか。じゃあよろしくな、サイード！　俺はルカだ」
割って入ってきたのはルカ。ハンナはサラの横で不思議そうにこちらに視線を送っている。
「俺はエトムント。こっちはサラだ」
「よろしくね」
エトムントは簡単に自分とサラを紹介したが、ハンナの事は触れないでおいた。
「えっと……君は？」
「……ハンナ」
エトムントの気遣いに気づき、勇気を出してサイードはハンナに声をかけた。ハンナはサラの後ろに隠れるようにして警戒しながらそう、答えた。
「そっか。よろしくハンナ！　俺はサイードだ」
「うん、よろ、しく」
エトムントやルカ以上に警戒心を見せている。そんなハンナの態度にややショックを受けた風のサイードをルカが励ましてやっていた。ルカはエトムント以上にこういう時、やたらと協力したがる性格だった。—その結果が良いものであったことはあまり聞かないが。

「ほらハンナ！　そんなに警戒することないぜ」
　しかしハンナはサラの背後から出てこようとせず、サイードが無理矢理自分を立ち直らせる方が先だった。
「ま、まあ。さっさと行こうぜ」
　大股で大袈裟に歩くサイード。エトムントの少年時代がこうだったわけではないと彼は主張したいが、どこか昔の自分と重なり、無性に恥ずかしくなった。
　なんとなく見覚えのある町並みを歩いていくと、やがて例のカフェテリアが見えてくる。
「ここだよ。さ、入んな」
　サイードはたたたっと店内に入り、扉を開けてくれていた。ベルの音が店内に響く。
「こんにちは」
　店内に入ったサラが声を上げた。カウンターの向こうで椅子に腰掛けている老婆へ向けた挨拶である。
「あら、この前の」
　店主でありこの店ただ一人のウエイターでもある老婆はぱっと笑顔を見せ、挨拶を返した。ハンナを含む全員が挨拶を交わすとエトムントが本題に入る。
「実は、今回は客じゃない」
　エトムントは自身のそばにハンナを寄せる。ハンナは不安そうだったが、老婆の笑顔を見て多少安心したようだ。
「なんの用ですかな？」
　老婆は椅子から立ち上がり笑顔で尋ねた。
「この子は戦争で家族や友人を失った。行くあてなんかない。しかし、このまま軍のそばで過ごすのは酷すぎる。だから……」
　老婆の表情がやや硬くなる。だがそれでも笑顔に変わりはなかった。
「ここで、この子を引き取ってほしい。礼も払う」
「私も、ここで働きます！」
　ハンナが勇気を振り絞った声で言った。

「なあ……俺からも頼むよ。この町には同い年の奴がいなくて……その、退屈だったんだ」
サイードと老婆に願い出た。老婆は少しの間考えていたがすぐに答えは出たようだ。口を開いた。
「わかった。ここで暮らしても構わないよ」
「ありがとう！」
「本当かばあさん！」
ハンナとサイードは感激して必要以上に大きな声でそう言った。
「条件はハンナがここで働いてくれる事だ。そうすりゃ家賃もできるだけ安くするし、三度の飯と電気代もつけるよ」
「ありがとう！　勿論働くわ！」
「じゃあ、荷物を置いてきなさい。サイードも手伝いな」
店主の老婆にそう言われると、すぐに二人は木の階段を上がっていった。
先程までとはがらりと空気が変わったのをエトムントは感じた。老婆は、今度は真面目な面持ちでジオンの男たちを見つめる。どっしりと構えた器の大きな女性だ。
「あの子について、もう少し詳しく聞いておきたいのです」
そう促されて、エトムントが彼女について知っている事を説明する。隠したことは一切ない。ルカやサラの保管もあり、かなり事実に近い事を説明できた自信があった。
「……悲しいねえ」
一通りの説明を受けて、老婆はそう感想を漏らした。
「彼女について、なにか気付いているかい？」
それから老婆はそう質問を投げかける。一見すると意味のわからない質問だった。
だが、その質問をサラは理解していた。
「彼女はおかしい」
サラが端的に、明白に、残酷に、そう言い放った。ハンナはおかしいと。異常であると。
「どういうことだ？」

エトムントとルカは驚いてそう質問する。
「いくら私達が説得したところで、普通はあんなに心を開かない。心的外傷後ストレス障害やストックホルム症候群だと私は思うわ」
心的外傷後ストレス障害―ＰＴＳＤ―とは、精神が強いショックを受けた場合に残る後遺症だ。彼女は目の前で親を失い、村が焼かれる光景を目に焼き付けた。それが強いショックであっても不思議はない。
「確かに、俺たちが行った時彼女は起きてた。不眠も症状の一つだが、それだけで―」
「……」
サラは目を閉じる。
「そう言えば、あなたの捕まえた連邦の捕虜が、あなたにこう伝えてって言ってたわ―あなたの言っていたことは嘘だった」
「ジオン軍人は南極条約を守る、目的があるから。そう言った」
「警備兵の中に女はいなかった。不真面目な連中ばっかりだ。俺もこんな可能性を示唆したくはないが―」
―レイプ。戦争と略奪は常に隣り合わせであり、レイプは略奪の筆頭だった。
常に弱者が虐げられる略奪において、女子供は最初に犠牲となる。時には十四の子供が手込めにされることだってある。
ストックホルム症候群は自分の命を握る相手に対し無条件に好意や同情を持つことだ。ジオンに家族と村の仲間を根絶やしにされ、ジオンに捕縛されジオンに拘束され―彼女が寝ずに考え出した自分の生き方。
―それが、ジオンに共感しジオンの人間に好意を抱くことだった。
残酷で、無情で、無慈悲で、非情な現実。それが戦争だ。戦場だ。
「そう。彼女は心に傷を負ってる。サイードが来たばかりの頃よりよっぽど深い」
エトムントとルカはなにも言葉を発することが出来なかった。これ以上話す資格がないようにも思える。

「彼女はもう、戦争に関わってはいけない。普通の平和な生活を送るべきなんだ」
　けれど、なんとか本題についての台詞だけは紡ぐ。
「あなた達はもう二度と彼女の前に姿を現さないで。それだけが条件よ」
「わかりました」
　老婆の提示した条件に、サラは即答した。条件であると提示された以上、彼女の中で拒否するなどといった選択肢は存在しなかったのだろう。
「あの子の為です。残念だけど、今はそれが一番」
　老婆の顔が、一瞬だけ昨日の快活な店主の顔に戻る。
「では、よろしく頼みます。それじゃあ」
「ええ、いつかまた会える日が来る事を願ってますよ」
「さようなら」
　別れを告げた三人は、店を出た。
　ハンナは、きっとゆっくりだが自分の中のトラウマと決着をつけ、自分の生き方を見つけるだろう。いつか愛する者とも出会い、幸せに生きて行くはずだ。戦争なんかに囚われたりはしない。
　そう、信じた。
「これでよかったんだろうか」
　エトムントが空を見て呟く。
「私達にできることはこれぐらいよ」
　彼女の肉親や親友を殺した組織の一員として、あるいは大人として—エトムントも、できることはしたつもりだ。あとは彼女らに任せるしかない。そうは分かっていても、漠然とした不安に襲われる。
「いつか、成長したあいつと会ってみたいものだ」
「会えるさ。そん時隣にサイードがいたらなおいいな」
　ルカがそんな風に言ってみせた。うむ、確かにそうだ。彼の恋路の行方も気になるものだ。
「けれど……そうね。　彼女が幸せに生きれるよう、祈りましょう」
「ああ」

エトムントとルカも返す。

「じゃあなー！」

若い活気のある声に引かれて振り向くと、レストランの二階から手を振るサイードと、その横で小さく手を振るハンナが見えた。

エトムントは立ち止まり、できる限りの優しい笑顔を作って手を振り返す。

彼女らが幸せな人生を歩む事を願って。

Ｅｐ２．　翼を広げよ！　―ＦＦ―３　ＳＡＢＥＲＦＩＳＨ―

第一章

第二話　翼を広げよ！

第一章

戦争は常に進化し続ける。まるでそれ自体が生物であるかのように。先史時代から人類の歴史とともに歩んできたそれは今現在もまた姿を変えようとしていた。ミノフスキー粒子の軍事応用である。これによりレーダー、無線通信等の近代的な装備は無力化され連邦軍は大敗を喫した。ミノフスキー粒子の軍事応用。これは軍事における革命の一つである。レーダーや無線は実戦において無用の長物となり、時代は有視界戦闘と光学機器の時代となった。レーダーと無線誘導ミサイルに頼る、時代に置いていかれた彼らは果たして生き残ることができるのだろうか。

『ク……が！　ミサイ……らない！　……』

夏の東南アジアは乾季である。雨は滅多に降らず乾燥している。つい先日雨が降ったがそれは例外であり、乾燥した空気が椅子の上で仮眠をとる男の周りを包んでいた。

「ミサイルはデッドウェイトになるだけだ！　捨てて機関砲で対処しろ！」

戦闘濃度のミノフスキー粒子の中、複数の戦闘機が空を飛び交っていた。当然無線電波はミノフスキー粒子の粒に干渉される。聞こえてくるのはその中で運良く飛んでこれたものであり、自分の声が相手に届かないことも十分知っていた。しかし、叫ばずにはいられないやりきれなさがある。現代の戦闘機が使う通信、レーダー、誘導そのすべてがミノフスキー粒子により無効化され、その中で自由自在に飛び回る敵が現れたのだ。

爆音。また一機の友軍機が撃墜されたようだ。パイロットはそれを横目で見ながら弔う。そして反撃に転じた。彼の握る操縦桿の

電気信号に鞭打たれ彼の駆るフライアロー制空戦闘機は旋回した。フライアローは三発エンジンを備え、ミサイルの搭載数を上げている。いわば戦闘機の『ミサイルキャリアー』としての側面を前面に押し出した設計思想をもって生まれた機体。そのミサイル搭載量は他を圧倒し敵機を次々と落としていく事を期待されたが、それはつまりミノフスキー粒子下ではほとんど役に立たないという事実を語っている。

推力偏向スラスターによってペイロードと矛盾するようにすら思える急角度で旋回するフライアロー。それに目をつけたジオンの戦闘機ドップが接近した。ドップは、宇宙に住む人間が考えた航空機である。ミノフスキー粒子散布下での戦闘を念頭に開発され、コックピットは周辺視野が広く取れるよう張り出した形状に設計されている。翼の上にミサイルを積んだポッドを装備するがそれを載せても問題のない高機動力を力強いエンジンによって実現している。

「食いついた!」

現代では珍しい複座型の戦闘機であるフライアロー。その後部座席に座る相棒がそう叫んだ。彼はレーダーやミサイル誘導を担当するがミノフスキー粒子による電子機器の無力化、そしてドッグファイトに突入した現在はもっぱら目視による索敵に専念していた。

ドップはフライアローの真後ろにつき、機関砲による撃破を狙った。

「全ミサイル、パージ」

その時、パイロットが呟く。フライアローはミサイルを捨てた。発射でも投下でもなく、ただ廃棄したのである。

空中に投げ出されたミサイルは自分を搭載していた機体に置いていかれ、空を漂った。

そして、空対空短距離ミサイルは後ろから追いかけてきたドップの機体に激突した。衝撃音。すかさず爆発音が轟く。

「見たかよ!　一つ落としてやった!」

そう言って後方に吐き捨てた後部座席の男はしかし驚愕する。冷水を浴びせられたかのように血の気が引くのがわかった。ドップ

が爆散した黒煙の中から、もう一機のドップが飛び出してきたのだ。黒煙に混じるような漆黒のカラーリングである。
「まだいるぞ！」
回避しようとブレイク、急旋回を始めるフライアロー。しかし単純な機動性能ではドップが優っているのだ。難なく追いついてくる。
そして遂に黒いドップの航空機関砲が火を吹いた。その瞬間、激しい衝撃がフライアローの機体を襲う。
「がああああ！」
機内に警告音がこだまし、機体の制御が不能になった。
「ベイルアウト！」
世界が吹き飛んだ。否、すぐに現実が押し寄せそれを否定する。彼の乗っていた座席は機体から射出され空を舞い、すぐにパラシュートが開いた。傘が空気を受け止めると衝撃の後に浮遊、落下が始まった。そして気付く。
「グラハム！　グラハァァァァァァム！」
後部座席に座っていた相棒は未だに機内に収まっていた。轟音を立て、煙と炎を吐き出しながら墜落していくフライアローの機体は、空中で爆発四散した。
「隊長……」
椅子の上でうなされていた男、メルヴィン・ライアンは部下に起こされて現実の世界へと帰還した。
「うなされていましたよ。これ、紅茶です」
ここは地球連邦空軍基地。七ヶ月前に地球連邦軍へ宣戦布告をしたサイド３―今やジオン公国は現在もなお戦線を拡大している。母なる地球の半分は彼らのものとなり、血は世界中を染め上げた。
「すまない」
背もたれから背中を浮かすと、メルヴィンは紅茶を啜った。
「基地司令がお呼びです」
彼女の声は、この場所に不似合いだ、といつもメルヴィンは思っていた。女性特有の高い声、中でも可愛げのある若い彼女の声はこの戦場には不似合いに思えてならなかったのだ。彼女はリア・オルグレ

ン少尉。彼女は隊員たちの作戦をサポートするオペレーターである。もっとも、彼女の可愛らしい声は兵士達に好まれているが。

メルヴィンがいるのは戦闘機を収容するハンガーである。その大きな扉がゆっくりと開き、眩い日光が差し込んだ。

どうやら数時間前に飛び立った攻撃隊が帰還したらしい。今回も大敗のようだ。通常ならありえないほどの損失。しかしそれにも慣れてしまいそうだった。この基地はこの地方最大の航空基地なのだが、過去にも数回攻撃隊が全滅したことがあったのだ。そのためいつもこの基地の、一番奥のドックは空となっている。

「さあ、落ち込んでる暇はないぞ！　俺たちの仕事だ！　レスキュー、整備班用意！」

「お……おう！」

途端に周囲が騒がしくなる。パイロットの負傷に備えレスキュー、機体の破損に備えて整備班が慌ただしく滑走路に走り始めたのだ。

開ききった扉の向こう側に見える滑走路の上でゆっくりと牽引される攻撃機、マングースが覗けた。それを見た少尉は驚愕し呟いた。

「嘘……」

攻撃機マングースはＡ１０という西暦の対地攻撃機をモデルにしており、モデルと同じような群を抜く耐弾性能、そして対地攻撃能力を有している。一番の特徴は機体に突き刺すようにして配置された７５ｍｍ自動砲である。大口径の砲を空から放つという本機の設計思想は悪魔の設計思想とも言われた。一般的な戦闘機より安く、それでいながら有効な対地攻撃を展開する本機は戦場において大変歓迎され、兵士の救世主となりえた。故に旧式でありながら現在も使われ続けている名機である。

その名機が、誇りを完全に失うほどの損傷を負っていた。右主翼は半分ほどで千切られ、エンジンからは黒煙が吹き出している。よくぞこれで帰ってこれたものだとメルヴィンは思った。パイロットも疲労困憊といった様子で、クルーに抱きかかえられて運ばれていく。

メルヴィンは椅子から立ち上がると、扉のあたりまで歩いた。そして気付く。
帰ってきたのはさっきのあいつだけだ。他に帰還した攻撃機はなく、護衛の機体が二機。それだけだ。これはこの基地史上最大の敗北であり損失である。
「……基地司令のところへ行く」
そう少尉に言い残してメルヴィンはその場を後にした。この基地は地球連邦軍の紛争介入と民間の空港としての機能を持っていたことから比較的設備は充実している。メルヴィンは基地内の廊下を歩きながら服装を整える。廊下にはＬＥＤの電球が並んでいて明るい。窓からは遠くに山の稜線が見えた。それが終わる頃、丁度基地司令のいる部屋に着いた。ドアをノックし、返答があるとメルヴィンは部屋に入った。
「何のご用でしょうか」
そう言うと、基地司令はにやりと笑う。基地司令は変わった男だ。クリーム色の髪を短く切り揃え、目を常に細めていて温厚な紳士といった風貌をしている。
「相変わらず無愛想だな。帰還した彼らを見て、皮肉の一つでも飛ばしてもらったらこちらとしても気が楽だというのに」
あの失敗が、そんな風に済むようなものではないのは誰の目にも明らかだった。基地の攻撃能力殆どを投入しそのほとんどが撃墜されて帰ってきたのだ。下手をすればこの基地が陥されかねない。
「案ずるな、すぐに補充の部隊は来る。腐っても連邦軍。戦時体制ならばそれぐらいの兵器生産能力はあるというわけだ。補充の部隊と共に、機体もよこしてくれるそうだが、大尉。君には新しい機体のパイロットになってもらう」
基地司令のデスクの横に立っていた副官が書類をメルヴィンに手渡した。それには《ＦＦ３　セイバーフィッシュ》と印刷されている。
「七ページだ」
セイバーフィッシュとはハービック社製、連邦軍の戦闘機であ

る。開発は空軍と宇宙軍の合同で行われ、少しのパーツの換装により大気圏内も宇宙空間も飛行できる汎用性の高い戦闘機として完成した。

本機最大の目玉はブースター・ユニットである。機動力強化及び兵装システムとも言うそうだ。ミサイル・ランチャーを計十二基と機動力と航続性能を大幅に強化することのできるシステムで、これが大気圏内戦闘機と宇宙空間戦闘機の両立という偉業を成し遂げたのである。

「見て分かる通り、支給されるのはC型のセイバーだ」

C型は空軍仕様である。初期型であるA型からの主な改修点は推進機関をジェットエンジン一種に。それと降着装置の強化。これによって宇宙軍機向けであったブースター・ユニットを装備し飛行することが可能になった。

「ブースター・ユニットの配備は間に合わなかったそうだ。君達にはブースター・ユニットを使用せずにセイバーフィッシュを乗りこなしてもらう」

ブースター・ユニットを装備しない状態のセイバーフィッシュの兵装は２５ｍｍ機関砲が四門。ミサイルのハードポイントは胴体下に四、翼下に四つであり、計八基である。中距離ミサイルを四発、短距離ミサイルを四発が装備可能。

制空戦闘機としてセイバーフィッシュは優秀な電子機器と火器管制システムが与えられている。ブースター・ユニットを装備せずとも強力なエンジンによる高速、高機動の飛行が可能な機動性能を併せ持つ。

地球連邦空軍に配備された制空戦闘機のうち、フライアローは弓兵である。ミサイルキャリアーとして大量のミサイルを装備し、敵に矢を射る。そして混乱した敵陣へと真っ先に切り込むのが剣士、セイバーフィッシュである。

まさに、地球圏最強の格闘戦闘機であったのだ。

資料を読めばわかるが、ミノフスキー粒子の中でも作戦行動が取れるよう航法装置の改修とレーザー通信装置も導入されているよう

だ。これによって、現在においても連邦軍最強の戦闘機と呼んで間違いがないだろう。
「増援部隊が到着したら明日また第二波攻撃に出る。大尉はセイバーフィッシュで出撃してくれ」
「複座から単座への移行は難しくないはずだ。フライアローとセイバーフィッシュの操縦系統にも違いはない。少々無茶だが、やるんだ」
「……了解。作戦時刻は？」
無茶な命令にメルヴィンは従う事にした。なお冷静にメルヴィンは作戦のイメージを組み立てる。
「早朝〇二〇〇時」
副官に変わり基地司令がまた口を開いた。
「地球連邦は劣勢を強いられている。だがそれもこれまでだ。所詮奴らが大きな顔をできるのは七ヶ月程度だという事を分からせてやってくれ」
「はい」
メルヴィンは軽く敬礼をすると部屋を後にした。やれやれ、地球連邦も追い詰められている。機体は送れども、それを使える兵士が少ないのだ。あまりにも腐敗している。その腐敗がこの戦争を長引かせたことは明白であり、自身もまたその内の一人であることを憂いた。
本来、地球連邦政府が、地球連邦軍が存在する上で戦争はあってはならない。地球を守る為の地球連邦軍ではあっても、誰かと戦う為の地球連邦軍ではないのだ。人は戦争を嫌う。平和を願う。地球連邦軍は抑止力であり政治が戦争へと姿を変えない為の砦だった。
平和を欲するなら戦争を理解せよ。平和主義が平和をもたらすとは限らないのだ。
スペースコロニーで反地球連邦デモが行われた時。それが暴徒化し、死者を出した時。ジオンが軍備を拡大した時。人々は平和主義であろうとした。
第二次世界大戦、という戦争は現在でも常識として人々に認知さ

れている。世界中を巻き込んだ愚かな戦争であると。しかしその第二次世界大戦は、独裁者が進める軍備拡張を周辺国が、戦闘へと踏み出せないことで止められなかったせいで拡大したとも言える。
　それと同じことが、その時起きたのだ。マスメディアがスペースノイドを警棒で殴りつける治安部隊を報道すると、市民はデモの鎮圧に乗り出した地球連邦政府のやり方を批判した。反地球連邦を掲げるデモを鎮圧した地球連邦を、地球連邦の市民が批判したのである。それ以降地球連邦のスペースノイドに対する規制は慎重を期すようになっていった。その所為でスペースノイドの反地球連邦デモやテロは加速していき、ついには歯止めが効かなくなっていた。
　それでも当時から経済制裁や軍備の強化は行われていたが、もっと早く事態を飲み込めていたら結果は、現在は違っていたであろう。が、それを言っても仕方がない。地球連邦の腐敗は自分が入隊した頃から進んでいたのだ。
「隊長！」
　駆け寄ってくるリア少尉の声で現実に引き戻されるメルヴィン。
「どんな話でしたか？」
　メルヴィンがリア少尉に基地司令が語った方針を話してやると
「一日で機種転換？　基地司令、強引すぎ」
　とブツブツ怒り出した。別にお前が怒ることじゃないだろうと思ったが彼女が隊員に真摯なのはいいことだ。黙っておくことにする。
「にこにこしてて怖いところありますよね基地司令」
「ああ。……だが上官の悪口はもっと人のいないところで言え」
　そう言うとリア少尉は顔を赤らめてすみません、と詫びる。
　ハンガーに着くと搬入途中のセイバーフィッシュがあった。牽引車に引かれなにもなかった一番奥のハンガーに収容されている。
「どうも。あなたが隊長さん？」
　駐機されたセイバーフィッシュのコックピットを解放し、タラップから降りたパイロットがそう言った。
「おっと失礼。私はただの技術屋です。セイバーフィッシュ専属のメ

カニックで、名前は―」
　そう言いつつヘルメットを脱ぐ。東洋系の顔立ちをした男はポケットから眼鏡を取り出してかけた。
「―アツシ・ユンです」
　軽快かつ軽薄なその口調は厳しい戦場を知らない若い技術士官だからだろうか。階級は技術中尉。
「そうか。よろしく」
「ええ。よろしく」
　軽く握手を交わすとメルヴィンとユンは機体に近づいた。
「ＦＦ３Ｃ。ご存知、宙空軍共同開発のハービック社製制空戦闘機。乗員は一名。全長は二十メートルで、全幅は約十五メートル。最大速度はマッハ四。従来の戦闘機としての流れを踏襲しつつ航空、航宙どちらも使える優れもの。ミサイルを積んでばかりのアローとは格闘性能が違います。それに加えて、こいつらはミノフスキー粒子散布下の戦闘に対応したＦＣＳと電子装備、航法装置を搭載。従来の戦闘機のように、なにもできずに叩き落とされるようなことはもうありません。レーダーが使えないのは相変わらずですが映像解析技術によって、有視界戦闘であればほぼ変わらない索敵性能が出せます。今でも最新鋭機ですよ、こいつは」
「ミサイルの誘導は？」
「ミサイル……はセミアクティブ・レーザー誘導のものを導入してます。あなたが敵の尻にぴったりくっついて、こいつを発射して、そのままレーザーを敵機に当て続ければミサイルはまっすぐ向かっていきますよ。敵の戦闘機が使っているのもこのシステムです」
　そんな芸当が戦闘中に簡単にできるはずもないが、しかし文句はない。少なくとも、これまでのようなアクティブ・レーダー誘導よりは遥かにマシだ。
「なるほど。ともかくありがとう。―それと、次から敬語はなしでいい」
　その方が彼はやりやすそうだ。どうせ敬語だとかそういう形式的な事は無視して研究に必要な合理的なことだけやってきたタイプ

の人間なのだこいつは。案の定、そう言われて嬉しそうにしていた。
「了解、よろしく大尉」
　コックピットの中でメルヴィンは、無意識のうちに胸が高鳴るのを感じていた。上位機種。それも近代化改修によって事実上の最新機種だ。そんな機体に乗って喜ぶのは、やはりパイロットの性なのだろう。
『こちらは管制。クローバー・ワン、発進準備はよろしいですか？』
「問題ない」
　セイバーフィッシュのコックピットで、メルヴィンはヘルメット越しに前方の景色を睨んだ。人や物がいないことを確認し、徐々にエンジンの出力を上げていく。エンジンの甲高い音が徐々に高まり、長い滑走路をセイバーフィッシュの機体が滑る。やがて車輪が地面から離れると、揚力を得た翼によりセイバーフィッシュは空と一体化した。
『クローバー・ワン！　こいつで飛ぶのは初めてだな。よろしく頼むぜ！』
　メルヴィンの機体のやや後ろに分隊の僚機、クローバー・トゥーが並ぶ。そして少し離れた位置に二機のセイバーフィッシュが飛行している。二対二による演習の隊形である。敵の背後を取り引き金を引いた方の勝利。今まで散々繰り返してきたものだった。だが新しいこの機体。今までと勝手が違う部分も多い。計器類がフライアローとほとんど同じなのはありがたかったが、複座型が単座になった分レーダー等の操作は自分でやらなければならないし、機体の癖も把握しなければならない。
『管制です。しっかり見ていますよ』
　無線からはリア少尉の声が流れる。下で彼女がデータを取っている。
「使用装備は機関砲。いいな」
『勿論です！』
『今度こそやってやるぜ、クローバー・ワン！』

目の前から迫ってくるのが対戦相手の二機、クローバー・スリー、フォーだ。どちらもこちらと同じセイバーフィッシュである。すれ違ったところでドッグファイトが開始する。

『戦闘開始』

メルヴィンは操縦桿を倒し通り過ぎた敵機の影を追う。しかし、敵機も同じようにメルヴィンの背後を狙った。互いに旋回し合い空に円を描く。エンジンの音が轟き、キャノピーに太陽の光が反射しながら回転した。そう、これこそが戦闘。これこそが空だ。

ドッグファイトは、会敵した敵機の背後を狙う為、戦闘機が互いに相手を追尾し合うことから付いた名だ。旋回する二機の戦闘機を、尻尾を追いかけ回す二匹の犬に例えたのである。

天空を駆け回る二匹の犬が円を描く。

『しつこい！』

敵機は隙を見て急降下を始めた。メルヴィンもそれを追撃する。敵機は更に宙返り、急旋回を繰り返しなんとかメルヴィンを凌ごうとするが、それでもメルヴィンは離れない。メルヴィンは快感すら感じていた。これまでのように腹が地面に引き込まれながら旋回する感覚がない。自由に風として空を舞っているのだ。翼が空を裂き、エンジンが炎を吐き出し熾烈な犬同士の戦闘が続いている。低高度を駆ける敵機に急接近し追いかける。だが敵機は洗練された動きで回避運動を繰り返し、宙返りを決めた。メルヴィンの背後を取った。しかしそれでもメルヴィンの方が一枚上手であった。メルヴィンは瞬時に減速し、クローバー・スリーはメルヴィンを追い越してしまう。再びの形勢逆転により敵機を捉えたメルヴィンは左右のペダルで微調整を加えると機関砲のトリガーを引いた。鉄の当たる音がするが勿論発砲はない。代わりに敵機、クローバー・スリーが捨て台詞を残して離脱していく。

『畜生！』

メルヴィンはコックピットにある画面を見て僚機の位置を確認する。そして僚機と、それと戦闘をする敵機目指して突き進んだ。

自分とその対抗機目指して直進する新たな敵機。それを見逃す

はずはなく、残った敵機は機首を向けて彼を照準に捉えた。
敵にロックされた事を確認すると、メルヴィンは急上昇を始めた。直後に旋回を繰り返し、無理矢理ロックを外す。メルヴィンを追尾し続けた敵は、もう一機の敵機に気付かなかった。
『貰ったぜ！』
そして、メルヴィン機に機首を向けていた敵機にクローバー・トゥーが噛み付いた。
『やられた！』
ミサイルの被弾判定を受けた敵機は離脱していく。
『やっぱ、隊長にゃ敵わねえな』
先ほど離脱したクローバー・スリーが並走するワン、トゥーの後ろに合流し、そう呟いた。
『フライアローよりずっとマシだぜ』
彼らはセイバーフィッシュでの初飛行だったが難なく乗りこなし、ドッグファイトまでやってみせた。一般的にはエース部隊である。もっとも、東南アジアの田舎の基地なので練度が保てるというだけで、大して戦力増強も行われず、また戦略的にも優先度は低いので彼らがエース部隊として名を馳せる事はないのだが。
「こちらクローバー・ワン。もう少し慣れてから降りる」
『了解しました。お気をつけて』
リア少尉にそう告げるとメルヴィン達クローバー隊は再度、大空を舞った。
メルヴィン達が装着しているヘルメットは機体と接続する事でＨＭＤ（ヘッドマウントディスプレイ）として機能する。ＨＭＤとは頭部に装着するディスプレイであり、ヘルメットのバイザーに投影されるのは照準や戦術データリンクによる各種の情報、デジタル化された視界である。これは眼球の動きに対応することで非常に高度なパイロット支援を可能とする。一時期はＨＭＤに完全に頼り切る操縦法もあったが、最新鋭のセイバーフィッシュには汎用性などの理由からＨＵＤ（ヘッドアップディスプレイ）も装備されている。ＨＵＤとは画面上にデジタルデータを投影し、現実の情報を拡張するものであ

る。セイバーフィッシュを含む多くの戦闘機では目の前にある透明なガラス板に投影される。

『流石隊長』

メルヴィンはヘルメットに表示される情報を時々確認しながら様々な機動を試した。どれも高い完成度で成功する。メルヴィンの練度とセイバーフィッシュの性能が合わさった結果であった。メルヴィンはもう一度加速し急旋回した。

彼らはノーマルスーツと呼ばれる与圧機能を持ったスーツにフライトジャケットや酸素マスク、救命胴衣、ヘルメットを着用して搭乗する。ノーマルスーツを着るのは戦闘機で飛行する際パイロットに掛かるGによって脳に血液が供給できなくなり視野を失ったりする現象を防ぐためである。これは宇宙軍も空軍も採用しているが、空軍で使われているものは不必要な生命維持装置など宇宙服としての機能をオミットしたものだ。

比較的重い機動のフライアローと違いこちらは軽々と飛び回れる。それは戦闘機のパイロットとして気持ちのいいことだった。できることならバイザーとキャノピーを開いて風を直線感じたいくらいだ。メルヴィンは気が済むまで飛び続けた。

第二章

第二章

連邦軍のミデア輸送機《ペリカン》と《フラミンゴ》の影がジャングルの鬱蒼とした森に落ちる。ミデアが腹に抱えるコンテナには地球連邦の航空機に使う物資が山積みになっている。さらにその二機の後方には攻撃機マングースや爆撃機フライマンタが飛行しており、護衛の戦闘機もいる。

ミデアとは地球連邦軍のＶＴＯＬ輸送機で四発のジェットエンジンを備えた巨大な航空機である。腹に抱えるようにして配置されたコンテナには大量の物資を詰め込むことができ、地球連邦軍が世界各地に展開できるようになっている。

ミデアには交代の操縦手二人が睡眠をとり、また食事や排泄を行うスペースが確保されている。

「やっと勢力圏だね」

カーテンをめくりベッドスペースから出てきたのはタチアナ中尉だ。この輸送隊の副隊長でもある。隊長はもう片方のミデア《ペリカン》に搭乗している。

「ええ。しっかし暑すぎやしませんかねえ！」

彼らはアジアでもロシアに近い地域から輸送に来ている。だからこの暑さには慣れていなかった。黒人—という区別は今やなくなりつつあるが—肌の黒いルーカス軍曹が文句を垂れる。

「エアコンつけちゃう？」

「ええ、そうしましょうぜ」

二人は目を合わせてエアコンのスイッチをいれる。僅かな機械音が響くと、冷たい空気が機内に流れ出した。残余電力などの都合から禁止されていたエアコンだ。

「あとで隊長に怒られませんか」

サングラスをかけ操縦桿を握る操縦手がそう言った。しかしそれほどまでに東南アジアのこの暑さはきつい。

「大丈夫大丈夫！　きっと行き先の基地で電気なら補給できるよ」

その時にゃー、という鳴き声が聞こえた。その正体はタチアナが連れ込んだ猫である。黒い毛並みで青い目をした猫だ。
「それにほら……暑いとこの子が心配でしょ？」
タチアナは笑って猫を持ち上げる。猫を連れ込むなどという行為は軍規を逸脱しているが彼女の性格には皆もう慣れてしまっている。
「ちなみにレーダーは？」
副操縦士でもあるルーカスにそう訊くと彼は答えた。
「ミノフスキー粒子による電波干渉は認められず。敵機もなし。綺麗な空ですぜ」
その答えにタチアナは安堵し口笛を吹いた。行き先の基地まで安全に飛べそうだ。
『じきに輸送隊が到着します。地上に降り―ん？』
飛行中にリアから通信が入った。メルヴィンはそちらに意識を回す。
『どうした？』
『申し訳ありませんが、輸送隊の出迎えをして頂けないでしょうか』
「了解した。各機、聞いての通りだ。俺に続け」
現在基地に残っている防空戦力はクローバー隊の他には対空ミサイルや自走砲、高射砲しかない。だがここは後方基地なので気にしなくていいと判断されたのか彼らは出迎えに行くこととなった。クローバー隊は陣形を組み加速して行った。
クローバー隊の出払った基地では増援を迎え入れる準備が始められた。兵士が皆新たな作戦に向けての準備に慌ただしく動き出した。
「こちらはサネプト航空基地所属第三防空隊第四飛行連隊所属クローバー小隊。《ペリカン》、《フラミンゴ》、攻撃隊を歓迎する」
メルヴィンは無線機にそう呼びかける。前方に見える編隊が件の輸送隊である。
『出迎え感謝する』
輸送隊の《ペリカン》から応答が来た。素っ気ないものだったが、

輸送隊の歓喜が伝わったので悪い気はしなかった。
　クローバー隊は輸送隊と一旦すれ違うと、また反転し輸送隊の周りを囲んだ。
『護衛隊、クローバー隊のみなさん、引き続き護衛頼みますよー！』
　《フラミンゴ》から明るい女性の声が聞こえた。子供じゃないかと疑ったがどうやら士官らしい。変な奴もいるものである。
『随分と陽気な連中だな、隊長』
　クローバー・トゥーが無線で話しかける。本来なら避けるべきだが咎めないことにした。
「ああ。念のため各機データリンクをしておけ」
『了解』
　戦術データリンクシステムを作動する。
　戦術データリンクシステムとは、軍隊におけるあらゆるユニットが得る情報を一括し、共有するシステムである。地球連邦軍のデータリンクシステムがあれば戦車や戦艦は軌道衛星からの情報をもとに射撃ができ、戦闘機は警戒機との連携によりロックオンせず、つまり敵に気付かれることなくミサイルを発射、誘導することが可能だ。また索敵情報も共有できるので警戒機や艦船、偵察機との連携で自身のレーダー索敵範囲を超えた範囲の敵を補足することが可能である。
　ディスプレイに複数のアイコンが表示される。すべて味方機である。編隊の末端までデータリンクができたおかげで索敵範囲が拡張された。
　現在地球連邦軍による人工衛星は公国軍によってそのほとんどが破壊されているので衛星とのリンクは望めない。
　そして当然ながら敵機は見当たらない。ここは地球連邦軍の勢力圏でありもし敵機がいたら、最悪基地の陥落さえ考えなくてはならないのだ。
　しばらく飛行していると眼下に小さなキャンプが見えた。戦車も確認できる。位置的には第一中隊の小隊だろうか。
　彼らはきっと我々を見ている。地球連邦軍もまだ底力を見せる前なのだ。我々の反撃はこれからだ。それを見せつけるようにミデ

アや攻撃機の編隊は疲弊した陸軍部隊の頭上を飛び去った。
『通信許可圏内に入りました。こちらはサネプト航空基地。貴官らを歓迎します』
『感謝する』
基地に近づくとそこからの無線が入る。声はリア少尉だ。
どうやら無事に基地の管制圏内に入りミデアは着陸シークエンスに入るようだ。
ミデアは垂直離着陸機である。その為攻撃機隊とは別に滑走路脇のスペースに綺麗に降り立った。
攻撃機と護衛機はミデアは違い普通に滑走路へと滑り込む。その方が燃費も良く難易度も低いなどメリットが多かった。単に垂直離陸ができない機もあったが。
牽引車によってそのすべてがハンガーに収容されると補充された若いパイロット達はぞろぞろと基地の部屋へと向かった。割と大きい施設な上今まで人数不足だったので部屋数は充分だ。メルヴィンはハンガーに残り、しばらく愛機を見つめていた。
セイバーフィッシュの形は美しい。白っぽいグレーの塗装のこの機体は、まるで軍事技術と融合した鶴のようだ。良好な機動性能を生み出す翼とエンジン、ノズル。珍しいのは張り出したエンジンナセルだ。しかしそれはデルタ翼の効果を生み出し、また翼の剛性も上げるというメリットを生み出している。ハイテクな電子機器が詰め込まれた機首。それらがバランスよく収まっていた。フライアローのミサイルキャリアー思想も悪くなかったがやはり戦闘機乗りの自分にはドッグファイトがしやすいこちらの方が性にあっている。
そして一際目を引くのがメルヴィンの専用マーキングである、四つ葉のクローバー。隊の他の機体は三つ葉であるのに対して大尉の機体は四つ葉となっている。運び込まれてすぐにマーキングが施されたらしい。機体が減って整備士たちは暇なのだろうか。
「大尉はゆっくり休んでてください。ここは、俺たちの戦場です」
整備士の一人にそう言われたので、メルヴィンは自室に戻ることにした。整備の邪魔になってもよくない。

昼食の時間まで少し空いていたので自室で仮眠を取る。次に目を開く時は昼食の時間よりやや遅れた頃合いだった。
「お、隊長！　新しい愛機はどうです？」
士官用食堂に入り、プレートと食事を受け取って席を探すと、すでに食堂にいたクローバー隊の面々がそう問いかける。
「悪くない。戦闘機乗りの乗る機体だな」
「おお！　隊長が気に入ってるぜ！」
どっと盛り上がるテーブル。メルヴィンもプレートをテーブルに置いて腰掛けた。
先ほどから飄々とした態度で人一倍喋っているのがクローバー・トゥー中尉だ。その隣で黙って食事を取っているのがスリー。フォーは攻撃隊の若い連中と会話をしていた。彼は新米で素質はあるがまだまだ他のクローバーには及ばぬといった腕である。
「フライアローはミノフスキー粒子を撒かれたら役に立たないからな。まったく。いつの時代の戦争だよ」
フライアローでドッグファイトをしてもジオンのドップには劣勢を強いられる。しかし、未だに基地の戦闘機の大半はフライアローであった。
「その分レーザー誘導ミサイルも入ったんだろ？」
「あいつらにちゃんと使えるもんか不安だがな」
増援に来た兵士は若い者ばかりだ。実戦経験の少ない彼らにレーザー誘導ミサイルは使いづらいかもしれない。レーザー誘導ミサイルは、機体から敵機へ発射され反射したレーザーをミサイルが補足するタイプのもので、ミノフスキー粒子の干渉を受けないので最近になって再研究されている。
だがそのメカニズム故に常に敵機にレーザーを当てなくてはならないのでその間回避運動や別の敵機を追うことができない。隙が生まれやすいということだ。なにより空での三次元機動の最中、ミサイルを発射し、命中するまでレーザーを当て続けるなどそう簡単に出来る芸当ではないのだ。
「訓練は受けているんです。やってやりますよ」

会話に参加したのは増援の護衛隊の隊長だ。六機を率いる隊長でさえ少尉の若者だった。そのことにメルヴィンは驚いたが、すぐに飲み込む。とは言えその間彼の表情はぴくりとも変わらなかった。
「おうおう。んじゃ、頑張れよ」
「対空機銃なんぞに墜とされんようにな」
クローバー・トゥーとスリーがそう声をかけた。隊長は若かったが、その目には確かに覚悟が窺えた。
「自分の部隊にはケルン出身者が多くいます。彼らのためにも一矢報いたい」
サイド1の七バンチコロニー、ケルンは開戦初期、一週間戦争とも呼ばれるこの戦闘でジオン軍が使用したＮＢＣ兵器（核、生物、化学兵器）によって全滅したコロニーである。
「感情的にはなるなよ」
それを知っていながらもメルヴィンがフォークをサラダに刺しながらそう呟く。若い隊長は了解しました、と言ってテーブルを立ち去った。
「あ、そうだ。ジオンの連中を宇宙人って、呼ばないようにして下さいよ」
クローバー・フォーが小声で言った。クローバー・スリーに対しての台詞だろうか。彼は口が悪いので味方にもスペースノイドがいることを忘れて口走りかねない。
宇宙人、というのは宇宙で生まれ宇宙で育ったスペースノイドに対する差別用語なのだ。
「さあな、なにぶん育ちが悪い」
「中尉！」
フォーが悲鳴にも似た声を出す。
「さっさと食っちまえよ。それとも嫌いなのかな？」
トゥーがそう言いつつフォーのトマトを奪う。
「ああ！　ちょっと！」
貴重な赤い球体を盗られたフォーは大きな声を出して抗議したが、当然無駄であった。すぐにトマトは飲み込まれてしまった。

「そろそろ失礼するぜ」
トゥーがプレートを持ち上げて席を離れる。それに次いでメルヴィン、スリーもだ。
「あっ、いつの間に！」
置いてきぼりを食らったフォーが残った昼食をかきこむ。
メルヴィンには移動してすぐに基地の防空で待機している可哀想な連中と、はやく交代してやりたい気持ちがあった。彼らは若いし士気も高い。あまり冷遇してやるもの可哀想である。
階を下り扉を開け放ってやると外の空気が流れ込んだ。年中気温が変わらないこの地域だが、乾季なので乾燥はしている。乾いた空気が顔を撫でた。
パイロット待機室に入りソファーに座る。兵士の好きな雑誌や新聞、ラジオ、テレビが置いてあった。なによりエアコンが効いているのがありがたい。
クローバー・トゥーがラジオのダイヤルを回した。正規に置かれているものではなく誰かが持ち込んだものなので海賊放送や敵側のプロパガンダを聴くこともできる。
『今日は俺の誕生日だ！　戦時中の誕生日なんて糞食らえだが――では、次のニュースです。地球連邦軍の欧州方面軍はドーバー海峡へ後退し――連邦軍の艦隊がジオンと戦闘に――』
次々と異なる番組の音声が流れるが、トゥーはあまり関心がないらしくどれも変えていった。
『こちらはインドネシア放送局！　次の曲は《Ｄａｙｄｒｅａｍ　ｂｅｌｉｅｖｅｒ》です！　古いけどいい曲よね！　じゃあ、かけてちょうだい！』
流れた曲は男性のグループが歌う曲だ。確かに古い曲であるが今なお人気を集める名曲である。
ポップなリズムに爽やかな歌詞を合わせたこの曲を、メルヴィンも嫌いではない。それを背後に、新聞紙を広げ読み始めた。
『白き鬼、ホワイトオーガー斃れる』その記事が伝えた内容は欧州での戦果であった。多くの戦果を手に入れたジオンのモビルスーツパイ

ロットが敗れたらしい。驚くべきことに白き鬼を倒したのは６１式戦車だそうだ。

『戦時下の子供達』と題したその記事では破壊された町の保育園について書かれている。ジオン公国の支配下に置かれても、ある程度の治安維持や物流、インフラ整備は行われているようだった。

ジオン公国が地球占領を進める上で必要だったのが地球市民と友好関係にあることだ。そのため防衛戦に必死でその他のことが追いつかない連邦に変わり被災地や占領地の復興を行い民心獲得に努めているのだ。中には行政ごとジオン軍に半ば寝返るような形で協力を申し出る州知事もいるそうだ。

記事のだいたいを読み終えると、目を閉じて仮眠を試みる。ラジオから流れる曲が心地よかった。

午前○時。作戦に参加する将兵が集められた。基地司令が前に立っている。プロジェクターが投影する映像には付近の地図が映し出されていた。

「傾聴！」

副官が声を張った。椅子に座っていた将兵が一気に立ち上がり視線を注ぐ。その先に立つ基地司令は口を開いた。

「我が地球連邦軍は開戦以来敗北を重ねている。多くの将兵が母なる地球を守るべくして戦い、そして斃れた。だが！　敗北は今日までだ！　この機の為に死んでいった同胞たちの為、我々はやらねばならない、ジオンに打ち勝たねばならない！　その一歩を、地球連邦反撃の狼煙を君たちが上げるのだ！」

演技めいた彼の演説は、しかし若い兵士達の士気を煽るには充分だった。基地司令は続ける。

「君達は入隊する時に誓ったはずだ。地球連邦の市民の為に、地球連邦の憲法を守り、治安に害する者達と最後まで戦うと！　今こそその時なのだ。諸君らが地球連邦軍人としての責務を、使命を全うする事を期待する。この作戦を、諸君らの手で勝利に導いて欲しい」

プロジェクターの画像が切り替わる。先と同じ地図の上に複数のマークが描かれている。指令は作戦の説明を始めた。

「早朝の攻撃、そして前々からの偵察、地形から予想される敵の位置だ」
大規模な機甲部隊とその陣地。戦術的に重要なポイントであり、敵も相当な警戒をしているようだ。
「この部隊を撃破し陣地を奪還できればこの地域での我が軍は優勢を手にすることができるだろう。我々の爆撃によって敵が混乱した機に乗じ味方砲撃部隊が砲撃を開始し、すぐに機甲部隊も突入する事になっている。空軍作戦名は《目覚まし爆撃作戦》だ。地球連邦軍という巨人の底力を、諸君の手によって目覚めさせるのだ」
相変わらず大袈裟な演説である。温度が上がり続ける部屋の中でメルヴィンはタブレットの資料に目を通した。補充部隊が到着するタイミング、味方陸軍が後退するタイミングなどを見計らった上での作戦だ。恐らく作戦の立案は何手も先を見越した上での事だっただろう。その上友軍上層部の見解も踏まえ提案したといったところか。基地司令がジャブローへの異動を狙っているという噂はあながち嘘でもないのかもしれない。やはり彼は優秀ではあるようだ。
「まずはクローバー隊が先行し敵航空兵力を撹乱する。報告では大した数ではないということだ。第二波の戦闘機群は完全に制空権を確保、遅れ到着した攻撃隊によって敵地上勢力に打撃を与える。充分に削り取った所で戦場の主役は陸軍に明け渡す。すべての航空機は陸軍の護衛と援護に当たれ」
「質問はあるか？　……ないな。解散！　各員自機に搭乗し待機せよ。……蝋燭の火を、灯せ」
作戦説明が終わると熱を持った兵達が移動を始め途端に騒がしくなる。《目覚まし爆撃作戦》。まったく、ふざけたネーミングだ。
マングース攻撃機六機、フライマンタ爆撃機二機、フライアロー六機にセイバーフィッシュ四機。地球連邦空軍の対地攻撃隊と護衛機群が開け放たれたハンガーの扉の向こうで滑走路を睨みつけている。
『各員搭乗！　各員搭乗！』
滑走路の誘導用ライトが点灯しオレンジ色の光は空へと続く。

『各機離陸態勢に入ってください』
無線機からリア少尉の声が流れた。僅かながら緊張が伺える声色である。
『牽引急げ！　さっさと空へ送るんだ！』
『うまくやってこいよ！』
牽引車に引かれ攻撃機が滑走路で待機する。
『ナスカ・ワン、離陸を許可します』
『じゃ、行ってくるよ！』
『マンタ・ワン、離陸して下さい』
『おうよ！』
無線も熱を帯びて騒がしくなる。滑走路からは爆音を響かせて次々と航空機が離陸していった。
そしてクローバー隊の番が回ってくる。
『クローバー・ワン。離陸を許可します』
「ああ。クローバー・ワン、離陸する」
加速とともに加わるGを感じながら空へと駈け出す。そして編隊に加わった。じきに他のクローバー隊も加わる。全体が大きな翼となって空を滑っているようだ。
『全機の離陸が完了しました。秒読み五、四、三、二、一。それでは、現時刻をもって《目覚まし爆撃作戦》を開始します。みなさんの、幸運を祈ります』
『ありがとう管制。いい知らせを期待していてくれ』
フライマンタ、マンタ・ワンの攻撃隊長が答えた。
彼率いる兵達誰もがこう確信していた。漆黒の空を切り裂いていく彼らは連邦軍反撃の尖兵となり得るのだろう、と。

第三章

第三章

「ミノフスキー粒子の効果は見受けられん。奇襲は成功だな。まもなく攻撃目標だ。クローバー隊各機、戦闘態勢に移行するんだ」

『分かってる』

第二波戦闘機群、対地攻撃隊とは距離を置き先行したクローバー隊が速度と高度を上げ敵中へと突入した。油断していたのか補給待ちだったのか知らないがミノフスキー粒子は散布されておらずレーダーも赤外線もクリアだ。そのまま四機は敵の対空自走砲も対空ミサイルにも構わず敵の戦闘機に噛み付いた。

『交戦開始!』

『いいねえ、燃えてきた!』

不意を突かれた敵の戦闘機ドップは次々と撃墜されていく。炎や黒煙を吹き出しながら規則的に重力に引かれていく鉄の塊を横目で見る。

『くそ、なんだってフェディが!』

ドップのパイロットが叫ぶ。叫んだ彼の背中には既に連邦軍の白いセイバーフィッシュが食らいついていた。

『助けてくれ! こいつ、まったく離れん!』

翼をもがれたグリーンのドップが地面めがけて真っ逆さまに落下していく。

僚機の少尉は必死に周囲を見渡すが、どの友軍機も連邦軍の戦闘機に追われ必死だ。反撃の余裕がある機など一機もない。

—警告。HUDが赤く染まりそう表示される。警告音は自己主張を繰り返した。

メルヴィンは眼前に飛行するドップに無事ミサイルを叩きつけた。

『制空権を確保した模様、敵対空ユニット撃破に移行する!』

第二波戦闘機群が敵のレーダー圏内に飛び込むのを確認し、メルヴィンは機首を捻った。

『やってやる！』
グレーの航空迷彩を施したフライマンタ攻撃機が高度を上げ、フライアローもそれに追随する。そのやや後方に構えるのがマングース攻撃機である。
マルチロール機としてのフライアローは対地攻撃も可能だ。護衛機のうち数機は対地ミサイルを装備している。
『これなら通常誘導が可能だ。奴らに本当の戦争を教えてやれ！』
『おうよ！』
『任せな！』
最前を飛行していたフライアローが散会、降下しつつ対地ミサイルを発射した。ミノフスキー粒子もないのでデータリンクでよくわかる。発射されたミサイルは真っ直ぐ敵の対空自走砲へ向かった。哀れな目標は慌てて機関砲を乱射するも虚しくミサイルの爆発に飲み込まれる。
『敵襲！　敵襲！』
連邦軍にさらなる打撃を与えるべくして集結したジオン軍機甲部隊。虎の子ＭＳザクに加え攻撃ヘリコプター、装輪偵察警戒車、ＭＳ支援戦車マゼラ・アタック、空挺戦車マゼラ・アイン、そして対空自走砲が待機している。その他トレーラー、兵員輸送車もだ。あとは航空部隊を待ちミノフスキー粒子の下で今までのように連邦軍を叩き潰せばよかった。
しかし、先手を打ったのは敵方だと知る。鳴り響くサイレンとレーダーの反応、無線から伝えられる情報がそれを知らしめた。
『敵を視認した！　反撃を開始する！』
『敵はどこだ！』
『南！　南だ！』
『対空戦を展開する！　戦車や装甲車はさっさと移動させろ！』
『護衛機はなにやってんだ！』
爆撃音が響いた。南方の部隊が攻撃されているらしい。モビルスーツ小隊は中央の隊にいるので交戦していない。
「航空基地に増援の戦闘機をよこせと連絡しろ、今すぐに！　対空兵

器を展開させて、戦力にならない奴らは本隊に集合させるんだ。最悪のタイミングだぜ、まったく！」
『了解しました！』
陣地中央にいる指揮車から命令が放たれた。
『こちらは航空基地だ。どうした？』
「敵の攻撃です！　増援の戦闘機を送ってください。敵の規模はこれまでにないものです！」
オペレーター達が騒がしく連絡を始める。
「対空戦闘開始！　対空戦闘ができない隊は本隊に集合してください！　ザクは本隊の防空に備えて下さい。ＦＣＳは対空でスタンバイ」
ミノフスキー粒子は警戒機ルッグンが散布するのでルッグンが到着するまで使えない。ルッグンと増援の到着まで堪えるしかないのだ。司令官の若い男は歯を噛み締めた。
「耐えろ……！」
爆音が鳴り響く。レーダーが使える従来のような戦闘では連邦軍は圧倒的であった。それに今は航空機で地上部隊を叩く作戦だ。地上の兵器は基本的に航空機に対し無力であるから、そもそも圧倒的に有利な状況なのである。
元より確保されている制空権と対空装備があらかた潰れたのを確認するとマングース各隊は高度を下げた。大きなペイロードを利用したミサイルの嵐を起こす。戦車、陣地にそれらを撃ち込むと無誘導爆弾を投下する。コンピュータによって最適なタイミングで空に投げ出される爆弾は風や落下速度などの計算し尽くされた状況の中で落下し、見事目標を吹き飛ばした。しかし運悪く土を穿っただけのものもある。だが問題はない。爆風が人間を弾き飛ばす。破片が装甲車の薄い走行を貫く。
更にマングース最大の兵装、７５ｍｍ自動砲が火を吹いた。その弾丸は土を抉り、戦車の上面装甲を貫通し、乗員を千切り、歩兵の側を走っただけでも易々と吹き飛ばした。その攻撃の主は小口径の対空機銃ぐらいなら気にもしない。
マングースはそしてミサイルを発射した。赤外線誘導ミサイル

はマングースの翼から解き放たれるとブースターを吹かし全速力でマゼラ・アタックに向かっていく。そして、マゼラ・アタックの砲塔に直撃した。

辺り一面を大まかに掃討すると、次の敵車両群を目指す。

『攻撃ヘリ！』

データリンクシステムが誰がどの敵を狙うかを割り振り、フライアローの誰かがミサイルを発射した。二機の攻撃ヘリはスクラップとなり地表へ激突する。

新たな車両群は対空防御を固めつつあった。放たれた二発の対地ミサイルのうち一発は撃ち落とされ空中で爆発四散した。ただもう一発は敵の真ん中に着弾し敵車両をスクラップへと変える。

『あーあ。対空戦車って高いのに』

クローバー・トゥーが呟く。確かに対空自走砲や対空戦車といった兵器は高性能な電子機器とミサイル、機関砲を積んでいるため価格がかさばるのだ。敵だからそんなことは関係ないのだが。

ビープ音が機内に流れた。ロックオン警報である。間もなくしてミサイル接近警報が叫びだした。メルヴィンは冷静に機首を曲げ旋回する。ミサイルは明後日の方向へ飛んでいき目標を見失った。そしてメルヴィンはミサイルを発射したと思われる装甲車にお返しとして機関砲の銃撃をほんのすこしの間だけ浴びせてやる。航空機関砲は連射速度がとてつもなく早いのでそれだけで十分であった。受けた装甲車は炎上し爆発する。

『よし！　ここら一帯はあらかた燃やした！　次行くぞ！』

久々の戦果に湧き上がる兵士たち。連邦軍の反撃の狼煙は、上がったかに見える。

『そろそろ敵の航空兵力も到着するのでは？』

『っ！　レーダー照射を受けている。既に敵の警戒機がいるらしい』

メルヴィンはモニターを睨んだ。さあ、自分たちの出番である。

ジオン指揮車。無線通信によって次々と頭の痛くなる情報が詰め込まれていく。司令官は苛つきを隠せずに足踏みをしていた。

『衛生兵！　衛生兵！』

『向こうから来るぞ！　ほら撃て！』
『畜生！　第三小隊がやられた！』
　既に南方の部隊は壊滅。十字に展開した部隊は窮地に陥っていた。
「司令！　ルッグン到着しました！　ドップもすぐ近くに来ています！」
　オペレーターが喜びのあまり表情を緩ませてそう言った。航空戦力、そして警戒機ルッグンがいれば百人力である。特にミノフスキー粒子を撒けるのは大きい。地道な抵抗を続けつつ航空部隊による反撃を開始。そしてミノフスキー粒子の蓑の中地上部隊は撤退する。そのシナリオを司令官の男は脳内に描いた。
「戦術データリンクシステムを接続、敵機の数と場所を教えてやれ。そして増援が到着したと、各隊に伝えろ！」
「はっ！」
『こちらは警戒機《ディスタント・アイ》。ミノフスキー粒子の散布を開始する。幸いこちらは風上だ』
「了解しました」
『こちらは第五飛行隊。貴隊を確認した』
「了解。増援感謝します」
　警戒機とそして増援の部隊から無線が次々と入った。
「ようし！　地上部隊は撤退を開始。制空権内、ポイント四〇七にて待機せよ」
　ジオン部隊は撤退へと傾いた。
　白いセイバーフィッシュの機内。メルヴィンは予測する。敵の警戒機と時刻、周辺の敵基地の位置からしてそろそろ航空兵力が増援に駆けつけてもおかしくないはずだ。クローバー隊に無線を飛ばした。
「我々は敵の航空機に備える。俺に続け」
『了解だぜ、隊長』
　クローバー隊各機は編隊を組んで飛行する。敵の基地の方角だ。すると案の定すぐにロックオン警報が流れた。

「敵は警戒機のレーダーを使ってミサイルを撃つはずだ。警戒機からのロックオン警報をオンにしておけ」
戦術データリンクシステムと警戒機があれば、ミサイルを発射する母機はレーダーを照射する必要がない。そのため警戒機のレーダー照射を無視し続けると敵のミサイルに気付けない、などと言うことが起こりかねないのだ。
『クソ。こちらにも警戒機がいれば楽なのによ』
警戒機の支援がない連邦の航空部隊は不利な状況にある。敵はこちらの射程圏外からミサイルを放つことができるのだから。
『あー、あー。こちらは地上のファット・フロッグ偵察隊だ。敵航空機を見かけたんでデータリンクで送信する。あの気持ち悪い形の奴を墜としてやれ』
ディスプレイの自機のレーダー圏外に敵航空機のアイコンが表示される。
『味方の地上部隊だ！　これでこちらからの攻撃が可能になります！』
クローバー・フォーが歓喜の声を上げる。
「こちらはクローバー隊。ありがとう」
『さっさとスクラップになってもらうとしよう』
『是非そうしてくれ。中継と中間誘導もこちらでやる』
地上部隊との交信を終えると、メルヴィンはミサイルを発射した。
ミサイルはまっすぐ飛んでいった。光の尾を引いたその矢は戦術データリンクシステムによる座標を目印に飛翔し、やがてレーザー光線を補足する。チャフやフレアをめちゃくちゃに放出し欺瞞しようとするルッグンだったが、ミサイルは自信を持ってその機に突き刺さった。と同時に爆発が起こり、メルヴィン達のディスプレイから反応が消える。
『ナイスだ！じゃ、俺たちはさっさと撤退するぜ！』
交信終了。データリンクも解除された。これで敵の増援部隊とも互角の状況である。その時勝敗を分けるのは、自分たちの腕であ

る。
　警戒機《ディスタント・アイ》の撃墜はすぐさまジオン指揮車へと伝えられた。
「《ディスタント・アイ》ロスト！　撃墜されたと思われます。ミノフスキー粒子濃度も変化ありません」
「なにっ！　……ひるむな！　撤退戦を継続しろ！」
　司令官が指示すると、指揮車もエンジンを唸らせて走り始めた。彼は上部ハッチから外の様子を窺う。
『フェディ共に鉛玉のプレゼントだ！』
『おい！　ありゃなんだよ、警戒機が撃墜されたのか！』
　相変わらず混み合っている通信回線だ。ヘッドホンを外し首にかける。そして士官用の双眼鏡を手に取り戦術的には近いが体感的にはずっと遠い位置でもがく友軍を案じた。
『ひっ……！』
『ちくしょう、一つ目だ！』
『落ち着け！　１２０ｍｍとミサイルだけだ！』
　攻撃隊が敵のモビルスーツと交戦を開始したらしい。モビルスーツはその戦闘能力だけでなく、十八メートルの巨人という見た目だけで既に連邦軍の兵士にトラウマを植え付け、そしてそれをプロパガンダにも使えるという側面があった。現に、連邦軍兵士は必要以上に焦っている。
　ザクは１２０ｍｍのマシンガン―普通に考えれば砲―を連射した。火器管制は対空防御。未来位置を予測した偏差射撃を開始したのだ。
『一応距離を取れ。当たるなよ』
　対地攻撃隊の無線に耳を傾けていたメルヴィンに、クローバー・トゥーが呼びかける。
『大尉、こっちも敵さんが見えてきたぜえ』
　敵編隊がメルヴィン達のレーダー圏内に入った。敵影はどんどん増えていく。
『なんて数だ。四、八……全部で十四機！』

『敵さんも本気だな』
「クローバー・ワン、交戦。ミサイル発射」
『クローバー・トゥー、交戦！』
『クローバー・スリー。エンゲージ！』
『クローバー・フォー、交戦します！』
　すぐさま敵を補足し各機がミサイルを放つ。ミサイルはそれぞれ違う目標へと向かっている。そしてほぼ同時に、敵戦闘機ドップもミサイルを撃った。
『回避！』
　メルヴィン達は編隊を解いてそれぞれが回避運動に移る。幸いミノフスキー粒子はなかったので撃ちっ放しが可能である。隊員たちはロックできるだけの敵機にミサイルを撃ちまくった。クローバー隊に被弾機はなし。しかし敵の戦闘機は小回りがきく小型機なので回避性能がいいらしく四機の損失に抑えていた。
「敵機撃墜」
　戦果を確認し、すぐさまドッグファイトに突入する。
『攻撃隊付きの護衛隊！　現在我々は交戦中だ！　絶対に攻撃隊まで行かせるなよ！』
　クローバー・トゥーが叫ぶ。そしてそれに護衛隊の隊長が応えた。
『了解だ。こちらアロー・ワン！　クローバー隊を抜いた奴が来たら必ず墜とせ！』
　ミサイルをかわしたメルヴィンは一機の目標を絞る。回避運動中のドップだ。相手に向きを合わせ後ろを難なく取り、ミサイルを撃ち込んだ。ミサイルを突き刺された緑の機体は爆発四散した。
『敵が多い！　警告音が止まんないぜ！』
　トゥーが興奮した声で笑った。戦闘機乗りにとって、とてつもなく楽しい戦場なのだ、ここは。
『イエア！　楽しいね！』
　もとより戦闘狂―もといトリガーハッピーの向きがあるスリーはさらに興奮していた。彼の機が無理な機動を効かせて敵機を追撃

している。
「楽しんでる暇はないぞ」
しかしメルヴィンはあくまで冷静だ。彼はまた目標を選定する。今度はトゥーを狙い飛行するドップだ。横方向から急接近し機銃を浴びせる。充分だった。
メルヴィン達クローバー隊は次々とドップを撃ち落としていく。追撃するドップは追いつくことなくかわされる。ドップのパイロットが今までの自分達の戦果はお遊びのものだったのではないかと錯覚するほどの力の差であった。
ジオン軍パイロット、エディは操縦桿を握りしめた。ミノフスキー粒子散布下での有視界戦闘を意識した奇形の戦闘機ドップのコックピットの中に彼はいる。そして、現在は激戦の真っ只中にいた。自分のような未熟なパイロットが今生きているのは奇跡だ。たまたま敵のパイロットの目につかなかっただけ。誰も彼もが連邦のパイロットに敗れ死に行くこの地獄でエディは生き残る方法を模索していた。
『回避！　回避！』
『ダック・トゥー、後ろにつかれてるぞ！』
『やりやがったなあのクソ野郎！』
『数の差はどうなってる！　俺たちは有利じゃないのかよ！』
遂に覚悟を決める。まずは……そう、あいつからだ。あのグレーの機体。エディはドップを加速させ敵機を追尾した。回避運動にもなんとか噛り付き、レティクルに合わせて機関砲の引き金を―
―衝撃。自分の身になにが起こったのかも分からぬまま、エディは横腹に向けて発砲された機関砲によって蜂の巣にされて死んだ。
その時、夜が明けた。
眩い日光が差し込み目を眩ませたジオンのパイロットが、またも撃破される。
だがその中でも、連邦の機体がミサイルを撃ち尽くすと戦力差は埋まるだろうとジオンのパイロットは希望を持って予測した。機体数が多い分ミサイルはこちらの方が多い。機関砲のみの敵となら練

度の差を埋められるかも知れない。勝つことが目的ではない。味方の撤退まで時間が稼げればそれでいいのだ。

『また墜としたぞ！』

クローバー・スリーが叫んだ。クローバー隊総員での撃墜数は今の所五機。ミサイルの残弾数はゼロになったがまだ戦えるはずだ。フライアローもいる。

『こちらアロー・トゥー！　新たな反応だ―速い！』

『会敵まで十秒！』

攻撃隊から送られてくる情報。それは一つの結論を意味していた。

『チクショウ！　こっちは囮かよ！』

トゥーが叫ぶ。メルヴィンは次の手を脳内で整理した。

「俺たちは……ここを食い止める」

『ラジャー！』

『ウィルコ！』

クローバー隊各機の応答に混じり、攻撃隊の通信が入る。

『黒いドップだ！　いや……ドップじゃない！　なんだあいつは！』

『アロー・トゥーがやられた！』

どうやら奇襲の別働隊は手練れのようだ。できればそちらの援護に向かいたいがここを離れるわけにはいかない。早くここの敵を殲滅し応援に向かわなくては。

『さっさとやるぞ！』

メルヴィンは降下したドップに目をつけた。手当たり次第である。やや斜め上から急接近し機関砲弾を突き刺す。どうやらドップは耐弾性が低いらしく通常より少ないはずの弾数で撃墜が可能だった。

クローバー・フォーは後ろから追ってくる敵機を確認した。やや機首を上げ急減速する。ドップは慌てて減速するがセイバーフィッシュを追い抜かしてしまった。その瞬間、逃さずフォーは機関砲を撃ち込んだ。

『上手くなったじゃねえか！』

そう褒めるクローバー・トゥーもドップをしつこく追いかけ回す。遊んでいるようにも見えるが、無駄な時間を食ったわけではなくすぐに止めを刺した。

クローバー・スリーはまず一機に機関砲の銃撃を浴びせ、そしてその機の前を飛んでいた機体にも食らいつく。鮮やかに素早く二機を屠って見せた。

『そろそろ弾数が限界です』

機関砲の弾も残り少なくなってきている。敵の数はまだ四機が残っていた。

しかし敵の四機も疲労が溜まっているようだ。好戦的な行動は避け、距離もとっている。

『だ、誰か……！　助けてくれ！』

その時、黒いドップ―否。機種不明の黒い戦闘機がマングースに襲いかかった。いくら装甲を装備し耐弾性に長けているとはいっても限界がある。スピードによって威力の増した機関砲弾によって、瞬く間に炎に包まれ撃墜された。

『誰かあいつを止めろ！』

『フー・ファイターだ……』

黒い戦闘機と通常のドップが二機。彼らの戦闘能力は明らかにエースと呼ばれる者たちのそれであり、既に多数の連邦軍機を葬っていた。

「俺とクローバー・トゥーは先に向こうへ行く。二人はここであの四機をやれ」

『了解！』

二倍の機数だが彼らならやれる。そう信じメルヴィンとクローバー・トゥーはスリー、フォーを残して攻撃隊へと向かった。エンジンの推力を最大まで上げ突進する。

『俺がやってやる！』

『右旋回！　右！　くそっ……追いつかれる！』

黒い機体はまた一機を撃墜する。それに追随している二機のドップもかなりの腕だ。

「黒い奴をやる！」
　メルヴィンは捕捉、そして加速し黒い機体を追った。速いがなんとか追いつかせる。そして、機関砲を発射するが―かわされてしまった。今度は逆に黒い機体が宙返りをして自分を狙う。なんという旋回性能だ。まるでその場で回ったように見えた。メルヴィンはフレアを撒き散らしながら旋回し相手を惑わす。メルヴィンと黒い機体は互いに競い合い、双方の飛行軌跡は交錯しねじれ歪み、ローリング・シザーズを描いた。メルヴィンは敵が自分の背後を狙い宙返りするタイミングを狙う。その最中、確かに感じ取った。相手の感情を。
「こいつ……楽しんでる」
　黒いその機体は明らかに楽しんでいる。しかし、そう思うのはメルヴィンもまた、楽しんでいるからかも知れなかった。そんな風にメルヴィンは自分を客観的に捉える。命のやり取りの中、不意に楽しさを感じてしまう事がある。しかしそれは死神に手を引かれていることを意味する、そうメルヴィンは自制してきた。
　宙返り。そのタイミングを逃さずメルヴィンはコブラと呼ばれる戦闘機動を繰り出す。コブラとは水平飛行中、進行方向、高度を変えずに機体の向きを変えるものだ。セイバーフィッシュは前に進みながら上を向く。そこには宙返り中の黒い機体が見えた。メルヴィンの前方には自分の上を見上げる敵のパイロットが見えた。しかし黒い機体は上手く旋回しセイバーフィッシュの機関砲をかわす。
『面白い奴だ。次は仕留める』
「……死ぬのは、お前だ」
　黒い機体はあろうことか無線回線を開いてきた。そして宣戦布告を飛ばすと、メルヴィンの返答に反応もせず飛び去っていってしまった。あまりのスピード、そしてセイバーフィッシュが無理な機動をしていた最中だった為今から追いつくのは無理だろう。
　気付けば他のドップやジオン地上部隊も撤退を開始している。
　疲れ切った声で味方のパイロットが呟く。
『勝った、のか……？』
『ふざけんな。これで勝っただと？』

間も無くして友軍の部隊が進入した。６１式戦車や歩兵戦闘車の地上部隊だ。特に戦闘もなくそのまま制圧する。

こうして、地球連邦軍は多大な犠牲と引き換えにこの要所を手中に収めたのだった。

第四章

第四章

『お疲れ様です、ネイプ・ワン――いえ、少佐』

朝日を背に着陸した戦闘機。そのコックピットにいる男に無線機で管制官が声をかけた。コックピットにいる男とは、すなわちアルフォンス・ハルツハイム少佐である。

「ありがとう」

簡単に礼を言うとヘルメットを脱ぐ。短髪の頭からすっぽりと脱げたヘルメットを足の上に置いてリラックスした。

黒いノーマルスーツはジオン製だ。彼はジオン軍の戦闘機乗りであった。

「お見事です大尉。撃墜数は五。一度の戦闘でこれだけの戦果を挙げるだなんて」

「累計九機かあ」

ジオンの東南アジア制圧部隊きってのベテランパイロットであるハルツハイムはそんな部下や整備士の歓迎を軽くあしらいロッカールームへ向かう。墜とした雑魚の数などどうでもよい、今彼の興味を惹きつけているのはあの白いセイバーフィッシュのパイロットだ。戦場で交わした決闘の約束、それを果たす場を作りたかった。

ロッカールームでハルツハイムは士官服に着替える。佐官用の服である。袖から覗く日焼けした腕。もう片方には銀色の義手が付けられている。ハルツハイムは、過去の被弾によって右腕を失った。しかし高性能な義手を代わりに装着する事によって、健全者となんら変わりない動作を取り戻したのだ。初めてその義手を目にすると、酷く動揺するような失礼な者もいるが、彼の部下は既に慣れているので何ら不自然はない。

「味方機の被撃墜数は十四機。地上部隊の被害も大きく、我が軍も大した痛手ですよ」

「出過ぎた地上部隊の所為だ。陸空の協力なくして勝利はありえんからな」

「まったくです。これではしばらく勢力図は変わりませんね」
　僚機の部下もロッカールームへ入った。ハルツハイムに間に合わせるように素早く着替え始めたのでハルツハイムもややゆっくり着替えてやる。
「ただ、ザクは無傷だったようです。主な犠牲は対空兵器や兵站系らしく、戦闘車両などは比較的無事だとか」
「そうか……」
　ジオン軍にとってモビルスーツザクは虎の子だ。何百年も蓄積された地球連邦の兵器にジオンの通常兵器は大きく劣る。空挺戦車マゼラ・アインの装甲は６１式戦車の放つ徹甲弾に容易く貫かれ逆にアインの主砲は６１式戦車の装甲に弾かれることすらある。ＭＳ支援の為に配備されているマゼラ・アタックは主砲の口径こそ勝っているものの高い車高や大きな車体、それに加え旋回しない砲塔の所為で直接戦闘においては大きく劣っているのだ。
　ザクはその戦力的な不利を逆転させてしまうほどの驚異的な戦闘能力を持っている。そもそも十八メートルという身長から放たれる１２０ｍｍの砲弾は必然的に戦車の上面、つまり装甲の薄い部分を狙うこととなるし、スーツ、つまり歩兵の延長としての人間に近い柔軟な動きができるモビルスーツは機動性においても優れる。ゆえに重鈍な戦闘艦や従来の兵器をミノフスキー粒子の効果の下いとも簡単に撃破せしめたのである。
　鋼鉄の巨人に対抗できるのは歩兵でも戦車でもなく、ほかならぬ航空戦力である。だからジオンの航空戦力もまた、連邦軍の航空戦力に対抗し空からの攻撃に脆弱な地上部隊を守らなくてはならないのだ。
「だが大きなダメージには変わりはない。今後は更に厳しいかも知れんな」
　そんな風にコメントを付けると、ハルツハイムはロッカールームを出た。通常ドップは二機で分隊を編成するが彼の隊は三機の特別編成で一個分隊を編成する。その為彼がいる隊は通常より一機だけ少なくなるのだ。それがなぜかといえば彼の機はある技師の手によって二機のドップを使い改造された機体だからである。

しかしロッカールームにいるのは二人だけだ。もう一人は女性用ロッカールームにいた。
「お疲れ様です」
彼らが出た男性用ロッカールームの扉、そのすぐ隣の扉から女性兵士が姿を現した。一般尉官用の第三種戦闘軍服のズボンにインナーのタンクトップというラフな格好だ。彼女の名はベルタ。そして男性の部下はフィコだ。両人とも中尉。
「これから客人と会う」
そう静かにハルツハイムが言うと、ベルタは腰に巻いていた上着を羽織る。
三人は薄暗い廊下を歩いた。時刻は午前七時。それなのに暗いのは基地の照明はあまり使わずして日光に頼っているためだ。
三人が目指したのは応接室。そこで一人の男が待っているのだ。スクランブルの所為で遅れたがそんなことで気を悪くするような男でもない。
彼は変人にして天才。そして—
「あの機体の調子はどうだね？」
—例の改造機の産みの親である。
「悪くない」
扉を開けた瞬間、自身の作り上げた機体について聞いてきた。それだけとっても変人だと言えた。
「彼は飛行機設計技師、ダリオ・ボノモ氏だ。民間機の設計に携わっていた氏だが特別に協力してもらっている」
簡単な紹介を部下二人に済ませるとハルツハイムはボノモと反対側のソファに座り込む。
「ふん。まあワシが創った機体だからな。人的ミスとくだらん整備不良以外で墜落した機体はない」
ボノモ老人はそのまま語りだす。白髪の頭と皺の多い顔と手からその年齢は優に四十は超えている事が察せられる。服装はこの部屋に似つかわしくない白の作業服である。
「ああ。傑作と呼ぶにふさわしい」

「フー・ファイター、なんて呼ばれているそうじゃないか」
ボノモはそう言った。二人の会話に入ることもできず、ただフィコとベルタはソファの横で立っている他なかったが、ボノモはそれに構ってくれなかった。
まるで自分の手柄を自慢する子供のように愉快そうな笑みを浮かべるボノモ。いつも通り無表情なハルツハイムがそれに対する。
「らしいな」
連邦軍の兵士が例の機体を見て口にした名がジオンにも伝わっていた。それはフー・ファイター。未確認飛行物体を表す言葉である。
「戦果も素晴らしいものです」
テーブルの上にあった酒を口に運ぶ。グラスを再び机上に戻したボノモが付け足したフィコに言った。
「勘違いするなよ軍人。ワシはな、自分の機体にしか興味はない。貴様が私の創った飛行機でどんな成果をあげようと関係ないんだよ。ただワシの機体が優秀だと分かればそれでいい」
ある日、牙を剥いた宇宙の民に、地球の民は恐怖した。コロニーを地球に突き立て、甚大な被害をもたらした彼らを憎む者はただでさえ多く、ジオンが民心獲得に乗り出したとしても、警戒したり非協力的だった市民は多かった。
だが、彼は超えている。そういった考えに縛られていないのだ。彼を縛る者はただ一つ。飛行機だ。
「戦争で会社の操業もほとんど停止、実験場や飛行場も連邦軍に差し押さえられたんだ。その代わりにお前らのところでワシはやりたいことをやる。それだけだ」
随分と勝手な理論を展開するボノモだ。しかし変人であるから仕方がないとも思える。
地球市民にとって裏切り行為に他ならないボノモの公国軍への協力は、ハルツハイムの説得によるものでもあった。しかし、いくら設計狂とも形容される彼であっても地球市民であり裏切り行為が表沙汰となれば彼の会社は危うくなるので、簡単に了承できるような行為ではないはずなのだが……。どのような交渉があったのか、知る由は

ない。
「機体の説明をしてやろう」
一転、楽しそうな口調となりテーブルのコーヒーを啜るボノモ。
「お前らも座れ」
広いソファには三人が座っても十分なスペースがあった。ハルツハイムを挟むようにして二人も腰掛ける。
「原型はＤＦＡ０３ドップだ。貴様らスペースノイドが想像だけで作った機体。飛んじゃいるがそれもエンジンの推力で無理矢理飛ばしているに過ぎん。よくあんなもので連邦空軍の戦闘機とドンパチやっとる」
そういうとボノモは二枚の資料を出した。片方にはドップのデータが、もう片方にはあの改造機のデータが載っている。仮にも民間人であるボノモがその資料を持っているのは危険なことだが、ハルツハイムはそれを気にも留めない。どころか、彼がその資料を渡したのかもしれなかった。
「まずＤＦＡ０３の翼を延長した。だから少しだけＤＦＡ０３よりデカくなっとるだろ。あの馬鹿みたいな推力と空力特性があれば連邦空軍の戦闘機と並べるやも知れん。いいや超える。そして張り出したコックピットも機体に沈めた。それに合わせて機首の形状もな。視界確保が目的なのか知らんが普通の位置でも大して問題がないことは貴様らもよく知ってるだろう？　下方視界は一応残した」
ドップと比べ改造機は大型で尖ったデザインをしている。その変化がボノモの説明でより合理性に説得力を帯びてきた。
「垂直尾翼や翼の形は元より悪くない。スペースノイドも必死だったんだな。あまり変えてはおらん」
ボノモは一度コーヒーを口に運ぶと更に続けた。
「ミサイルポッドと機銃の位置。ペイロードは大きいがあんな物は邪魔にしかならん。通常通り翼の下にミサイルを、付け根に機関砲を設置した。結果的には小回り性能なんかは落ちているから機動性能を捨てることにするならＤＦＡ０３のミサイルポッドを二つ吊るすことも可能だ」

ドップより改造機の方が優秀な機体であることは、誰の目にも明らかであった。だが問題はドップの二倍超というその高コストである。それにこの機体の情報が本国や地球各地の拠点に送られることはない。あくまでこの機体は彼が創り出したゴースト、幽霊なのだ。だからフー・ファイターで正しい。

「結果的な装備は３０ｍｍ機関砲を二門。ミサイルの搭載数は六本から十二本だ」

「すごい……。セイバーフィッシュにも劣らないわ」

「機動性では既にセイバーを凌ぎ、速力や火力だって見劣りせん」

ふん、と自慢げに鼻を鳴らすボノモ。フィコとベルタは資料を読んで感心している様子だ。

「本当に、初めて戦闘機を設計したのか……？」

「設計じゃない、改修だ。原型があるだけ簡単な仕事だよ」

「愛称はなにがいい？　親が決めた方がいいだろう」

ハルツハイムが言った。確かにいつまでも改造機とは呼んでいられないだろう。

「そうだな……。《ドップ・イェーガー》でどうだ？」

「構わん……。俺の目的は、あの白いセイバーフィッシュを墜とすことだ……」

フィコは気付く。変人といえば目の前のボノモであるが、同じく自らの隊長も変人なのである。否、狂人と言った方が良いのかもしれない。彼らは自分達には理解できないと、どこかで諦めていた事に。

「これから基地司令殿と話があるんだ。ワシは失礼するぞ」

雑に別れを告げるとボノモはソファを軋ませ立ち上がった。そして彼が退出すると、フィコとベルタの間に漂っていた緊張感が解けた。

《ドップ・イェーガー》と名付けられたその戦闘機は、薄暗いハンガーに佇んでいる。その空間を同じくする者は、《ドップ・イェーガー》の主のみだ。彼は暗闇の中でほくそ笑んだ。この狩人たる化け物が自分の手足となり他の鳥たちの翼を捥ぐ場面を想像すれば、嫌な笑みが自然と浮かんできた。

彼はパイロット。彼は狩人。

第五章

第五章

メルヴィンが目覚めたのは昼頃だった。昨日の損失はマングース三機に一機の被弾、フライマンタは一機が被撃墜、フライアロー四機撃墜。対して戦果は敵機甲部隊の四割を撃破、拿捕。警戒機一機と戦闘機十三機の撃墜である。ＭＳの撃破は成し得なかったらしい。戦果の方が上回ったものの、これではこれからの作戦に支障が出る。

「やれやれ。きっと戦線は膠着するよ？」

ハンガーの自機を見に行くと案の定ユン中尉がいた。細身の彼は機体の上に乗って何やらいじっていた。他に整備士が見えないあたり、至極小規模な整備らしい。

「地上兵力と航空兵力を失ったジオンは大規模な攻勢に出られないだろうし、連邦も連邦で打撃力を失ったから今は強めに出たくない。どちらかが再編されるまで膠着だろうね」

彼はまるで他人事のように語って見せた。そして機体から軽やかに飛び降りると、メルヴィンの元へ寄ってくる。

「君の機体に残された情報から、例の新型とやらを調べてたんだ。個人的に気になってね」

「ゼロ・ファイター？」

「みたいなものかもね。ドップをベースに航空力学的に優れた形状へと改良している。あんな奇形の戦闘機を無理やり飛ばせるエンジンがあるんだ。速度が上がるのは当然さ。形状の変更は大きい。翼を伸ばし、ミサイルポッドは外されている。張り出したコックピットも機体に沈ませてあるね」

ユンはタブレット端末を差し出した。受け取って画面を覗くとそこには黒い例の機体の写真が映っている。

「きっとこれを創り出したのはアースノイドだ。しかも天才。宇宙にも天才はいるかも知れないが、こんな傑作機を創れるのは地球で本物の空を見てる人間だけだよ」

「乗ってる奴も、かなりやり手だ」

「新型機に乗るエースか、いいねそういうの。好きだよ」
そう言ってユンはコーラを口に運んだ。
「大尉の機体にも改良を加えておいた。癖が強くなった面もあるが、あなたなら乗りこなせるだろう。僕の趣味もあるけどね。それでも戦闘能力の向上に間違いはない」
相変わらずのにやにやした表情と口調でユンが言った。
「説明をしておいた方がよさそうだ。その画面、下にスクロールして」
言われてメルヴィンがタブレット端末の画面をした方向にスクロールすると、セイバーフィッシュの３Ｄモデルが表示された。
「まずはエレボンを僕が設計し直した物に換装する。機動性能の底上げができるはずだ。ラダーも少し改良した。あとは、見ての通りカナード翼だ。普通カナード翼突き刺すなんて無理があるけど、こいつは別だ。設計段階からある程度汎用性をもたせているからカナード翼を付けても問題ない。だけど……基地司令とか偉い人には簡単に言わないでくれよ？」
人に自慢できるようなルートで仕入れた訳ではないらしい。ユンは人差し指を唇に当てて警告した。まったく。何者なんだろうか、こいつは。
「悪くないな。だがアローの方は改造できないのか？」
「魔改造は好きだが、あいにく僕はセイバー専任でね」
メルヴィンはしばらくタブレット端末に表示されたスペックデータを眺めていたが、決心して言った。
「飛んでみるか」
メルヴィンが着替えている間にリア少尉にその旨を伝えるたユンが牽引車を走らせてきた。改めて見ると、巨大な機体である。敵戦闘機のドップ、元愛機フライアローと比べても巨大である。
メルヴィンは鶴の前に踏み出す。抱えていたヘルメットを被り、タラップを駆け上がる。そして開いていたキャノピーからコックピットに身を収めた。やや暑苦しい。
『発進準備はいいですか？』
「問題ない」

滑走路からユンと牽引車がいなくなるのを確認してエンジンの出力を上げる。パイロットの胸を高鳴らせる甲高いエンジン音がその程度を増していく。そして、ゆっくりと押されるように進みだした。すぐに高速になり地面から車輪を浮かせた。空と一体化したセイバーフィッシュは基地の上空を旋回する。

「旋回性能が上がってる」

『そうだ。僕こだわりの特別製パーツを使用してるからな！』

ユンが通信回線に割り込んだ。それを見越しての発言でもあったのだが。

上下左右、三百六十度の機動を試し、機動性能の向上を肌で感じる。その分体への負荷は重くなっていることも感じた。

『どうだい？　問題は―ないと思うけど―あるかい？』

「ないな。いい機体だ」

機体の巨大さを感じさせない高機動だ。これなら小回り性能でもドップに勝てるかもしれない。速度、機動性能すべてにおいて優秀な傑作改造である。

『これが量産できたらいいんだけど、パーツがめちゃくちゃ高いんだ』

「日本製だからか」

『そういう事』

冗談には冗談らしく、ユンも返した。

『任務後なので、しっかり休んだほうがよろしいのでは？』

リア少尉が通信回線を取り戻して具申する。メルヴィンは基地の残り少ない戦力であり、その意見具申はもっともなのだが―

「―この方が体が休まる」

彼はパイロットなのだ。空に憧れ空で生きる男である。彼の立つ舞台は常に空だった。

『戦闘機乗り、理解できないね』

自分からしたらお前のような技術者もわからん、とメルヴィンは胸中で毒づいた。奇抜な兵器を考え出しありえないような技術でそれを実現させる。時には駄作を作り出し時に傑作を生み出す。しかしそれでも使用者のニーズには合わないこともある。お前みたいな

連中が、一つ目の歩く人型兵器なんて考え出したんだろうよ。
メルヴィンはしばらく空を飛んでいた。その間考えていたのはあの黒い機体のことである。奴は墜とさなければならない。
「あの黒い奴は……俺に討たせてください」
例の作戦の後、地上に降りたメルヴィンに単座型フライアローのパイロット—コールサイン、アロー・スリー—が言った。彼と分隊を組んでいたアロー・フォーの二人は撃墜されて死んだ。例の、黒い新型にだ。
「あまり、憎しみに囚われるな。必要な時だけ撃て」
「わかりました……だけど、俺は討ちます。あいつを必ず」
「……」
戦争なんてものは、実はこんな簡単な事なのかもしれない。殺されたから殺して、殺したから殺されて。怨みと憎しみの連鎖、そしてなにも残さない惨劇。あまりにもくだらない—人間の性と業だ。
それを目の当たりにしたメルヴィンはなにも言えない。なにも言わなかった。誰もこれは止められない。ジオン公国と地球連邦、どちらかの敗北があるまでこの戦争は止まらないのだ。そして憎しみの連鎖はたとえ戦争が終わったとしても断ち切ることは誰にもできないであろう。
アロー・スリーは敬礼をして踵を返した。あの具申は邪魔するな、という意味だったのだろうか。しかしメルヴィンにはその真意を理解しようと思えなかった。
なんのことはない、どうでもよいのだ。
自分があいつを墜とせばいいのだから。それで連鎖は断ち切られる。いや、連鎖は自分で負うのだ。
自分にはもう戦場でしか生きられないという枷があるが彼は違う。彼のような若者に、憎しみの連鎖に、戦場の悪魔に魂を引かれて欲しくはない。
「隊長、死なないでくださいね」
フライトを終えて、ロッカールームでフライトスーツから内勤服に着替えて出てくると、そこにはリア少尉がいた。悲哀の感情を含ん

だ眼差しをメルヴィンに真っ直ぐ向けている。思えばリア少尉は配属になってからずっとクローバー隊のオペレーションを担当している。そういったあたり、クローバー隊は彼女にとって重要な存在なのかも知れない。
「……まだ、死ねない」
「絶対ですよ。隊長が死んだら、戦争に勝っても喜べませんから。これ以上、帰ってくる機が少なくなるのは嫌です……」
リア少尉が俯きながら念を押すように言った。メルヴィンはそんな彼女を励ましたかったがどうすればいいのかわからない。
「なんて、ごめんなさい。いやまったく！　隊長の方が疲れてるのにすいません！　ご飯でも食べましょうか！」
無理に、元気に喋り出すリア少尉。その偽物の笑顔がなんとも悲しかった。
「ああ。奢るよ」
「隊長はちょっと仕事人間すぎますよね、他の人たちみたいに遊びに行ってはどうです？」
「……普通だと、思うんだが。あいつは？　トゥー」
メルヴィンがそう聞くと、リア少尉ほらあ、と呆れるように言う。
「なんでオフの時までコールサインなんですか！　……彼なら近くの村です」
近くの村？　一体なんのためだろうか。
「詳しくは知りませんが……ナンパ？　そう言ってました」
ナンパ？
「今度隊長も一緒に行ってみてはどうですか？　ナンパ」
「遠慮しておく……」
扉を開けて室内に入る。しかしさほど気温と変わらない。どうやらエアコンが効いていないらしい。
「まあ、ナンパは嫌ですけれど」
「スリーは？」
リア少尉が溜息をつく。しまったと思ったがもう既に遅くリア少尉は答えを口にし始めていた。

「わかりません。でも噂だと行きつけのお店があるらしいですよ。隊長はそういうのってないんですか？」
「ない、な」
「つまんないですねー」
　失礼な発言があった気がしたが気には留めないでおく。割と長い付き合いだから慣れっこだ。
「次はどうするんでしょうね、司令」
「さあな……。だがこれ以上増援を送ってもらうわけにもいかないからしばらくは防空任務になるだろう……」
「ミデア輸送隊も帰るに帰れませんね」
　勝利を確信した作戦だった。慢心して前進を続ける敵機甲部隊を迅速な対地攻撃で破砕する。敵の航空兵力に対しても十分な警戒と護衛があった。負けるはずがないのだ。否、負けるはずがないというのは違う、現に負けたのだから。
　たった一機で戦局をひっくり返したあの黒い機体。あの機によって確信は慢心へと変わった。
　この基地に増援として到着した航空戦力は殆どが撃墜ないしなんらかの損傷を受けたため二機のミデアを輸送し送り届けるだけの戦力はこの基地に残されていない。
「ああ」
　共感したメルヴィンはそれを示した。
「無表情のお二人が歩いてると、怖いっすね」
　ビールを持ったクローバー・フォーがそう声をかける。確かにメルヴィンは言うまでもなく無表情で寡黙な男であり、リア少尉もメルヴィン程ではないかあまり表情豊かな方ではない。だから側からみればとても雑談中とは思えないのかも知れなかった。
「雑談中よ。って、作戦前に飲酒？」
　リア少尉の無表情にやや怯えるフォーに少尉が尋ねる。そういえば二人とも少尉である。
「ああ、これはおやっさんへのお遣いです」
「……」

「なんだよ？　その目は。まるで可哀想な人を見るような……」
フォーが怪訝そうに目を細めた。こちらからではリア少尉の表情は覗けないが恐らく哀れみを込めた目で見ているのだろう。
「違うから！　俺の善意で買ってきたんだからな！」
「おーい！　早くしろよ新米！」
食堂の方から声が聞こえる。野太いおやっさん―整備長の愛称―の声である。
「違う、違うんだオルグレン。誤解してる、これは誤解だ。パシリなんかじゃない」
そう言いながら走って食堂に入っていくフォー。リア少尉はその姿に溜息をつき、そして歩みを進めた。メルヴィンもそれについていく。
軽い扉を開けると冷房の心地よい風が二人を包んだ。
「ふう。エアコンが効いてると気持ちいいですね」
「ああ」
カウンターの席に座る。白を基調とした室内―店内で、普通のレストランとさほど変わらない。変わることといえば客が全員士官であることぐらいか。
「じゃあ私はカフェラテとサンドウィッチでお願いしますー。卵のやつねー」
……メルヴィンが奢るということを覚えているのか否か、リア少尉は座ってすぐに注文した。厨房の男が了承の声を上げる。
「俺は……紅茶とハムのサンドウィッチ」
メルヴィンの注文は果たして聞き取ってもらえたのだろうか。分からなかったが確認せずそのままにしておいた。別段腹も減っていないので来なかったら来なかったで構わない。
「私、戦争が終わったら故郷に帰ろうと思うんですよね」
「……。故郷？」
そういえばリア少尉の出身を知らなかったなと思い尋ねる。
「私の故郷はスコットランドの小さな町です。田舎だからご存じないでしょう」

「偶然だな……。俺も故郷はイギリス。イングランドだ」
「そうなんですか！　知らなかったなあ。だから紅茶派なんですね」
　欧州戦線では地球連邦軍の劣勢が知られている。情報の錯綜によって詳しいことはまだわからないが二人は自身の故郷について不安の念を抱いていた。ジオンの侵攻によって占領ならまだしも、街自体が壊滅しているかもしれない、そう思うと安らかな気分ではいられなかった。
「ああ。コーヒーは好きになれなくてな」
「私もです。ココアは好きですけどね」
　だがこんな時まで気にしてられない。今は目の前のことに集中すべきだし、脳内を戦争に埋め尽くされてはやっていられないだろう。
「へいよ、カフェラテと卵のサンドウィッチ、紅茶とハムのサンドウィッチだ」
「ありがとうございまーす」
「ありがとう」
　カウンターの上に置かれたサンドウィッチとカップを受け取る。
　一口紅茶を口に含んだ。うむ、やはりこの味である。落ち着きや安息を得たいときはひとまず紅茶を飲むといい。それでも駄目なら読書か睡眠だ。飛んでもいいが。
「ぷふー。おいしい」
「軍は嫌になったか？」
　ここでメルヴィンが話を戻す。この戦争に終わりがあるのか知らないが、ある程度の仮定の上で予定を立てて文句は言われまい。
「それもちょっぴりあるんですけど、実家の店を継ごうかな……って」
　にこりと笑ってみせる。
「実家の店？」
「ええ。小さなパン屋です。よかったら隊長も来てみてください？味には定評があるんですよ」
「戦争が終わったら……是非行かせてもらうよ」
　社交辞令抜きでそんな事を言ってみた。もっとも、戦争が終わろ

うともメルヴィンに軍を辞める気はなかったのだが。しかし休暇くらいは取れるかもしれないではないか。
「その時は私の奢りですよ！　今回のお返しです」
そう言って微笑むリア少尉。やはり軍人の女性としてはまだ若いな、とメルヴィンは思った。
「ありがとう」
「ところで、大尉の実家はなにをされているんです？」
確か……そうだ、自動車の修理業だ。戦争の初期に送られてきたビデオメッセージには戦乱のおかげで故障する車が多くて大儲け、なんて冗談を抜かしていた。
「自動車の修理屋だ」
「なるほどー、今や大金持ちかも知れませんね」
「そうかもな。税金にとられてなければいいが」
戦争が始まり、そして地球連邦が劣勢を強いられるようになると、国民の生活は戦争の為へと傾いた。数回に渡る増税やしつこい寄付金の請求などはその最たる例である。
「税金が増えたら、私の家もピンチですよ」
「そうだな……」
食堂の担当がラジオの電源を入れた。少しの間ノイズが流れて、すぐに軽快な音楽と共に女性の声が語り始めた。彼女の語りに注意して耳を貸すこともなく、やがて流れ始めた音楽を背景音楽としてメルヴィンは残ったサンドウィッチを頬張る。それを見ていたリアもサンドウィッチを齧った。
「この戦争が終わるまで、頑張らなきゃ！」
勢いよく残りのサンドウィッチを口に押し込み、カフェラテを飲み込むリア。まだ四割ほどあったのでなにやら口をもごもごさせていた。一方メルヴィンは男性としての口の広さやリアと違い無理をしなかったこともあり余裕を持って食べることができた。まだ口をもごもご言わせているリア少尉の背後に、遠くのテーブル席にいるクローバー・フォーが見える。
彼はこちらを心配そうな目で見やっている。

「俺も、できることを尽くす……」
カウンターテーブルの上に金を置くと、メルヴィンはリアを置き去りにして歩き出した。
「ありがとうございました！」
「やあ、リア―」
リア少尉に声をかけるフォーの台詞を背に、軽いドアを開いて食堂を出た。空調の効いた食堂とは反対に生暖かい空気が頬を撫でる。
しかし特に用もないので、気分に任せて階段を上った。三回建ての建物の屋上を目指す。空軍の人間はいつでも空を見ていたいのか、それとも人は皆空を見上げるものなのかは知らないがメルヴィンはよく屋上で空を見る。見るというより、眺める。
時には一人で考え事に没頭し、時には部下の悩みや相談を聞いたり、時には基地の男達と他愛のない話をする。今日は一人でゆっくりしようと思い屋上へ向かった。
ややぼけた白色の階段を上っていく。窓から差し込む太陽の光が白色の壁に反射して少し眩しかった。
軍靴が階段を上る音が響いて、やがて扉が見えた。フロアに一つしかないその扉を押して開くと、より一層眩しい光が差し込んだ。
そういえば、グラハムもここが好きだったな。複座戦闘機フライアローの相棒を務めていた男だ。彼は任務の後毎回ここに来て缶ビールを飲んだ。そして決まってメルヴィンもそれに付き合わされるのだ。任務のことも話したし、故郷のことも話した。
「この調子じゃ、俺は失業かね」
夕日を眺めつつ、柵に寄りかかってビールを飲むグラハム中尉。メルヴィンの方が一つ階級は上だったが、それでも気兼ねない間柄だ。でなければ命を預ける事などできまい。
「そうだな。機関銃でももたせた方がマシだ」
「そりゃないぜ」
ふはは、と笑うグラハム。メルヴィンも静かに笑った。ジオン軍の攻撃はミノフスキー粒子の散布と共に行われ、それは地球連邦軍の兵器の多くを無能とした。複座戦闘機フライアローの後席に座る兵

装システム士官である彼は、レーダーも誘導ミサイルも封じられ、正に失業した状態にあったのだ。
「きっと人員が不足する。貴様もこちら側に回されるだろうよ」
「そうだな。精々転科訓練に励むとするぜ」
フライアローのキャノピーからの景色。青空。撃墜され黒煙を引いて地面へ向かっていく友軍機。赤く染まるＨＵＤ。機首の前で右往左往する雲。後方確認用のモニターに映るドップ。
フライトスーツ越しに伝わる操縦桿の感触。汗に滲む手。機体の揺れと自身にのしかかるＧ。咄嗟に行うミサイル破棄の手順。機体が軽くなる感覚。
―爆発。ミラーに映る爆炎の中から出てきたのは、黒いドップだった。直後、機体を衝撃が襲う。ダメージレポートにはもう飛行ができないことが示されており、メルヴィンは宣言すると座席の脇にある射出座席のレバーを全力で引いた。その後は滅茶苦茶だ。
グラハムは死に、自分は生き残った。そう言えば事実は説明できるだろう。
あの時、自分達を撃墜したのは黒いパーソナルカラーのドップだ。
そして奴は、今また自分達の前に立ちはだかっている。
墜とす。アロー・スリーの為にも。リアの為にも。グラハムの為にも。
「ほらあボーニャー。よくわかんない魚だよぉ」
考え事に囚われていると、不意に声が聞こえた。聴き覚えのない女声だ。
赤髪に白い透き通った肌。青色の瞳のその声の持ち主は、まるで子供のように小柄な女だった。
「こ、こんにちは！」
メルヴィンを発見し慌てたように敬礼する彼女。中尉の階級章が貼られた空軍の士官服に、赤色のベレー帽を被っている。
「気にしなくていい」
簡単に告げるとメルヴィンはやや離れたベンチに座る。中尉は

どうやら猫の相手をしているらしい。魚の切り身が置かれた皿を猫にやっている。猫の方は茶毛の猫だ。瞳は中尉のように青い。
自販機でノンアルコールの飲み物を購入してベンチでそれを啜る。空は青く澄み渡って、所々で雲が泳いでいる。
平和な空。確かにこれでは、世界中が戦場で、オーストラリアにはコロニーが突き刺さっているとは思えない。だが確かに、今も何千という人が死につつあるのだ。それを噛み締めながら、彼は空を眺める。
「まったく、暑くて暑くて。嫌になりますぜ」
相変わらず猫を可愛がっていたタチアナに、ルーカス軍曹が声をかけた。タチアナと同時に猫も鳴き声を上げて返事をする。
「ほんと。しかもこれでもマシな季節なんだって言うから呆れるよ」
「バーベキューにされるのも時間の問題ですよ」
ルーカス軍曹は上半身タンクトップ、タチアナ中尉は袖をまくっている。それでも彼女らの服は沢山の汗を吸っている。
タチアナが座っていたベンチに、ルーカスも腰掛ける。
「私達、しばらくここに残るそうよ。まあミデアだけで飛び立って、ジオンの戦闘機に囲まれるよりはマシってことね」
「しっかし、ここにいてもやる事もないし、飯を食って寝るだけですぜ？」
「猫ちゃんを可愛がってればいいんだよー」
そう言うとタチアナは猫を抱き上げて揉みくちゃにした。猫は不満そうに鳴き声を漏らす。
「名前はつけないんですかい？」
「うーん？　じゃあコーシカちゃんでいっかな？」
コーシカはロシア語で雌猫を表す言葉だ。タチアナはロシアと呼ばれる地域で育ったため、公用語は英語でもロシア語の教養があったのだ。しかしあまりにも安易である。ルーカスはそれに気付かず、ロシア風の名前だな、とぐらいにしか思えなかった。
「コーシカちゃん、悪くないですね」
伸ばされたルーカスの手を、猫、もといコーシカは叩いた。愛撫

を拒否されたルーカスは寂しそうに手を引っ込める。
二人の沈黙をを破ったのは、唐突なビープ音だった。警報と共に、男性オペレーターの声がスピーカーから飛び出す。
『友軍レーダー基地より緊急連絡。敵戦闘機とみられる飛行体を確認。至急迎撃されたし。クローバー隊一番、二番機スクランブル。繰り返す、クローバー一、二番機、スクランブル発進願います!』
状況を確認するためスピーカーに目線を投げていた二人の前を、疾走する人影が通った。他ならぬ、メルヴィン・ライアン大尉である。

第六章

第六章

『敵戦闘機は四機。恐らくは爆装したドップだと思われます。先日より度々我が軍を断続的に爆撃し、損失は無視できないものとなってきています。クローバー隊は長距離空対空ミサイルによって、これらを駆逐して下さい。基地からの通信は不可ですが、地上の友軍が情報支援を行ってくれる手筈になっています。ミノフスキー粒子が散布されてはそれも使用不能ですが、幸い敵は勢力圏に近い事や、先日の我が軍の損失に油断しているようでそのような大規模な動きはありません。しかし敵勢力圏に近い事は事実なので素早く敵を駆逐し、無事に帰還して下さい』

「了解。長引かせるなよ、トゥー」

エンジンの唸る音の内側で、オペレーターから作戦の説明を受けた。

二対四では分が悪い気もするが、その為の長距離空対空ミサイルだろう。要は敵が対応する間もなくミサイルを発射し、一撃離脱の戦法を取れということだ。レーダーの索敵範囲では彼我にあまり差はないから、捕捉されるのを遅めるステルス技術と高速飛行が必要となる。あるいは、味方の地上軍からデータリンクによって支援してもらうのも手だろう。

キャノピーの外側で流れていく雲は厚い。が空は青く晴れている。後方確認用モニターで後方を確認すると、クローバーのエンブレムが描かれた主翼と二枚の垂直尾翼が覗ける。当然ながら隣には僚機、クローバー・トゥーが飛行していた。僚機であるセイバーフィッシュのキャノピーでは、トゥーというコールサインの中尉がこちらを見てサムアップで応えている。同じくサムアップでトゥーに返し、前を向きなおる。

『こちらは第十一物資集積基地！　現在敵の爆撃を受けており、至急援護を求む！』

壮大な雑音と共に無線通信を受けた。細かな位置修正をし、無線

を返す。
「こちらは増援の航空隊だ。レーダーは生きているか？」
『来てくれたぞ！　ただいまそちらを補足した。二機か……思ったより少ないんだな？　対空砲のレーダーをリンクして、敵機の情報を送る！　……それ来たぞ！　迎撃始め！』
　モニターの端に表示されるレーダーサイトに、情報が追加される。敵は四機だ。そして全ての機体にロックオンのアイコンが追加される。
「ミサイル、発射する」
　サイドスティックのミサイル発射スイッチを押し込み、ミサイルを解き放つ。空対空ミサイルに搭載されたブースターに点火し、飛行。地上軍から送られるデータを基に敵機を探した。やがてドップの吹き荒らされるバーナーを補足する。
　メルヴィンは高度を下げながらモニターを睨んだ。モニターの中ではミサイルを示すアイコンが敵機のアイコンに迫っていく様子が光で示されている。
　鳴り止まない地上からのレーザー照射に、舌打ちを打つ。爆撃仕様を護衛するドップの奇形のコックピットに収まる男、モビアである。そして、相変わらず騒ぎ続ける対空機関砲に機関砲弾を突き立てから気付いた。
「ミサイルだ！」
　フレアを撒き散らし回避行動を取る。僚機の三機も同様だ。ビープ音がけたたましく主張する間、操縦桿を捻り、フレアを放出しながら叫んだ。
　無茶な機動でミサイルをかわすと、僚機の状況を確認する。どうやら彼らもかわしたらしい。
『畜生が！　どこのどいつだ！』
『敵戦闘機です！　この賭けは我々の負けだ！』
「地べたの連中がデータリンクしてんだろうよ！　爆撃装備は退避しろ！　カッパ・スリー！　連中をやるぞ！」
　エンジンを吹かし、ミサイル発射のあった方向へ進む。しかし、

すぐに再びのビープ音。進路を諦めて旋回し、ミサイルをかわす。ロックオンアラートは鳴り止まないが、ひとまずミサイルはかわし――爆散。

メルヴィンは撃破したドップのすぐ側を斜めに突っ切り、アフターバーナーで急上昇をかける。トゥーが空対空ミサイルを発射する間にメルヴィンが低高度より急速に接近し、無理矢理ドッグファイトに持ち込む。それがクローバー隊二機の作戦だった。三つ葉のクローバーはそのまま緑色のドップに肉薄する。

メルヴィンは機体を傾け、旋回した。セイバーフィッシュのエンジン出力を生かして大きな円を描き、背後を取った。すかさず引き金を引き、鉛の機関砲弾をドップの機体に突き刺す。弾の集団はコックピットの周辺を抉り、パイロットの脱出も許さなかった。炎を上げて墜落していく元敵機、現在進行形のスクラップには脇目も振らず、もう二機のドップへと機首を向けた。

ビープ音。ロックオンアラートだ。次いでミサイルアラートが鳴り響く。メルヴィンが前方を睨むと、炎を吹いて接近するミサイルが見えたので、引きつけて回避運動に入った。回避したメルヴィン機のすぐ横をミサイルが通り過ぎた。早めに気付くことができてよかった。

敵機をロックオンし、ミサイルを放つ。空中に放り出されたミサイルが敵機に向かっていく。爆撃装備だったドップは既に対地ミサイルをすべて撃ち尽くし、護身用対空ミサイルで戦闘態勢に入った。身軽になったドップはフレアを放出しながら旋回した。機体の小さを利用し細やかな機動による小回り旋回だ。

今度はそのドップが反撃に出る。セイバーフィッシュの背後を狙った。ドップが秀でる、高機動性だ。

メルヴィンはエンジンの出力を上げた。確かにドップは機動力においてセイバーフィッシュを凌ぐが、エンジンの出力では及ばぬ面がある。増速でドップを引き剥がし、ドップの二連装機関砲は空を切った。大きな旋回でもう一度ドップの背後に迫るメルヴィン。

もうミサイルは残っていない。

機関砲弾を叩きつけ、隣を抜き去った。キャノピーの支柱に貼り付けられたミラーで撃墜を確認した。レーダーに映る最後の一機はもう逃走を開始したようだ。敗走する一機は無視し、その空を旋回する。

『ありがとう、助かった！　我々はじきに補充を受けられるそうだ。にしても、凄い腕だな！　我々が君達の名前をプロパガンダで聞くことになるのは、そう遠くない日なのかも知れんな！』

「ありがとう、了解した。我々も撤収する」

ゆっくりと地上軍を見下ろしながら旋回する。所々で炎が黒煙を吐き出している。車列を作って行軍する彼らから目を離し、メルヴィンは操縦桿を握りなおす。

第七章

第七章

「クソ！」

稀に響く音だ。ブーツでロッカーの端を蹴る音。その音の主は公国軍航空基地の男性用ロッカールームのロッカーだ。鳴らしたのは夕刻帰還した攻撃隊の生き残りのパイロット―コールサインはカッパ・フォー―である。

自分の隊で、自分だけが残ってしまった。たまたま爆撃の役割を持ったために。たまたま一番、敵から後回しにされたために。自分のために、隊長も、相棒も後輩も死んだ。

彼は扉が歪んでしまったロッカーに汗だらけのノーマルスーツを押し込むと、扉を雑に閉じ、部屋を出ようとする。しかし、それに声をかける男がいた。

「クローバーのエンブレムが描かれた真っ白のセイバー。そいつはいたか？」

その男とは、アルフォンス・フォン・ハルツハイム少佐に他ならない。彼は義手の右腕を鳴らすのが癖で、今も義手を鳴らしている。

「ええ。いましたよ。そいつが三機とも墜としたんです」

苛立ちながらも振り向き、ベンチに腰掛けるハルツハイムに答える。思い出すだけで、腹が立ってくる。あの小馬鹿にするような戦法。そして赤子の手を捻るような腕前。奴は、楽しんでいるのだ。

「……失礼します」

苛立ちをも置いていけるかと思ったが、やはりそんな事はなく、不愉快な気持ちを引きずりながらカッパ・フォーは兵舎に向かった。

「くっ……。くくく……」

あいつめ。また面白い戦果を見せてくれたな。少数ながら多数のドップを踏み倒した先日だけでなく、またもや二倍の数のドップを奇襲し、隊を壊滅させやがった。それも三機を一度に。とっくに奴はエースパイロットの一人という訳だ。それも超優秀な。

笑いが腹の底からこみ上げてくるようだった。そんな化け物と

刃を交える時を想像するだけで、口元が大きく歪んだ。
次の待機は自分の番だ。ノーマルスーツを中に着たジャケットのポケットから懐中時計を出し確認する。
待機室のモニターではカッパ・フォーの持ち帰った映像が映し出されていた。まずはカッパ・ワンがリンクしていた映像である。荒い映像にＨＵＤのＣＧが組み合わさり、そしてパイロットの声が入っている。
高速で飛行していた。ターゲットを示すカーソルが空の向こうの敵機を囲み、捕捉、と表示する。しかし既に敵は先手を打ったようで、ミサイル接近警報がけたたましく鳴り響く。
『ミサイルだ！　回避する！』
ミサイルの直撃コースからは外れたが、ビープ音は鳴りやまない。そして、映像は停止した。
切り替わった映像には、撃墜されたカッパ・ワンが映し出されていた。護衛機のカッパ・トゥーなのだろう。
『くそ……』
撃墜したのはカナード翼の追加された白いセイバーフィッシュ。そう、ハルツハイムの求める機影である。
映像は青空を映し出していた。背後に回られているのだろう。ロックオン警報が鳴り、映像が揺れた。
『くっ―』
パイロットの言葉にもならない声の直後に停止。撃墜された。
二つの黒煙が少し離れたところに見えた。これはカッパ・スリーの映像なのだろう。
『まずい、ズラかるぞ！』
そう叫んでパイロットは対地兵器をすべて地面に捨てた。必要最低限の装備にして、機体を身軽にするのだ。
『ああ！』
上昇しつつ加速する。そしてドップは逃走を開始した。
だが、しばらくするとパイロットが方針を変える。
『追いつかれる！　フォー！　さっさと逃げやがれ！　俺があいつを

殺る！』
　旋回しつつフレアでロックを外しにかかる。機動性能ではドップに分があるのだ。やり方次第では勝てるかもしれない―が、それが叶わなかった事はモニターを睨む皆が知っていた。エンジンの推力によって背後から引き剥がされたドップは、なす術もなく背後を取られてしまう。
『駄目だ、ベイルア―』
　映像の停止によって声は遮られた。報告によればパイロットの脱出は叶わなかったという。
「この前の三つ葉のクローバーの奴だ……」
　どこかの兵士が呟く。やはり三機を墜としたのはすべて奴か。白塗りの機体に大きなクローバーのエンブレム。追加されたカナード翼。間違いがなかった。あの戦術。あの戦い方こそ自分を魅了する奴の証拠だ……。そしてハルツハイムは思い付く。
　そうだ……。奴と、あのクローバーと決着をつける方法を思い付いた。また笑みが溢れそうだった。

第八章

第八章

アツシ・ユンがメルヴィンの機体に塗装をしていた。撃墜数のマーキングである。彼の持つ星の数は計十五だから、とっくに彼はエースパイロットの仲間入りを果たしていた。

特注のカナード翼を生やした白い機体に鮮やかな緑で大きなクローバーのエンブレムが描かれている。そして機首には七つの星。垂直尾翼には地球連邦空軍のエンブレムだ。

「隊長は凄いです」

塗装と整備を終えて機体を眺めていたユンにリア少尉が話しかける。ファイルを抱えた彼女は黄金色の美しい髪をゴムで一つにまとめていた。

「ああ。立派なエースパイロットだ。なのに上には記録を上げないんだと」

「必要ないからってちゃんと撃墜記録の申請もしないんですよ！　あの人！」

地球連邦空軍の撃墜数は本人の申告によってカウントされる。その為見間違いなどで多く、あるいは少なく申告されることも少なくなかった。多くの場合僚機の証言やガンカメラ、レコーダーなどの記録で証拠を残すこともできるのだが、意図してそうしない者もいる。虚偽の申告もまた、あったのだ。

「まったく……変人だな」

「ええ、変人です」

いつもメルヴィンが浮かべている無表情を思いだし、二人は小さく吹き出した。

「あの人奥さんとかいないのかな？」

「いません。ずっと戦闘機一筋だそうで。まったく……寂しい人ですよ！　この前だって―」

妙に感情を移して語るリアの話を聞きつつ、ペットボトルのコーラを口に流し込んだ。冷たく弾ける炭酸が心地よい。

「リア少尉は、ひょっとして彼が好きなの？」
　思い切って聞いてみたユンの表情は、面白がっているようにも、優しい笑顔にも見える。
「ぜ……全然ですよなんでですか！」
「いやー……なんとなく？」
　今度は確実にいたずらな笑みだ。リアは呆れ半分の溜息をつき、先同僚に聞いたばかりの話を持ち出す。
「また後退したらしいです、前線」
「戦前は超僻地の後方航空基地だったのに、今じゃ最前線は目と鼻の先だ」
　ですね、とリアは自嘲するような笑みを浮かべた。戦争が始まり、基地は拡大された。増援の部隊も来たが、それらはすぐに消費された。今もまた新たな増援を待っている状態なのだ。連邦軍は圧倒的な物量を持っているが、ジオンの開発した人型兵器の前にそれらは飲み込まれていった。
「陸路で到着した物資は、ヘスコ防壁やＶＡＤＳの類です。まるで前線基地です……戦闘に巻き込まれる事は覚悟しておけ、て事でしょうね」
「マジ？　ますます帰れないねえ」
　ユンはそう言いつつも面白がっているようだ。
「レーザー誘導ミサイルもまとまった数が集まったそうです」
「空対空レーザー誘導ミサイル。僕が洞窟で研究してたミサイルだ。ミサイルは全部、少しずつだがこいつに変わっていくだろう。あるいは映像誘導のものも研究中になっているが、どうだかね」
　おっと。軍事マニア……ではないか、本職だし。とにかくリアにはあまり理解のなさそうな小難しい話が始まってしまった。リアは彼の話をまともに処理できず、耳から入った情報はそのまま忘却の彼方へ消えていった。
「ミノフスキー粒子の影響下じゃあレーダーも赤外線も使い物にならないから有線か映像、レーザーになる。対ＭＳ重誘導弾とかいうのがいい例だ」

私も軍人だし、これぐらいわかったほうがいいんだよね……と自らを戒めてなんとか相槌を打つ。
「磁気誘導……とかですか」
「それもある。もういっそのこと、鳩に誘導させた方が早いんじゃないか」
そんな風に言ってユンは笑った。つられてリアもなんとなしに笑っておいた。そんなに面白いジョークだったか？　今のは。
「『プロジェクト鳩』。可哀想だからあんまり好きじゃないかな」
タラップを降りてきたのは女性の士官だった。どうやら中尉らしい。
「そうだね、あれは馬鹿げてる」
リアにはよくわからなかった。まさか、実際に鳩でミサイルを誘導させるプロジェクトがあるとは思えないし……え？
「普通に考えればイメージホーミングが一番現実的。てか、あんた一体何者？」
にやりと笑ってその女性士官はユンに訊く。
「僕はただの技術屋さ。ジャブローの」
「ジャブロー!?　ジャブローって、あのジャブローですか？」
ジャブローは、地球連邦軍の総司令部があると言われる基地だ。とは言っても、そもそもどこにあるか自体彼女ら一般の連邦兵士は知り得ない。極秘機密なのである。地球連邦軍の最高機密で技術士官をやっていたとなれば超が付くほどの腕利きということになる。
「さっきも言ったんだけどね。色々面白いことをさせてもらってた」
驚愕して声を上げたリアにユンは軽く答える。先の女性士官は呆れたような顔で
「あなたが何者かはわかったけれど、だとしたらあの基地司令さんは何者なのよ……」
ジャブローから新型の機体と技師を引き抜けるとは、とんでもないコネを持っているに違いないのだ。何者なのだ。やはり、ジャブロー行きを狙っているというのは本気なのか……？
「さあね？　君と同じく、さっぱりだよ」

「あ―申し遅れちゃった。輸送科のタチアナ中尉です。私達が持ってきたセイバーのブースターユニットは使わないのかしら？」
「一基しかないんじゃ、特攻機ぐらいにしか使えないんだ。僕の機体をテロリストに使わせる気は毛頭ないよ」
　タチアナと名乗った中尉は、猫を抱いていた。黒い毛並みに青い瞳を持ち、どことなくタチアナ中尉に似た猫だった。
「あ、可愛い」
　それを見たリアは声を上げる。軍人であっても女。キュートなものと色恋沙汰には目がないのだ。
　黒猫はそれでも興味はないよと主張するように欠伸をする。その仕草が更にリアを喜ばせたのは言うまでもないだろうか。
「ここより二つ前の空軍基地でうろついてたから拾っちゃったんだ」
「そうなんですか」
「可愛いでしょ？」
　ええ、とっても！　とリアは答える。二人のガールズトークが始まるとユンは静かにその場を離れた。ああいった話題にはさっぱりついていけないのだ。
「今度街に出てみようかな」
「あ、じゃあ今度、私と二人で行きませんか？」
　リアは照れながらも自然な形になるように提案する。嬉しそうにタチアナもそれに賛同した。
「いいねいいね！　あ、ビーチも行きたい」
「ビーチ……ですか」
　リアの脳裏に、沿岸の景色が映る。ジオンの狂気の作戦、コロニー落としによるオーストラリア、オセアニア、東南アジアの被害は絶大だった。過去最大規模の津波が各地沿岸を襲ったのだ。東南アジアボルネオ島も例外ではなく、水産業から沿岸の街などは残らず壊滅した。勿論ビーチも例外ではない。混乱の隙を突くようにジオンの降下作戦と侵攻が始まり連邦軍は大規模な後退を強いられたため現状はわからないが、地球連邦の支配下にある海岸も今や観光地としての面影はほぼ残っていない。

「あ……」
　タチアナも気付いたらしく、ごめん、と詫びた。雰囲気を変えようとリアは新しい話題を広げていく。
「別にいいんです。戦後になら行けると思いますし、行きましょうね！」
「うん！」
「そういえば、中尉は婚約者とかっていらっしゃるんですか？」
「いないよ。リアは？」
「私もです」
　二人はそんな風に打ち解けていった。地球連邦軍の約一割を女性兵士が占めるとは言え、女性は少ない。彼女らにとって、同性の友人はかけがえのない貴重な存在なのだ。
「いつかできるといいね」
「ええ」

第九章

第九章

「連邦軍航空基地の制圧？」

ジオン公国軍の地球制圧軍は既に地球各地を制圧下に収め、多数の基地を配置していた。その中の一つ、航空基地である。その基地内、基地司令室の部屋で部屋の主と対面していたのは戦闘機パイロット、アルフォンス・フォン・ハルツハイムだ。佐官用の第三種戦闘軍服に、制帽をかぶっている。

「……」

オセアニア、アジア地域を結ぶこの地域でジオン公国軍は進出から現在まで、順調に地球連邦の基地や戦力を奪取してきているが、大型の航空基地を前にしてその勢いは停滞を見せていた。その速度は問題視されるほどの低速ではないものの、公国の上層部はさらなる迅速な占領を望んでいたのだ。前線を知らぬ上層部と最前線の兵たちの間には摩擦がつきものだった。

「だが我が部隊には戦力的な疲労が溜まっている。増援を申請はしているが―」

「中佐殿。私が意見具申したのは、考えがあるからです」

ハルツハイムの表情に変わりはない。皺の多い顔の造形は実年齢よりだいぶ歳をとって見せるが、その顔の表情筋は基本使われず、時々見せる不気味な笑みがひどく印象にこびりつく男だった。

「現在の戦闘は小規模な敵陣地との交戦であるが、最近の戦闘で連邦の航空基地周辺の陣地に対し優勢だと聞きます。同時に、残念ながら敵航空戦力によって我が隊は目立った戦果を挙げられていない。このチャンスに、我々が航空基地を陥落せしめることで、一気にこの地域の占領を加速できると、私は考えます」

「うむ、一理ある。いや、それが最善だろう。少佐の意見であるし、周辺の地上戦力と問い合わせ前向きに検討しよう。……下がってよし」

敬礼を済ませてハルツハイムは部屋を後にした。恐らく自分の意見は受け入れられるであろう。地球占領を焦る上層部の圧力が日

に日に増しているのはどのような馬鹿でもわかることだ。士官学校上がりの若い司令官は負担が大きく、できることなら自分のような古参兵に判断をある程度任せたいというのが本心なのだろう。

二日という時間を経過させ、公国軍は侵攻作戦の準備を進めた。これまでの公国軍連勝の肝は、その迅速かつ柔軟な運用である。その掟を忠実に再現するのが、公国軍士官の義務であると言っても過言ではない。

余談だがモビルスーツは正にその運用法に適した兵器だ。盾は使いづらいと思われる右肩に固定し、流れ弾対策のみとする。ＡＭＢＡＣを活用した高機動により素早く敵の懐に突入し敵の陣を崩すのだ。その後方からモビルスーツ以外の兵器が突入し殲滅する。それがモビルスーツの運用思想であり、故にザクは攻撃する側を想定し設計されたというわけだ。運用思想を色濃く反映した兵器と正しい運用。それこそが最も兵器のポテンシャルを発揮することができる法則である。

「あー、今回の作戦を情報面で支援するアルマーダ少尉です。で、では作戦を説明します。この作戦はこの地域のパワーバランスを大きく傾けることができる作戦で、勝てば一気に占領を加速できるでしょうが負ければ、今度は我々が反撃されるかも知れない作戦です」

「当然だろ」

二日後。作戦は細かい修正と共に決定され、兵士達にも説明がなされる。作戦の説明を始めた若い士官がプロジェクターの画像を切り替えた。そこに表示されるのは敵航空基地周辺の地形図である。

「静かに。我が地上兵力は決して多くありません。ですから、我々航空部隊が主体となって攻撃を担当します」

地形図に、いくつかのアイコンが表示される。

「現在確認されている敵陣地は航空基地外周の五ヶ所。そのうち我々はこの基地に近い三ヶ所の陣地を襲撃し、これらを撃破します。同時に地上部隊は周囲二ヶ所を攻撃、撃破し、先に航空基地本陣を攻撃する航空部隊に加勢し、これを制圧します。この作戦、素早さが命であります」

赤、つまりジオン公国軍の象徴となる緋色の矢印が青い陣地を破壊しつつ、本丸に攻め込むのＣＧが表示される。確かに陣地一つずつを各個撃破していけば順調に進められるだろう。
「そしえ、今回の作戦で鍵として使うのがこいつです」
表示されたのは巡航ミサイルだった。地球連邦のものだが衛星は墜ち、ミノフスキー粒子の支配する現代戦では大して役に立たないはずだ。
「こいつの弾頭にミノフスキー粒子を充填し、敵航空基地に向けて飛ばします。防空網を掻い潜り、基地周辺にミノフスキー粒子の散布状況を作り出してくれるはずです。そして我々はその粒子が無くなるより先に戦闘空域に仕立て上げればいい、というわけです」
ハルツハイムはこの作戦の説明に対し、特になにも思わなかった。腕を組み、静かにスクリーンを見つめるだけだ。早くあの白いセイバーと決着をつけたい、それが最も重要なことなのだ。
「それと―ハルツハイム少佐機は今回部隊に所属しない遊撃機として戦闘に参加してもらいます。各員の所属については各端末のデータを参照して下さい」
あの基地司令の男もなかなか能がある。そうしておけば自分を最も戦力として有効活用できるなどと考えたのだろう。間違ってない。ハルツハイムは心中にやりと笑った。その希望通り、連邦の雑魚共を片っ端から藻屑に変えてやろうではないか。だが、それもあの白いセイバーと決着をつけてからだ。《ラッキー・クローバー》……。
「作戦開始は明日の一九〇〇時。質問がなければ解散」
質問はないことを見受けた士官はパソコンを閉じ、それを抱えて部屋を出て行った。
「我々は少佐のお供ではないようですね」
ハルツハイムの元に部下のフィコとベルタが歩み寄った。
「そのようだな」
「我々は攻撃隊の護衛のようです。少佐、どうかご武運を」
ベルタとフィコに対し、ハルツハイムは手を上げて答える。いらぬ心配だ、と。

自信からではなく、生きる事への執着のなさからだった。
「少佐にあのような台詞は不要だったな」
フィコに対して、ベルタがそう声をかけた。フィコは短く笑って
「そばで少佐の戦闘を見れる特等席だったのに、残念でならない」
「その通りね」
二人はそのまま足を伸ばし、歩き始めた。ノーマルスーツではなく、一般的な士官服で、正しくは第三種戦闘軍服という服装だ。全体の色は濃い緑色で、それに大きくジオン的なデザインで階級を示すマークが描かれるマントが付属している。
「あの《ラッキー・クローバー》とかいう奴もなかなかの手練れだそうじゃないか」
ラッキー・クローバーというのは連邦軍の白いセイバーフィッシュにつけられたあだ名だ。非常に腕が立つことから幸運の持ち主としか思えない、ラッキーとつけられ、クローバーは彼のエンブレムである。隊長機、あのエースだけが四枚の葉なのだ。だから、それをとった名前を付けられジオンのパイロットから恐れられていた。
「一度の戦闘で瞬く間に三機を撃墜。どうかしてる」
そう言うベルタの表情は険しいものだった。
「その前の戦闘だって化け物みたいな戦果を挙げてる。あの作戦は見事な奇襲に嵌められたのが敗因だがな……。ミノフスキー粒子を散布する隙も与えてくれないとは、向こうには相当優秀な指揮官がいるのだろうか」
フィコが返す。知らん、とベルタはジェスチャーで返すのだった。
本来は先日の侵攻作戦で使うはずであった戦力をそのまま本作戦の戦力として引き継ぎ、迅速に編成の整理が行われた。それに加え公国軍は後方からもできる限り多くの戦力を掻き集めている。その戦力の中心となるのが、この航空基地に集結しつつある戦力だ。
ジオン公国軍の爆撃機であるドダイＧＡと小型戦闘機のドップ。それに後方で戦闘支援を行うルッグンや輸送機のファット・アンクル。地上戦力のザク、マゼラ・アタック、マゼラ・アイン、キュイ、Ａ

ＦＶも集結しつつあった。
まるでジオン軍兵器展覧会といった様相だな、とフィコは思った。歩くうちに屋外へと出てきていた二人は、そこで初めて地上からジオン軍の陸上兵器を間近に見たのである。特に二人が驚いたのはマゼラ・アタック。聞いていたがいかれてる。全高が少し高いぐらいは最早問題ではない。最たる問題は、車長か砲手が収まると思われるコックピットは剥き出しであることだ。ガラスがあるとはいえ防御力は高が知れているだろう。
「驚いたわ。本当にあんな兵器あるのね」
「俺、あれに乗れって言われたら両腕折る」
自分が普段乗り回している戦闘機。それを戦車の車体にのっけて戦え、と命令されたらと考えると身震いした。
マゼラ・アタックはＭＳの支援を主任務とする自走砲である。主砲１７５ｍｍ無反動砲、三連装機関砲を武装としその強力な火力をもって地球連邦の兵器と対峙する。まずＭＳが敵陣地を突破し、同時にマゼラ・アタックが後方より火力支援を行う。こうして敵に対し迅速に打撃を与えるのだ。巨大な車体はマゼラ・ベースと呼ばれ、それにマゼラ・トップ、主砲を備え付けた小型戦闘機のような砲塔を接続して自走砲の体をなす。
二人がマゼラ・アタックの車体に興味を示していると、小型連絡機であるコミュが下降してきた。垂直離着陸機が生み出すダウンウォッシュから逃げるように二人はやや離れたベンチまで移動する。自販機で適当なコーヒーを買うと、二人はベンチに腰を下ろした。
滑走路に駐機されているのは爆撃機だ。緑色の機体は夕方の闇に紛れていたが、それでも視認できないレベルではないので機体が確認できる。トースターに羽とエンジンをつけて完成させたような平べったい機体。だが能力は高く、驚くべきことにペイロードは六十トンに迫るという。四基のミサイルランチャーと二基のロケットランチャー、増設された弾薬庫によって怒涛の爆撃が可能だ。もっとも、その分空戦能力はないも同然であるが、それは爆撃機全般に言える事である。

だから自分達は彼ら攻撃隊の護衛につくのだ。適材適所があり、適所が最も高くポテンシャルを発揮できる環境である。自分の適所は空だ。空を舞い敵機を叩く。それが自分の天職だと、フィコは考えていた。

スペースコロニーで暮らす彼が飛行機に初めて乗ったのは幼い頃だった。地球へ降りた時に初めて乗った飛行機の驚きは今でも覚えている。

コロニーの宇宙港を通り民間の宇宙船に乗る。そして月まで向かってから乗り換え、地球に降りる。そして地球で初めて飛行機に乗ったのだ。スペースプレーンが重力圏に入った頃は寝てしまっていたから正真正銘、重力圏内での飛行はその時が初めてだ。

乗ったのは小型のプロペラ高翼機。けたたましいエンジン音に混じりプロペラが風を切る音。力強く滑走路を走り出した機体が少しずつ重力の束縛を解いていく。―そして、風と同化する。翼は風となり、空を舞った。

フィコはその時、飛行機という乗り物に惚れたのだ。地球の重力に引かれながらも自由に空を飛ぶその乗り物に。

スペースコロニーでは飛行機は飛ばない。何故なら遠心力によって擬似重力を生み出すスペースコロニーでは円筒の中心部は無重力であり、飛行機は上昇するとすぐに無重力空間に捕まることになる。そしてさらに上昇をかけると今度は、真っ逆さまに落下を始めるのだ。そんな空間では飛行機は飛ばせない。

しかし、この広く自由な地球では蝶や鳥のように自由に空を羽ばたけるのだ。彼の憧れはその時点で始まった。

彼は民間の運送業に就職した。スペースプレーンによって地球と宇宙を往来する仕事が、最も彼の憧れた航空機に近い職だったからである。

宇宙世紀〇〇七七年、彼はジオン公国軍に転職することになる。ジオン軍に買われたのは彼の持つ高い航空機の操縦技術と、大気圏内飛行の経験である。彼はシュミレーターで高い能力を示し、第一世代のジオン軍大気圏内航空機パイロットとなった。

遂に彼の念願であった、大気圏内航空機のパイロットになったのである。
そして彼は重力戦線で地球侵攻部隊の航空機パイロットとして戦い抜いてきた。墜とした連邦軍機は五機で、ハルツハイムには及ばないものの優秀なパイロットまで上がっている。まだ若い彼が中尉にという地位を得ていることは、実力主義のジオン軍では彼の能力を如実に語っているのだ。
「おや、ここにいらっしゃったのですか」
缶コーヒーの中身があと少しというあたりで、二人は声をかけられた。落ち着きがあるがまだ若いことを連想させる女性の声だ。
「第三爆撃中隊、中隊長のレギーナ・ケストナー大尉です」
二人は勢いよく椅子から起立し敬礼の姿勢をとる。二人は中尉であり、ケストナーよりも位は下だからだ。
「名前は聞いていますので、自己紹介は不要です」
「……なぜ敬語を使うのです？」
ベルタが聞いた。ケストナーは厳しいような優しいような表情を変えずに答える。ノーマルスーツのジッパーを胸元まで開けただけの格好で、まだヘルメットを片手に持っているあたりから推察するに着任してすぐに二人の元へ来たらしい。
「私の大尉は中隊指揮を執るための階級です。それに、我々は敵戦闘機に対して無力。貴官ら護衛機がいなければ戦場にたどり着くことすらままならないのですから、自分達の守護神には相応の敬意は払うべきでしょう」
なるほど、彼女以外に中隊指揮の適任者がいなかった為に彼女に大尉の位が回ってきたということらひい。随分なラッキー昇進である。もっとも、彼女がよほど謙虚なわけでなければ、それだけ人材に困窮しているということを暗に示す事にもなるのだが。
「守護神……ですか。我々には上手に敵基地を燃やす事などできません。適材適所です」
ベルタがケストナーにそう返すと、彼女は困ったように小さく笑った。

「では、明日の作戦を楽しみにしています」
ケストナーは再び表情筋に力を込め、敬礼をとって踵を返した。
緑色のノーマルスーツを敬礼で見送りながら、二人は会話を再開した。

第十章

第十章

連邦軍の男性兵士、マニアニ伍長が腕時計を見ると、時刻は十九時にさしかかろうとしている頃だった。そろそろ交代だな、と思い見張り台の梯子の下を覗き込む。だが、交代の兵士はまだ来ていないようだ。

「最後の定時連絡だ」

マニアニ伍長の同僚の男が無線機のスイッチを入れる。個人携行用の小型のものだ。

「あー、こちらは北方の見張り台。十九時現在異常なし」

『……』

だが、彼に返答が来た様子はない。彼はもう一度同じことを受話器に向かって話したが、結果は同じだった。強いノイズ音にすべてが掻き消されてしまう。

「ミノフスキー粒子か？」

心配になったマニアニ伍長が男に尋ねる。男は肩を竦めてわからん、と答えた。当然だ。彼には何もわからない。何が始まったのか、知る由もないのだった。

だが、戦闘濃度のミノフスキー粒子を感知した基地本部は第二戦闘配備を発令した。サイレンが鳴り響き、兵士達が持ち場に移動する。基地は一気に騒がしさを発し始める。戦車がエンジンを唸らせて戦車壕に潜っていくのが見えた。

「あと少しで交代だったのによ」

悪態をつきながら二人も北方のジャングルに双眼鏡を向け、敵に備えた。ミノフスキー粒子の干渉下、最も効率の良い索敵が可能なのが彼らだったからだ。下の兵士達も自分達の報告に汗を流しながら耳を立てている。基地は高い緊張に包まれていた。

地平線が見えるより先に景色が見えなくなる。ジャングルの木々に阻まれるからだ。だが、そこからやや離れたところは開けた土地になっており、見通しはいい。発見が容易なのはこちらだろう。

「おい、マニアニ！　あれを見ろ！」
　言われて指示された方向に双眼鏡を向ける。砂埃が巻き上がり、いくつかの影が蠢いているのが確認できた。間違えようがない、敵の部隊である。
「敵襲！　二時の方向！」
　ホイッスルを目一杯吹いて警告する。兵士達はそれぞれ砲撃に備えタコツボに入り、戦車は砲塔を敵のいる方向に向けた。
「閃光！　砲撃に注意！」
　と叫ぶ自分らが一番危険なのだが、と心の中で付け足す。すぐに弾頭が風を切る音に続いて着弾音が連なる。耐え難い爆風のために、二人は塔の上で屈み込んだ。
　しばらくすると砲撃がやみ、すぐさま二人は敵の状況を確認する。
「ああ、くそ！」
　ザクだ。車輌に先行して一機のザクが確認できる。走りながらその巨大な得物を構えている。
「一つ目がいる！」
　そうマニアニが叫んだ瞬間、兵士達は深刻な恐慌に陥った。十八メートルの鋼鉄の巨人。戦車の主砲並みのライフルを連射し、６１式戦車の主砲を弾く巨体。何度連邦軍があの巨大な足で踏みにじられたかを思えば、無理はないだろう。
「隊長！　無理です！　俺たちにあいつは倒せない！」
　パニックに陥った歩兵の一人が中隊長の男にそう具申し、殴られている。中隊長の彼とて怖くないはずがない。だが、ミノフスキー粒子の下、本部からの命令が更新されないのだ。与えられた命令に従いここで敵を待つしかない。
　戦車壕の６１式戦車が主砲を放った。強烈なマズルフラッシュと発砲音を轟かせ、計四発のザクを狙ったＡＰＦＳＤＳが空を切り突き進む。が、それらはザクの比較的厚い胸部装甲に弾かれ、あらぬ方向へと飛んで行った。
　今度はザクがライフルを連射する。戦車を狙う１２０ｍｍザク・

マシンガンからはＡＰＦＳＤＳが発射され、初弾は地面を穿つ。が、問題はない。それに続いた弾は少しずつ誤差を修正していき、ついに戦車壕に収まる６１式戦車の上部装甲を貫いた。

ザク・マシンガンは宇宙空間で連邦軍宇宙艦の軽装甲の箇所を狙い、内部で炸裂する低初速の徹甲榴弾を発射する兵装だった。が、そんな大型のグレネードランチャーは地上戦で大きな問題を呈した。低初速と弾種の都合から６１式戦車五型に効果が薄いことが判明したのだ。開戦直後の６１式戦車は対ゲリラ戦を主任務とする、比較的装甲の薄いものだった為にザク・マシンガンはなんとか、それなりの戦果をあげていたものの連邦軍が遠い昔の主力戦車の記憶とデータを蘇らせるとあっという間に戦果が減少してしまった。焦った公国軍はザク・マシンガンに改修を加え初速と弾種を変更し、これに対応させたのだ。

このザクが使うのは正真正銘のザク・マシンガンでありＡＰＦＳＤＳを発射できるよう改修され初速も砲身長も改善されている。対して６１式戦車は旧式ねあり、改修されたザク・マシンガンには全く耐えることができなかった。

爆発する６１式戦車の光景を前にして兵士達はますます恐怖していく。歩兵が対戦車誘導弾を用意しているが、あれでＭＳを撃破できる可能性は……。

マニアニ伍長は考えるのをやめて前方に双眼鏡を向ける。ザクに続く敵戦車についての情報を報告する為である。

ザクがライフルでマニアニ伍長達がいるのと対になっている見張り台を撃ち抜いた。二人は恐怖したが、戦場の興奮がそれを押さえつける。震える手で双眼鏡を構え、汗を拭う事も忘れて敵の数を数えた。

「敵戦車は四！　ヘリが二！　あとは歩兵戦闘車諸々だ！」

一般の歩兵が相手にするのは主に歩兵だ。彼らは塹壕に入ったまま機関銃とミサイルランチャーを構えている。その彼らに、敵の規模を教えてやった。だが彼らの人数ではとても敵わない規模である。

その時、ザクの放ったＡＰＦＳＤＳが残った一両の６１式戦車を

屠った。ザクは付近の敵をあらかた片付け、今度はこちらに向かってきている。同時に遅れてきた戦車なども到着している。
「俺たちの仕事も終わりだ。下に降りよう」
そう同僚の男が言う。その後方で、ザクの不気味な一つ目が光った。
ザクは弾倉内を回転させ、使用弾種を榴弾に切り替える。そして、ゆっくり構え、狙った。
ザク・マシンガンの発砲した榴弾が見張り台の下で炸裂すると、見張り台はひしゃげてゆっくり倒れた。その下に集まっていた兵士の多くも見張り台に潰され多くが死に至った。
遅れ到着した戦車が残った連邦兵たちを制圧していく。塹壕に榴弾を撃ち込み、抵抗する敵兵は遮蔽物ごと戦車砲で吹き飛ばす。基地の施設内は歩兵部隊が制圧にかかった。
基地内の士官が殺害されるか降伏し、地球連邦陸軍の旗が下げられるまでに、そう時間はかからなかった。
こうして連邦軍陣地の右翼、左翼を制圧し突破した地上部隊が、中央部に侵攻した本隊とタイミングを合わせて最深部まで侵攻するのがこの作戦だ。
ハルツハイム少佐のドップ改造機《ドップ・イェーガー》はジオン軍制空部隊のやや後方で飛行していた。
攻撃隊より先に戦場に突入し制空権を確保する。その上で爆撃機が地上部隊を支援しつつ侵攻する。スピードが肝のこの作戦では、制空部隊が最大の鍵を握っていた。
八機のドップと《ドップ・イェーガー》によって構成される制空部隊は、もうとっくにミノフスキー粒子の海にダイブしている。通信、レーダー、果てには赤外線探知まで不可能とするミノフスキー粒子の海。眼下の地上には連邦軍陣地が広がっており先から対空砲が火を吹いている。が、それも対地ミサイル搭載のドップによって鎮められた。
「時は満ちた。さあ、始めようか……。決闘だ」
ハルツハイムは一人呟き、これから起こる死闘を思い描いてにや

りと口を歪めた。

第十一章

第十一章

「基地レーダーサイトが戦闘濃度のミノフスキー粒子を確認。五つすべての警戒陣地を包み込む広範囲なもので、直前の報告では巡航ミサイルを迎撃するとの通信が残っている。以上のことから参謀本部はこれを敵の前進と判断。我々は当基地正面の空域で敵を待ち受ける」

メルヴィンが滑走路の上、セイバー・フィッシュのコックピットの中で作戦の概要を説明する。スクランブル発進だが、フル装備の状態だ。空対空レーザー誘導ミサイルを八基下げている。

ミノフスキー粒子干渉空域はここから約百キロ先の空域なのでまだ通信が利く。だから彼らが出撃するにあたっては管制塔からの指示を受けられたし、先に多くのデータを取得する事も効率的にできた。

「では……お気をつけて。基地の防衛は地上部隊が担いますので」

リアの声だった。感情を押し殺してはいるが、その声は微妙に震えた声であった。規模の不明な敵部隊にまたしても送り込まなければならない彼女の感情はわかっていたが、メルヴィンはあえて何も言わない。

生還で、答えるだけだ。

セイバーフィッシュ四機、フライアロー四機の計八機による迎撃隊はメルヴィン大尉を隊長として出撃した。

「クローバー・ワンより各機。命令だ、死ぬな」

大尉は落ち着いた声で暗号回線を通して味方機に伝える。

『了解です、隊長。絶対生き残って帰るんだ』

グリフィス・フォーはコックピットの中でグローブを握りしめた。既に手汗でびっしょりとしているのを感じながら、気持ちを高めつつも冷静さにしがみつく。そうだ……この戦いが終わったら、彼女に、リア・オルグレンに気持ちを伝えよう。彼は生に執着するに値す

る理由を見つけた。
『了解だ隊長。残らず墜とす』
『こちらクローバー・トゥー。さて、そろそろジオンの連中にはお帰り願おうか』
クローバー隊各機、それに加えてアロー隊の各機もメルヴィンの命令に返答する。各機とも士気は旺盛だ。
『ミノフスキー干渉空域まであと五分』
全員がその言葉に合わせて気持ちを入れ替える。これから戦闘で勝ち残るか逃げ出すまで戦友との会話は不可能となる。そして、いつどこから敵が現れてもおかしく無い状況に突入するのだ。
三、二、一……。
開きっぱなしの無線からはやかましいノイズがひたすらに発生している。無線のスイッチをオフにして、航法装置とＦＣＳをミノフスキー粒子下モードに切り替えた。ＦＦ３Ｃセイバーフィッシュ型には最新の改修が加えられているため、それが可能であった。
ＦＦ３ＣのＦＣＳが敵を発見する。まっすぐにこちらに向かっている機影が晴れた空の中あったのだ。動体を検知することでやっと見つけられるという距離のドップだ。すぐにミサイル誘導用のレーザーが発振され、ドップに浴びせられる。ＨＭＤの映像では、ドップはレーザーを検知して回避行動をとったらしい。直後にこちらもレーザーを検知する。
「クローバー・ワン、ブレイク！」
メルヴィンは操縦桿を大きく倒した。呼応したセイバーフィッシュは急旋回によって高度を下げる。他の機もそれに倣った。すると、さっきまで彼らのいた空域を申し訳程度の誘導を持ったミサイル群が通り過ぎて行った。
メルヴィンは急加速をかける。それに合わせてノーマルスーツが与圧を開始し、血液の偏りによって意識を失うような事態を予防した。予想されるドップ編隊の進路の下を潜り抜け、背後を取る為に加速し、急上昇する。案の定、前方には一機ののろまがいた。
加速し、ロックオン。レーザーでやっと気付き回避を始めたよう

だったが遅い。既に噛みついているのだ。
噛みついたメルヴィンは絶対に離さない。急旋回、上昇、下降、ターン。そのいずれにも誤魔化されることなく追尾し続け、最良のタイミングでミサイルを発射する。翼下のハードポイントから二発の短距離レーザー誘導ミサイルが放たれ、ドップを追尾した。
「くそ！　くそくそくそ！」
ドップのパイロットはできる限りの努力をした。チャフを撒きフレアを放出し急旋回……最高の努力ができたと言えるだろう。できることはすべて成した。
そして彼は死んだ。
翼を焼かれ墜ちていく元敵機の横を素早く通り過ぎ、新たな獲物を探す。
友軍機を追いかけるドップに、ミサイルを二発放つ。ドップは追跡を諦めてミサイルの回避に対応した。だが、メルヴィンの本命はミサイルではない。
機銃を一瞬、吹き付けすぐに針路を変える。ミサイル相手に必死になっていたパイロットの横腹を２５ｍｍ機関砲弾がぐちゃぐちゃに破壊し、満足すると抜けていった。
上昇。そして捕捉。上昇し続けるドップに簡単に追いついたセイバーフィッシュの機関砲が火を吹く。無数の機関砲弾が殺到し、ドップのエンジンを破壊し尽くす。空中で爆発しながらドップは墜ちていった。
ちらりと周りを見やる。黒煙が他に四つ。さらに二機撃墜されていることになる。敵が友軍から不明だ。制空戦で半分を削れば、充分に目標が達成できているだろう。
―警告！
画面にそのコマンドが現れ、警告音がけたたましく鳴る。メルヴィンは急旋回によってその警告音の主を交わした。一発のミサイルだ。
彼が睨んだ後方視界用のモニターに映っていたのは―
「―奴だ」

黒いドップを確認するなりすぐさま回避行動をとる。素早く、効果的に、丁寧にだ。そうでなければこの世にはいられない。

ハルツハイムは《ドップ・イェーガー》コックピットの二本のレバーを操作し、機体を傾ける。タッチパネル、コンソール、フッドペダルそれぞれを素早く使いこなし、機体を我が身のように扱う。彼が狙うのはあの機体。照準の周りを高速で右往左往する真っ白のシルエット、《ラッキー・クローバー》である。

高濃度のミノフスキー粒子の空を、二機の犬が駆け巡った。さながら黒い猟犬と、白い猛犬。黒い猟犬は、白い猛犬の背後を追っている。まるで一匹の犬の頭と尻尾のように離れることなく。

メルヴィンは背中にぴったり張り付き続ける黒い機体から逃れようと高速でジェットエンジンを吹かせる。しかし、その努力に反してコックピットに警告音が鳴り響いた。レーザー誘導の被捕捉音だ。相手が自機を捕捉し、ミサイルを放とうとしている事を示す音である。

自己主張の激しいアラートをうるさく感じながらメルヴィンは操縦桿を、引くのと同時に横へ倒した。

―バレルロールと呼ばれる。床に倒された樽の外壁をなぞるように螺旋を描く機動である―

その機動によってレーザー照準がずれ、追いつかなかったミサイルは見当違いな虚空へ向かっていった。

ミサイルを回避したことに安心する様子は一切見せず、メルヴィンは急激な旋回を左右にランダムに繰り返し、敵機を振り切ろうとした。勿論黒い敵機もそれにしがみつき、ローリング・シザーズの軌跡を空に描きながら自機が敵機の前に出てしまうことがないように注意する。

再び警告音。殺到する二本のミサイルを急旋回で再度回避する。たまたま前方を飛んでいた緑色のドップに、お前に興味はないと言わんばかりに投げやりなミサイルを放つ。だがそれでもそのミサイルは機体に負けじとスピードを出し、セイバーフィッシュが横切るのとほぼ同時にドップの機体に着弾した。

『くそ！　なんだあの二機は！』
ドップのパイロットが、化け物じみた戦闘を演じる二機を見て叫ぶ。彼が汗を吹き出しながらセイバーフィッシュと死闘を繰り広げるさなか、そんな戦いが赤子の遊戯に見えるほど格の違う戦いを目の前で展開している二機がいるのだ。とても、同じ世界の住人とは思えない。
『あれが人間だってのか!?』
再び叫んだパイロットは、背後に敵機が回ったことに気が付けなかった。警告音が鳴るのとほぼ同時に、機体と彼の体は蜂の巣となった。スクラップと化しまっすぐ地面に向かう彼と彼の機体の残骸の隣を、グレーのセイバーフィッシュ、《クローバー・フォー》が通り過ぎる。
クローバー・フォーと呼ばれる青年、空軍少尉のエドワード・ライナーは違和感を感じていた。練度においてこちらに分があるとはいえ、数において勝るジオン軍が何故同じ空域でいつまでも戦うのか。数に任せて押し出し、戦闘空域を連邦の空軍基地まで近づければあとは力技で攻略する事も目指せるというのに。得体の知れない違和感。別の言葉を選べば嫌な予感。
「うあっ!?」
―迂闊だった。戦場で自分の命、敵を殺す事、それ以外の別のことを考える事は即ち死神に抱かれていることを意味する。彼は迂闊だったのだ。他より動きの悪かった彼の機体に目をつけたドップの機関砲によって、セイバーの機体にダメージを受けてしまう。反射的に機体をひねった事が幸いし即撃墜に繋がるような深傷にはならなかったが、戦闘能力が大きく削がれる結果となった。このまま戦闘空域に止まれば、ジオンの兵士は彼を見逃さないだろう。
「……こ、後退します！」
自分を襲ったドップに《クローバー・トゥー》が噛み付くのを見て、エドワードは地面すれすれまで高度を下げ、基地を目指して飛行を続けた。
メルヴィンの背後にはまだ、あの不気味な黒いシルエットが見え

る。再びミサイルだ。メルヴィンがまた回避するタイミングで、機関砲の射撃がある。メルヴィンは神がかったテクニックによって紙一重でそれら両方をかわし、なんとか生きている。

彼はスプリットS—百八十度の回転により背面飛行になり、そこから逆宙返りでUターンする機動—の直後、今度はスプリットSの真逆であるインメルマンターンを繰り出す。

二つの機動を組み合わせることで、メルヴィンはハルツハイムとの距離を取ることに成功した。異常なまでにコンパクトに二つの機動を詰め込んだ彼の鞭に、セイバーフィッシュの機体は唸り声を上げる。

自分を追って、比較的大回りに旋回した黒いドップとは正面から向き合う形になる。これこそがメルヴィンの狙ったタイミングだ。背中を取り合っていたのでは埒があかない。ならば思い切って、正面から殴り合おう。その時は運と、互いの腕ですべてが決まる。

メルヴィンの生死が。

ハルツハイムの生死が。

両者の距離はたったの数百。既にミサイルを使うには近すぎるほどの距離だ。

ハルツハイムは笑わずにはいられなかった。ここまで面白いパイロットは初めてだ。正面からやり合おうというのだ！

「ふはははは！」

機首をまっすぐ急接近する敵機に向け、機銃の引き金に指をかける。

殺すのは惜しいパイロットだ。—だが、殺す。優秀なパイロットだからこそ、自分の前に立ちはだかる以上は地表に叩きつけなければならないのだ。

「勝つのは俺だ！」

メルヴィンの眼前に黒いドップが映る。彼があの怨恨と怨念の元凶を墜とすことで、すべての連鎖が終わる。死の悲しみ、恨み、戦いの痛みを自分が今日、ここで断ち切るのだ。若いパイロットにこの役割は担わせられない。自分こそが、この宿命を背負い、立ち、そし

てあの黒い宿敵を殺さねばならないのだから。そして—
「—必ず、生きて帰る」
—あっという間に航空機関砲の射程。メルヴィンは引き金を引いた。
—静寂。エンジンの唸る音も、機関砲の咆哮も、すべての音は遮断され、メルヴィンの脳には黒いドップのみが残った。
—通過。直後、メルヴィンは激しい揺れと痛みに襲われた。それでも、警告音やダメージレポートは総じて無視し、後方モニターだけを睨みつける。その中には、まるで体内の内臓を噴き出すように自身のカラーと同じ黒煙を上げる黒い機体が収まっている。
「……まだ飛べる……」
メルヴィンは朦朧とする意識のなかそれを確認して、自機のダメージを見やった。そう、愛機たる白い剣は、まだ鋭い刃を残している。
黒煙を引きずり、オイルを漏らしながらもまだ、空を飛ぶことを許されている。
「まだだ……まだ、終わらん!」
《ドップ・イェーガー》殺意に満ちた猟犬と、狩人も同じくある。その人間離れした執念、たとえ四肢をもがれようとも潰えることのない闘志によって、狂人ハルツハイムはメルヴィンより先に機体をターンさせた。前方には完全に因縁の白い機体が収まっている。
—「見ろよ、取り憑かれてやがる」
「俺もそうだ」
懐かしい、グラハムの声だ。淡々と語りかけるグラハムに、メルヴィンもまた淡々と答える。いつもと何も変わらない、なんのおかしさもない日常の中に掻き消える会話だ。
—「それもこれも、すべて終わらせよう」
「ああ」
メルヴィンははっきりしない意識のなかで、グラハムの気配を感じる。
メルヴィンは不思議とひどく落ち着いた気分で、優しく操縦桿を

握った。フットペダルの操作と組み合わせ、微妙な角度の調整を図る。
そして、セイバーフィッシュの機体は、ハルツハイムの睨む照準の真ん中へ入った。
「終わりだ！」
「終わりだ！」
二人の戦士が、戦場で叫んだ。メルヴィンはそれに付け足して呟く。
「全ミサイル、パージ」
セイバーフィッシュが残していた三本の矢のうち、二本が空へ投げ出される。メルヴィンの愛機がいた空間は、持ち主に置いていかれたミサイルによって塞がれた。
メルヴィンを確実に殺すべく殺意を込められて放たれた数多の機関砲弾は、残らずミサイルに吸い込まれていった。
３０ｍｍ機関砲弾が無数に突き刺さったミサイルの炸薬が反応し、炸裂する。本来は後ろから標的に致命傷を与えるはずのミサイルがハルツハイムの眼前で爆発した。破片がキャノピーや翼に無数の穴を開け、すぐに黒いドップは轟々とした爆炎に包まれる。
そして、最後の一発であるミサイルも突き刺さり、猟犬《ドップ・イェーガー》は死に絶えた。
「見たかよ……一つ、墜としてやった……」
メルヴィンは死んだ相棒に向けて呟く。
ミサイルの爆発は、すぐ前にいたセイバーフィッシュにも襲いかかった炸裂後すぐにスラスターが異常を示し、操縦が不能に。
地面に向かって斜めに墜ちていくセイバーフィッシュは、その途中で爆発、四散した。

第十二章

第十二章

前線基地から撤退してきた兵力を取り敢えずまとめ上げ、野戦本部と化したサネプト航空基地の戦闘指揮所は、士官たちでごった返していた。

「敵の航空戦力は!?」

「分かりません！　迎撃機も帰ってきません！」

「全滅したのか？」

「……にしては、敵の侵攻が遅すぎる。善戦していると考えたいものですな」

管制塔の地下にある戦闘指揮所は本来、航空作戦の支援のみを考えて設置されたシステムだ。そこに戦車隊などの指揮に使う一式の設備を持ち込み、陸軍と空軍の士官が入り乱れている。指揮系統も混乱があり、空軍の現場指揮官である基地司令の少佐と戦車中隊の指揮を執る陸軍少佐、歩兵中隊の指揮官の大尉が互いの上官と連絡の取れないままそれぞれの都合で吠えあっているのだ。

「迎撃部隊から一機、帰投しました！　第三小隊の四番機です！」

「彼から直接報告を聞きたい。ここに寄越してくれ」

本格的攻撃の予兆である高濃度のミノフスキー粒子とそれによる干渉空域は依然広がり続けているが、まだサネプト基地はぎりぎりその外だ。しかし少佐の要望によってクローバー・フォー、エドワード・ライナー少尉は直に戦闘指揮所まで呼び出された。

「第三小隊四番機ライナー少尉。出頭しました」

フライトスーツのまま敬礼する彼に、少佐は返礼も省略し、単刀直入に問うた。

「スクランブル隊は？　敵の規模は？」

「はっ。私が最後に見た状況では……我が方に私以外の損失は第二小隊が数機被撃墜、敵の規模は一個中隊程でしたが恐らく半減。我が方が優勢でありました」

戦闘指揮所の誰もが彼の報告に耳を傾けていたが、彼の報告を聞

くとみなが安堵した。全員の感想を陸軍少佐が代弁する。
「圧倒的じゃないか！」
「爆撃機は？」
「見ておりません」
　中には防衛成功、と安易に見積もる者もいる中、空軍少佐は一人、深刻な感想を持っていた。
「本隊はその後方か……。迎撃に向かった彼らに増援を出せないのは厳しい」
「早く戦線に戻らせて下さい！　彼らは今も戦っているんです！」
　汗を流し抗議するエドワード。当然だ。だが、少佐の返答を聞く前に、リア・オルグレンの声が戦闘指揮所に響いた。
「レーダーに感！　敵航空機、数は六！　機影よりドップが四、ドダイ爆撃機が二と断定！　敵編隊反転、ミサイル発射と思われる！」
　基地にアラートが鳴り響く。と同時に、エドワードは駆け出していた。
「待って」
　急ぐ彼を、彼にとっては間違えようのない声が引き止める。
「絶対に、死なないでよ……」
　険しい表情でリア・オルグレンが彼に言う。彼はぎこちない笑みと、サムアップで答えた。
『対空戦闘！』
　けたたましく鳴るアラート音に緩めていた気が一気に引き締まる。野戦レーダーが感知したのはいくつかのミサイルで、どうやら対地ミサイルらしい。
「目標、対地ミサイル！　数は八！」
「迎撃用意！」
　言われて空軍基地の前方に配置された対空陣地所属のパーシーという若い連邦兵士は対空砲を操作する。ジョイスティックを倒すとその方向に砲塔が旋回し、大まかな位置を定める。画面はレーダーと照準で、彼はそれを見て狙いを定めるのだ。
　目標のミサイルは残り数秒で射程に入る。三、二――」

「―迎撃開始！」
もはや目で狙うような照準ではない。ひたすらにレーダーと演算装置を信じて引き金を引き続けるのだ。距離が近づいてくると、砲身が少しだけ稼働する。細かい修正が加えられるのだ。
あまりの速さに繋がって聴こえる発砲音が耳当ての上でくぐもっている。照準の電子音は小さくテンポを刻むだけだ。
すると、目標のうち一つが消失した。自分の機関砲がやったのか、それとも友軍のミサイルがやったのかわからないがとにかく、一つのミサイルを迎撃したのだ。パーシーは次の目標に向けて射撃を開始する。
いくつかの目標が次々と消える映像は、一瞬にしてノイズにかき消された。パーシーは驚愕する。
『……だ！　……が……』
高濃度のミノフスキー粒子と見られる反応だ。この戦場では何度も経験しているが、それらを超える濃度だった。レーダーは使用不能、通信機器も一切が示し合わせたようにサボタージュである。
「み、ミノフスキー粒子下戦闘に移行！　照準は……光学に切り替え！」
自走対空砲に追加で備え付けられた光学式のセンサーが作動する。モニター越しに見える夕方の空、当然ミサイルが目視できるはずもなく、パーシーは引き金に手をかけたまま動きを止めてしまった。
ミノフスキー粒子の込められたミサイルが炸裂しレーダー、電波通信の一切が用をなさなくなると、先まで騒がしくしていた対空砲とミサイルランチャーが鳴りを潜めた。それに呼応して、六機のジオン航空機は一気に切りかかる。
走って愛機に向かうエドワード少尉。開けっ放しのドアから飛び出ると、滑走路の上には整備士たちが集まっていた。その中心にいるのは愛機セイバー・フィッシュと技術士官アツシ・ユンだった。
「なにをなさっているんですか!?」
「時間がない！　君を見込んでの行動だ！」
セイバーフィッシュの主翼に、巨大なブースターが設置されてい

る。更にそのブースターにミサイルが積み込まれつつある。その機体を背景に、アツシ・ユンは説明を始めた。
「手短に。これがこの機体を作った奴の想像した本当の姿だ。ブースター・ユニットはミサイルランチャーを内蔵。推力を三倍に向上させつつもミサイル搭載数を十二まであげている。あと少しで作業は完了する。初飛行がこんなことになってしまって申し訳ない。だが、やってくれるね？」
「……はい！　勿論です！」
「ありがとう。この基地を守ってくれ。―急いでくれ！　敵は既に来ている！」
　エンジンの轟音が彼の怒号すらかき消す。すぐそばの空には既に六機のジオン航空機がいて、防空隊と戦闘を繰り広げている。
『わ、我々も防衛に当たる！　この基地は守らなきゃらならないんでしょう！』
　スピーカーを通し叫ぶのは、子供のように若い女性の声。その主、タチアナ中尉だ。
「なにやってるんです!?」
『ミデア《フラミンゴ》、離陸許可は出ていない。繰り返す！　戻って来てください、タチアナ中尉！』
　格納庫の扉を開け放ち、ＶＴＯＬによって飛び立とうとしているのは目立つ黄色い機体色の輸送機ミデアだ。
『ミデアとて、少しぐらいは役に立つわ！　対空砲起動！』
『あいよ！』
　ミデアは戦闘指揮所の許可がないまま離陸し、備え付けられた二機の対空機関砲を作動させている。しかし、対空機関砲があるとはいえ所詮は輸送機。とても戦闘機の相手になる代物ではない。
『無茶です！　戻って来てください、タチアナ中尉！』
　ミデアは制止を無視し戦闘空域に入る。地面の対空砲ＶＡＤＳや対空ミサイルと共に対空戦闘を開始した。
「基地を守ってあげるのよ。あんな緑のアヒル、さっさと落として！」

タチアナ中尉が《フラミンゴ》のコックピットで汗を滲ませながら勇敢に指示を飛ばす。対空砲が増えた事で、確かに敵戦闘機の足止めには貢献しているようだ。

まだミノフスキー粒子は到達していなく、近距離ならばレーダーが使用可能だ。

ミデアの対空機関砲が照準を固定させ、火を噴く。曳光弾の混ざった砲弾が空を切り裂いている。

「―あっ！」

機体を激しく揺らす。ミデアの一つのエンジンにドップの放った機関砲弾が数多と吸い込まれる。エンジンは炎を吹き出し、ミデアの機体は黒煙を引き摺った。

戦闘の光に目もくれず、整備士たちが一心不乱に準備を進めた結果、ついにセイバーフィッシュは飛行準備を整えた。

グレーの機体に同じくグレーのブースター・ユニットが装着されている。元々大型だったエンジンナセルは更に肥大化し、鶴のようだったフォルムは梟のようにずんぐりとした体を手にした。八基の増加スラスターノズルは推進剤が満載され、空に飛び出る時を待ち望んでいる。

「ありがとうございます！」

ヘルメットを被ったエドワードは脚立を駆け上り、コックピットシートに収まる。キャノピーを閉鎖し各種計器をチェックした。

『機体の各種パラメータもブースター・ユニットに対応している。期待している、やってくれ！』

アツシ・ユンは彼らしい軽快な敬礼をして、機体から離れていく。

滑走路上のものは全てがどかされ、空へエドワードを送り出す準備を整えた。管制の指示がすぐさま入る。リア・オルグレンの声だ。

『こちら管制。四番機、出撃準備完了。離陸どうぞ』

「……エドワード・ライナー少尉、セイバーフィッシュ。テイクオフ！」

『気を付けて、エド！』

自分を呼んだリアの声を脳内で再生しながらエンジンを加速す

る。甲高い音がいつもより大きく鳴り響いた。
—リアと、基地のみんなを守る—
「うっ！……」
胸中で何度も繰り返し、自分を鼓舞した直後、強烈なGが彼の体を締め付けた。
すぐさまセイバーフィッシュは離陸する。翼が風に同化し、空に舞ったセイバーフィッシュは最大出力で戦闘空域に飛び込んだ。ミデアの隣を突き抜け、ドップたちを引きつける。
一目散に護衛のドップが集まっていった。コックピットに警告音が鳴り、敵にロックされた事を彼に知らせる。
後方確認モニターにもキャノピーの向こう側にも戦闘機だ。ミノフスキー粒子の濃度は既に戦闘濃度に届き、レーダーと無線は汚いノイズを垂れ流しにしている。
彼は出力を目一杯上げ、彼の機体もそれに答えた。まるで、新たな力を手に入れ喜ぶように。
ブースターがバーニアを吹かし、凄まじい速度でセイバーフィッシュがドップを突き放す。
ドップのパイロットは驚愕した。信じられない加速だった。次元が違う、としか表現できないような。まるで宇宙戦闘機が行うような超高速戦闘—
—宇宙戦闘機。そう。このセイバーフィッシュは宇宙戦闘機なのだ。大気圏内外両用として開発されたセイバーフィッシュ。そのC型は空軍向け仕様でエンジンはジェットエンジンのみになっているが、こうして化学燃料ロケットを搭載した現在では、セイバーフィッシュの純粋な使い方、つまり大気圏内で使用可能な宇宙戦闘機としての力を遺憾なく発揮できるのだ。
エドワードはそのまま一旦距離を置くと、旋回する。今度は前方に敵機がいる形だ。照準にはしっかりと敵影が捉えられている。そして再び—
—加速する。
いつもより数段速い速度で過ぎていく景色と接近する敵機。狭

くなる視界の中、彼はすぐさまドップをロックし間髪入れずにミサイルを放った。普段のようなミサイルを撃つ、という感覚よりミサイルを落とす、という感覚に近い。機体の速度が一時的にミサイルのそれを追い越したせいだ。ドップの隣を通り過ぎたセイバーフィッシュの後方で、ミサイルが着弾する。だが彼はそれには目もくれないで次の敵を探していた。

一刻も早くこの敵部隊を殲滅しなければならない。基地のみんなや、リアを守るために。

―機銃！

目に入った敵爆撃機に向けて航空機関砲を射撃する。護衛戦闘機に任せて爆弾を防空隊に落としていた爆撃機に機関砲を叩き込む。凄まじい速度によって威力を底上げされた機関砲弾はあっという間にドダイの爆弾倉に搭載された航空爆弾を爆発させる。ドダイは大爆発を起こし、スクラップとなった。

後退し始めた手負いのミデアを横目にエドワードは編隊をかき回し続けた。時間を稼ぎつつ、確実に彼らを仕留めていく為に。

「調子に乗るなよ、宇宙戦闘機！」

ベルタの駆るドップが突然現れ、瞬く間に二機を撃墜せしめたセイバーフィッシュに肉薄する。上方から接近した彼女は背中を取ろうと小回りを効かせて格闘に持ち込んだ。

だがいくらドップが背中をとりかけても、セイバーフィッシュが加速をかければあっという間に置いていかれてしまう。

「くそ！」

ベルタはノーマルスーツのヘルメットの中で苛立ちを募らせた。あまりにも機体の性能差がありすぎる上、奴はいいパイロットだ。ベルタは最大出力で加速し、セイバーフィッシュの背中に必死でしがみつく。そして何度か機関砲を射撃したが、どれも外れてしまっていた。

「こいつ、しつこいぞ！」

エドは加速をやめ、機首を起こしブレーキで急減速をした。彼の得意とするコブラ機動だ。機体は強烈な衝撃を伴って減速する。最

高速度で追いかけてきていたドップは誤って彼を追い越してしまう。
彼は機関砲の引き金を引く。感情を持たない鉛の機関砲弾はドップの翼を、胴体を、そして、ベルタの体を引きちぎった。
炎に包まれる敵機を意識から外し、次の敵を求める。彼は完全に、戦士の動きで空を舞っていた。
「くそ！」
射出座席を吐き出す事なく爆発したベルタのドップを見て、フィコは毒を吐いた。既に四機いたドップのうち二機が撃墜され、二機のうち一機のドダイが屠られた。対し敵の基地はほぼ無傷。その上完全に撤退のタイミングは失われた。彼ら別働隊は、奇襲によって敵基地の指揮能力を喪失させるどころか、返り討ちに遭おうとしていた。
「このまま無駄死になど……死んだ部下に示しがつかない！」
ケストナー大尉がドダイのエンジンの出力を上げる。ドップの護衛下を抜け、全速で基地に向かった。
彼女は唸る体とエンジンを無視し、目の前の攻撃目標だけに集中する。兵装はロケットランチャー。無誘導だが角度と風向き、距離次第ではしっかり当たる兵器だ。
だった一機の迎撃機の視界から逃げ、敵の対空機関砲を意識から外す。
「……喰らえ！」
彼女が引き金を引くと、ドダイＧＡの機体に埋め込まれたロケットランチャーが斉射される。十八発のロケット弾頭がランチャーから飛び出し、基地に向かい殺到する。それを見届けた直後、ケストナーの機体はＶＡＤＳの３５ｍｍ機関砲弾に貫かれた。黒煙と炎を吹き出し、ドダイＧＡの残骸は基地の格納庫に突入した。追って爆発が起こり、一層勢いを増して黒煙が吹き上げた。
ＶＡＤＳが目視で迎撃を開始する。だがそれがすべての弾頭を破壊できるわけもなく、数発が基地の建物に着弾した。
「ケストナー大尉！　……くそ！」
フィコが撃墜された味方機を睨んで叫ぶ。反転し、味方機を追うセイバーフィッシュに近付いた。

「お前さえ墜とせば、まだ！」
レーザー照準を固定し、ミサイルを発射。ミサイルランチャーから放たれたミサイルはブースターを点火しレーザーの光を追う。ミサイルの速度ならば、セイバーフィッシュに追い付く事が可能だ。
だが、空対空レーザー誘導は非常に難易度が高く、相手が回避行動を取れば簡単に照準が外れてしまう。現にセイバーフィッシュがフィコ機との距離を開きつつ回避すると、ミサイルは容易く目標を見失ってしまった。
フィコはキャノピーの外をめまぐるしく動き回る雲にふと目をやった。一瞬の事だ、幼い頃に飛行機に惚れた時の感情を思い出す。
急降下するセイバーフィッシュにミサイルの追跡者を送り込む。だが彼らは超低空まで下がったセイバーを追おうとするあまり勢い余って地表を爆撃してしまった。舞い上がる土をジェットエンジンと化学燃料ロケットの炎が吹き飛ばす。
戦闘指揮所では管制塔から入ってくる光学映像に誰もが注視していた。ドダイが突っ込んで来た際はパニックになりかけたが、今はそれも収まっている。
「撤退の準備が完了しました。敵の足止めは機甲部隊と砲兵部隊により行いましょう」
他とはやや違い、前線に赴く兵士が着用する茶色いカーキ色の地球連邦陸軍制服を身に纏った男が報告と提案をする。
「いや、敵の目的がここなら深追いはしないはずだ。速やかに撤退を済ませ、被害は最小限に抑えたい」
陸軍の兵士と士官が撤退についての協議を進める間、空軍の指揮を持つ少佐は静かにモニターを眺めていた。
「少佐、後退して来る味方航空隊を確認。機数は三機です。……！機影より、メルヴィン・ライアン大尉機は撃墜されたと思われます。帰還、ありません……」
オルグレンの声が震えた。彼女はほんの少し残った理性によって涙を収め、軍務を投げ出さずにいる。
許されるのならば積み重なった書類やＰＣに当たり散らし、泣き

叫びたい気分だった。命令とはいえ自分がメルヴィンを死地に送り込んだのだ。
「辛くも逃げ帰った、というところだな。敵が満を辞して前進してくるぞ、一兵たりとも死なせず逃げる。それが今、我々の考えるべき理想だ。……早く取り掛かりたまえ」
「はっ」
　クローバー・トゥーが後退して来ると、戦闘を繰り広げる二機の戦闘機が目に入った。二機とも腕が立つらしいが、セイバーフィッシュの方は間違いなくクローバー・フォーである上、ブースター・ユニットを装着している。
「あいつめ……戦い方が隊長に似てきたか？」
　クローバー・トゥーはエンジンを唸らせ、ドップに食いつく。逃げるドップはあらゆる機動を駆使し振りほどかんと必死だ。そして、ドップの回避機動が功を奏しトゥーが彼を離した瞬間に、彼の真下からエドワードが急接近する。四連装２５ｍｍ機関砲をドップに向けて連射。弾が切れるまで指を離さなかった。
　セイバーフィッシュがドップの後ろから超空へ舞い上がったり直後、ドップは爆発した。
「ますます上手くなりやがってよ！」
　クローバー・トゥー、クローバー・フォー、アロー・スリー、アロー・ワンの四機編隊が交代しながら滑走路に降り立ち、緊急で補給を受ける。
　「敵航空部隊、全滅を確認。付近に敵影ありません」
「今が唯一の機会だな。撤退命令発令。全軍は当基地を放棄する！工兵の破壊工作は？」
「現在四割ほどが終了しているとのことです」
「急がせろ。ミデアは使えるな？」
　ミデアは《フラミンゴ》が攻撃を受け飛行不能だった。その為使えないミサイルによる破壊が決定していた。残った《ペリカン》が撤退の中心となる輸送機だ。残りはトラックを使う。
「《ペリカン》が使えます。現在、士官と重要物資から優先的に積み込

んでいます。少佐殿もお早く」
「我々陸軍士官は陸路を使う。ご心配なく」
背筋を正して陸軍少佐と大尉が敬礼を見せる。綺麗な敬礼だ。彼らは踵を返し、軍靴を鳴らして出て行った。戦闘指揮所に残っているのは少佐と数人の士官のみだ。
「爆弾の設置をしますので、脱出を」
ぞろぞろと工兵達が入って来る。
「頼んだ。私のジャブロー転勤の夢の最期、派手に吹き飛ばしてくれ」
少佐は自嘲的な笑みを浮かべるとベレー帽を被りこみ、部下とともに部屋を後にした。
「隊長……メルヴィン隊長は……？」
撤退のため既に移動した士官達から外れ、一人力なく歩く女性士官がいた。
リア・オルグレン少尉である。
目に涙をため、疲れ切って地面に足を下ろした四機の戦闘機を見つめる。その中に、白いセイバーフィッシュはない。
「オルグレン……リア」
フライトスーツ姿のエドワードがリアを抱き締める。彼もまた、メルヴィンの未帰還に打ちひしがられた人間の一人だった。
「僕もさっき聞いたんだ。でも、隊長は脱出できたらしい。きっと……生きているよ」
「うっ……うう……」
子供のように声を上げることをよしとせず、噛み殺すように声を漏らすリア。彼女を、ひたすらエドワードは抱きしめ続けた。彼女の金髪を、優しく手で包み込む。そして、囁いた。告白だ。本当はこんな時にするつもりはなかった。けれど、気持ちを抑えることなど、彼にはできなかったのだ。
「……愛してる」

第十三章

第十三章

リア・オルグレンは四機の戦闘機に護衛されたミデア輸送機の格納庫の窓から遠方の基地を見つめていた。腕時計を見ると、あと数十秒であの基地は基地でなく廃墟となる。幾度となく眠れぬ夜を過ごした士官室も、座りすぎて尻の形に凹んでしまった椅子も、隠れて泣いた屋上もすべてが、無に帰すのだ。できればそれが、自分の知らぬ間の出来事であってほしくはない。

ミデアを護衛する内の一機、セイバーフィッシュのキャノピー越しに、エドワードは基地を見つめる。自分の帰るべき場所であり、守るべき場所。—守れなかった場所。そいつの死は、見届けられるべきだ。

撤退する歩兵部隊を乗せたトラックの車列は丘の上を走っていた。荷台の兵士達は体を乗り出して基地の方へ目を向ける。直接は見えないが、それでも誰もが基地自爆の瞬間を目に捉えようと思っていた。

ジオン軍ＭＳパイロット、ヨナス曹長は僚機と共に空軍基地の敷地内に突入した。予定時刻ほぼ丁度だ。上空には味方の航空部隊が見える。だが異変に対する彼の違和感はピークに達していた。敵の抵抗は一切なく、後退支援もないのだ。

「まずい！」

直後、基地のあらゆる施設から火が噴き出した。仕掛けられたプラスチック爆弾は予定通り放棄した弾薬類に誘爆し管制塔、既に半壊した基地施設、地下室、兵舎、格納庫、残った機材、積み込めなかった書類、格納庫を破壊していく。

的確に建物を崩すように計算された時限式の爆破は、最小限の爆薬によって基地を潰した。爆発によって吹き飛ばすような手洗い真似はしないのだ。主要な柱、支柱を折る事で弱い部分に力を加え、そして潰す。そのため派手な爆発の光にザクの彼らが怯むことはなく、彼らには目の前の地盤が崩れた様にさえ見えた。

ヨナス曹長より先行していたザクが基地の滑走路まで踏み込むと、突如地面が炸裂した。それに合わせ、基地の滑走路のいたるところが次々と火を吹いていく。滑走路の再利用も許さぬ、完璧な破壊工作と言えた。

「うっ……」

レギーナ・ケストナー大尉はドダイGAのコックピットで目を覚ました。痛みが全身から響く。キャノピーにはひびが入り、コンソールの電気は落ちている。唯一の幸運は自動消火装置のおかげで自分が気絶している間に火葬されたかったことだ。上を見上げると空が見える。だがそこは暗かった。建物の中から空を覗いているらしい。

右二の腕と左足、脇腹の痛みに耐えながらキャノピーを押し開け機体から這いずり出る。ノーマルスーツが出血部を圧迫し出血をコントロールしてくれているがそれでも頭痛は治らない。貧血だけではないのだろう。

息を切らせながら、彼女は腕時計を確認した。時刻は……午後九時丁度―

―爆発が格納庫を襲い、彼女はドダイの翼から吹き飛ばされた。激しい痛みと混乱の中で見上げた彼女が見たのは、崩れゆく天井の光景だった。

爆煙がゆらゆらと空へ伸びる。それをミデアの窓から見たリアは、目を瞑った。

我々がこれからどうなるのか。ジオンに勝てるのか。

そんな事よりも今は、戦いの疲れの方が彼女の頭を支配していた。そして彼女の瞳から、一滴の涙が零れた。

メルヴィン大尉はロスト。Ｍｉｓｓｉｎｇ ｉｎ ａｃｔｉｏｎ―ＭＩＡ、作戦行動中行方不明として撃墜後の動向が分からない。彼女はメルヴィンが生きている事に期待できたが、彼を置いて逃げなければならなかったのだ。彼を含む多くの兵士を、人間を戦場へ送り出し、そして死なせてきた。冷静な声を作り軍の管理するマシンとして心を押しつぶしてきたが今やそのマシンの在りどころは存在しない。彼女の抑えきれなくなった心が目から溢れていた。そんな彼女

の肩に、優しくタチアナが手を置いた。
ミデアのコックピットに座りコーヒーを啜る空軍少佐は、基地の爆破を目にする事はなかった。ただ静かに目を瞑り、現実と向き合うのみだ。多数の増援を受け取りながら反撃の狼煙をあげるどころかその戦力のほとんどを失い、あまつさえ基地を陥落させるという醜態を晒した彼は二度と軍の上層部へパイプを通す事は叶わないだろう。これからは上へ登る人生ではなく、下へ落ちて行く人生が始まるのだ。
「サネプトが……陥落した……」
トラックの荷台で兵士が呟く。周りの兵士も口々に似たようなことを言っている。黒煙は地球連邦軍敗北の狼煙だ。東南アジアにおける一大拠点を失った地球連邦軍はますます戦線を縮小し、ジオン公国は支配地域を伸ばすだろう。彼らにとってそれは、憂鬱の種でしかなかった。
地球連邦軍は今日、東南アジアにおける最大の空軍基地であるサネプト空軍基地を喪った。翌日地球連邦東南アジア方面軍総司令部はさらなる戦線の縮小を決定。
東南アジア方面軍がジオン軍と交戦を開始してから四ヶ月の事であった。

Ｅｐ３．　密林航路には似合わない　―ＭＳＭ―０４　ＡＣＧＵＹ―

第一章

第一章

―『母さん。僕は今、地球にいます。父さんが憧れた青は、大海原の青です。僕は歩兵だからそれまで見られなかったけれど、昨日ビーチに行くことができました。津波の被害がまだ残る砂浜に。父さんと母さんにも景色を見せてやりたかったな』

―ジオン公国軍地球方面軍第四地上機動師団隷下第５０２歩兵大隊　ウィリアム・Ｊ・アダムス上等兵

連邦軍下士官、リット曹長は泥色に濁った水面が盛り上がるのを見た。噴き上がるような勢いもなければ盛大な飛沫を上げる訳でもなく、ただゆっくりと水面がその一帯だけ、奇妙に隆起するのを見た。

彼ははじめ、水の勢いが増した為の現象だと思った。しかし、その盛り上がりはゆっくりと、川の流れとは逆方向に移動したのだ。彼は彼の首筋に鳥肌が立つのを感じた。彼の一度も見たことのない光景。自然にはあり得ない現象。

できればこの気味の悪い存在が、敵であって欲しくない。さながら怪異のようだとすら思った。

「軍曹、この川の深度は分かるか？」

『地図ですと、まあかなり適当なんですがね、深くて十メートルより深い程じゃないですかね。運河ですから』

ＩＦＶの車長用ハッチから身を乗り出したリットは、兵員室にいる軍曹に無線で訊くと、すぐさま砲塔へと戻った。車長にも操作権限がある機関砲塔を川へと向ける。

「おい、川になにか―」

車体の上部に設置されたモジュール砲塔に組み込まれたカメラが

捉えた映像には、赤く光るものが明瞭に映し出されていた。
―連邦軍兵士が恐怖する赤い一つ目。
「う、撃て！」
２５ｍｍ機関砲の引き金がついているのは砲手のジョイコントローラーだけだ。車長に許される最大火力はＭ６０、１３．２ｍｍ機関銃である。水面から浮かび上がったモノアイに向けて曳光弾を放つ。遅れて砲手が発砲した。
ＩＦＶから放たれた２５ｍｍ徹甲弾は、アッガイの緩やかにカーブした頭部を滑ることなく着弾したが、あえなく弾芯は砕けた。機関銃弾が同様に装甲板に砕かれた事は言わずもがなであるが、そもそも、その射撃は長くは続かなかった。ＭＳＭ―０４アッガイの頭部に搭載された二連装１０５ｍｍ砲が火を吹いたからである。
頭部二連装１０５ｍｍ砲は、ＭＳ―０５用に開発された１０５ｍｍザク・マシンガンのように連射速度は速くないものの、二連装とする事で瞬間火力を高めている。
発射された多目的対戦車榴弾が、装軌式装甲車の側面で爆ぜた。メタルジェットが装甲板を抜けて車内に流れ込み、無人砲塔下の弾薬が誘爆し、赤黒い炎が水面を照らす。
『敵だ！』
そこから少し離れたＩＦＶの車長、バーグ上級曹長はインカムに怒鳴りつける。
「降車戦闘用意！」
データリンクで撃破された車両のポイントが表示される。自分でなくてよかったと思う反面、現場を見ていないのが不安だった。
『敵は何なんだ！　今すぐ確認しろ！』
「分からん！　モビルスーツか！」
後部ランプが上向に開き、重機関銃と無反動砲程度には耐える装甲に守られた内界と、戦場とが一続きになる。兵士達は砂袋に穴を開けたように飛び出した。
『ミノフスキー粒子はないんだろう！　レーダーに敵が―』
「映ってんならとっくに撃ってるさ！」

常識的に考えれば敵は歩兵だ。このジャングルで気付かれずに接近できる車両などいない。仮に戦闘車両なら他の車両が反撃してとっくに交戦が始まっているはずだが、爆発があったきり戦闘音は聞こえない。木々に隠れて移動しているのだ。ならば―

―二両目が吹き飛ぶ。

別の道を進んでいた機械化歩兵部隊の兵士たちは、装甲車から出、そのまま索敵を命じられた。インドネシア特有の異常に大きな木々を抜け、撃破された装甲車を確認しに行く。

『ミノフスキー粒子はないんだ。敵の正体が分かったら報告しろ！戦車隊も向かってるそうだ！』

装甲車の車長、バーグの命令に、無線をオフにしたまま毒づく。

「くそったれめ。本当にモビルスーツがいたら、俺たちはどうしようもないってのに」

「その時はさっさと逃げるだけさ。戦車隊の連中に任せてな」

兵士たちは愚痴をこぼしながら、ライフルや無反動砲を抱えて進んだ。人を包めるほどの大きな葉や色とりどりの花を避け、邪魔な葉はマチェーテで切り落としながら、視界の届かない森を進んでいく。

乱立する大木が途絶え、濁った川までまっすぐ開けた土地が見えると、彼らは木立に隠れて様子を伺った。数輌の装甲車が黒煙を吹き出し燃え盛っている。その中にいたであろう歩兵たちの命運を思うと、彼らに暗いものが立ち込めた。

『どうか？』

「何もいませんぜ……いや、あそこ」

数名の兵士が地面の弾痕に隠れているのが見えた。だが肝心の敵は見当たらない。

「リッキー！　お前が奴らから話を聞いてこい」

リッキーと呼ばれた小柄な兵士は、それでも走るのが誰よりも早かった。ブルパップ式のアサルトライフルを小脇に抱え、影を飛び出した。

「分隊長め。くそ、奴らは何から隠れてるってんだ？」

単にインドネシア、ボルネオ島の気候や天気のためではない、不愉

快な汗が吹き出すのがわかった。
数百メートル弱の距離をあっという間に走り切り、穴に飛び込む。
弾痕に隠れていたのは装甲車の乗員と歩兵の生き残りらしい。乗員の方は兵士と違いプロテクターを身に付けておらず、タンカーズヘルメットを被り、サブマシンガンを護身用に抱えている。
「リックセン上等兵であります。敵はなんでありますか！」
穴に飛び込んだリッキーは、簡単に名乗るとそこにいた兵士達に問いかけた。
「分からん！　我々はたまたま助かったんだ」
「訳が分からないままに降車命令が出て、このざまだ！」
口々に主張する彼らを見てリッキーはなんと報告したものかと首を傾げた。
「敵はどこに行った？」
瞬く間に全滅させられた装甲車小隊は、敵の正体すら認められなかったのか。
リックセンは恐る恐る窪みから頭を出し周囲を確認する。河川の対岸ではないかと見やった瞬間、不気味な光を見つけた。
「……なんだよありゃ」
反射的に身をかがめ隠れてしまったリックセンは、ヘルメットに含まれた無線機に向かってこう報告した。
『正体は分からないが川に何かがいます。モビルスーツかも』
報告を受けた歩兵隊の指揮官は、双眼鏡で川を観察していた。不意に水面がゆっくり盛り上がり、水ではない何かが姿を現したが、それにモノアイが付いている事に気づくのがあまりに遅すぎた。
ＭＳＭ―０４の頭部に搭載された２０ｍｍ機関砲が火を吹く。木立を横薙ぎに斉射された榴弾はそこに隠れていた兵士たちの命を赤い霧に変えていく。
「伏せろ！　無反動砲用意！」
伏せながら指揮官が命じたときには既に、無反動砲の射手はこの世を旅立っていた。
爆煙に向けて加速する６１式戦車の小隊はＭＳの攻撃を確信して

いた。立て続けに撃破された歩兵戦闘車。響いた砲声は装備された機関砲の他に、戦車砲クラスのものがあった。
ジオンにも戦車はあるが、瞬く間に一方的に撃破されていることから、数が多いが、考えたくはないが、ＭＳだと思える。ザクかグフだ。
「来たよ戦車だ！」
川を流れる東洋の菓子、もといアッガイの腹の中でパイロットが警告する。アッガイは戦闘用のＭＳでは極めて珍しい、複座式の機体である。当然一名での運用が可能であるが、コパイロットとの交代、分担によってより長時間の任務、高度な機体操作が可能になっている。この仕様はアッガイが長距離浸透、偵察作戦での運用を意識して設計された為であり、事実ＭＳの操縦技能を持たない者を副操縦席に乗せて輸送することも可能である。
「戦車四両。Ｍ６１Ａ３だね」
ドナ・ワトソン曹長が、モノアイが捉えた情報を分析、記録する。
対地戦闘、つまりは水陸両用ＭＳの陸での戦闘では、コパイロットは火器管制の他に、索敵と電子戦と、情報面でのパイロット支援を行うことになっている。
「応援を出せるか見る。左腕ミサイル任せるぞ」
相棒のクロエ少尉が言った。彼女がこの機体のメインパイロットである。
ミノフスキーレベルゼロ、６１式戦車の追加計器がそう示していた。戦車長は目の前のモニターを確認し、小隊の戦車がデータリンクシステムの輪で繋がれていることを再認する。
「指定目標、弾種ＡＰＦＳＤＳ、小隊集中行進射！」
車長車が飛ばした号令に合わせ、各車が照準を絞る。
「撃て！」
１５０ｍｍ滑腔砲から放たれた装弾筒付翼安定徹甲弾がアッガイに直行する。戦車開発の完成形とまで言われた６１式戦車のＦＣＳに制御された砲撃がアッガイの頭部に集中する。が、すんでのところでアッガイは身をかがめ、鉄の矢は水面に突き刺さった。
アッガイの大ぶりな頭部も水面下に沈んでしまうと、濁った水では

視認もできない。
「撃ち方待て！　次弾―」
　隠れたと思ったのも束の間、再び巨躯が姿を現した。今度は胴体ごと水から上がり、グローブをはめたボクサーのような両腕をこちらに向けている。
「撃ち方始め！」
　アッガイの左腕から放たれたミサイルが、６１式戦車の熱源を追い飛翔した。装甲の薄い上面を狙う程の距離はなく、四輌それぞれに直進していく。
　同時に、右腕に装備された１２０ｍｍ砲が連射される。
「全車後退、ミサイル防御！」
　機甲科特有の、エンジン音に対抗し早口で捲し立てるような大声に呼応するかのように、６１式戦車に搭載されたスモークディスチャージャーが煙弾を吐き出し、同時に後進を始める。爆音が鳴り響いた。
　データリンクでは二輌が既に撃破されている。操縦手に超信地旋回を命じ、敵の予想から逃れられる位置に移動する。まだ煙幕が身を隠してくれる。
「どこへ行きやがった！　本部へ！　戦車二輌被弾、戦闘不能。応援を乞う！」
『ネガティブだ！　回転翼機の応援を待たれたい！』
　通信を切る。悠長な戦闘ペースでＭＳに対抗できないことは、すべての連邦軍将兵が身をもって体感しているはずだ。
「クソッタレめ」
　無線機のチャンネルを切り替える。
「付近の歩兵！　無反動砲はあるか!?」
『あるとも！　全部で二基だ！』
　賭けるしかない。Ａ３タイプの６１式戦車は、最新型の５型と違い、徹甲弾対策が不十分だ。
　本来地球連邦陸軍の戦車に徹甲弾対策は不要だったのだ。治安維持と離反した武力集団を相手にして、圧倒的な軍事力をもって制圧するのに、戦車の必要性は認めても、対戦車戦能力は必要ない。むしろ、

歩兵が運用する安価な対戦車兵器で損害を出すことの方が、連邦軍にとっては耐え難い事だった。
戦車二輌でＭＳの相手は不可能である、そう彼の理性は結論づけていた。だが、戦車乗りとしてのプライドが、鉄の人形に一泡吹かせてやりたいと望んだのだ。
「我々が囮になる！　無反動砲を奴のデカい頭にぶち込んでやってくれ！」
『り、了解した！　健闘を祈る！』
要請を受けた歩兵達は、タケヤリとあだ名される無反動砲を担いで散開した。木々の隅や地面に穿たれた穴に隠れて敵を待つ。
「二号車ついて来い！　奴を仕留める！」
白い煙のカーテンから飛び出し、川沿いを走る。速度が敵の照準を狂わせる事に機体しつつ、砲身を濁流に向けていた。
しかし、茶褐色のＭＳが再び川の外に現れることはなかった。車長を安堵と落胆が包む。

第二章

「……最外殻でこの規模なら、連邦軍の総数はかなり密集してるはずね」

「どうりでここまで何も居ないわけだ。腹決めて守りに入られると厄介だね」

パイロットのクロエ・ワシントンの分析に、ドナ曹長が付け加えた。地球連邦軍はボルネオ島最後の航空基地を失い、航空優勢をも失った。対する公国軍はこの機会に一挙に東南アジア占領を加速したかったが、航空部隊の損耗率は高く、熱帯雨林と河川、湿地が広がる大地では思うように進撃できない。その隙に連邦陸軍は後退、領域を最低限にまで狭める事で最後の砦を守ろうとしていた。

「よし、後退するぞ」

連邦軍の勢力圏を抜け緩衝地帯に入る。泥色の流れは何度もカーブを描き合流や分流を繰り返していた。

「もういいだろう。上を進もう」

クロエ少尉が胴体のメインバラストタンクに注水されていた水を排水し、ウォータージェットを始動した。足裏、背部ランドセルに設置されたウォータージェット推進器が装甲板の隙間から吸い込んだ水流を噴き出し、アッガイの駆体を浮かび上がらせる。

アッガイの足はスクリューを含むが、ザクのパーツを主に流用して構成されており推進器というよりも、重厚な機体を地上で支える歩行脚としての色が強い。それでも、バラストタンクから排水し、ランドセルの大型ウォータージェット推進器を組み合わせれば最大速度五十三ノットが可能となる。

再び水面に顔を出したアッガイは背泳ぎの姿勢で進む。モノアイは自然に頭部頂上付近に移動し、前方視界を確保している。

「無線封鎖解除、データリンクオンライン」

アッガイに搭載されたデータリンクシステムがランダムな中継基地を介して偵察大隊の上級部隊と彼女らを繋いだ。レーダーの探知距離が拡大し、付近の友軍の配置が更に追加される。ここはキナバル

鉱山基地のレーダーサイト圏内だ。ドナが偵察によって得られた情報をリンクシステムで友軍に送信する。
「これでお仕事は完了！」
「さあ、帰還しましょう。風でも浴びて」
少尉は水密壁に守られたコックピットブロックを解放した。ハッチだけでなく腹部に縦に渡るカバーごとである。機械的な駆動音が響き、タラップにもなっている腹部カバーが開くと、並列複座のコックピットが露出する。シートはアッガイの天地、前後に揃っている。仰向けに正面から赤い太陽光を浴びた彼女らは眩い光に一瞬怯んだものの、すぐに座席に体を固定しているベルトを外した。
「やっぱ太陽光は気持ちがいいね」
「ええ、ちょっと無遠慮なぐらいだけど」
水平に倒したコックピット。パイロットスーツを腰まで脱いでいるドナはシートから尻を浮かし日光浴を楽しんだ。
アッガイの頭部が水をぬるりと裂き、関節部から吸い込んだ水を吐き出す音が心地いい。水中機特有、中でも抜きん出て秀でるアッガイの静音性が機械音をなるべく軽減してくれるから。
「あと十分で《ホテル・ボート》に到着」
尻をつけモニターと計器、自動操縦システムを監視するクロエ少尉が時計を見る。
「風が気持ちいい！　そんなところつまらないよ！」
クロエはドナの日焼けした首元を見て思う。相変わらず遠慮のない奴だ、と。彼女の簡易階級章は曹長。クロエは少尉だ。本来ならば士官と下士官には部隊指揮官とその補佐役という超えられない壁があるはずで、教育課程も大きく異なるのだが、彼女にはその自覚はないらしい。不躾な発言を次々に飛ばすドナ・ワトソン曹長だが、軍旗に厳しいクロエもこればかりは悪く思っていなかった。
単座式のＭＳにはできない戦い方が、このアッガイにはできる。パイロットは本心で互いを信頼しなければならないし、お互いを理解しなければ最大限の能力は発揮されない。
それは彼女の、通常の陸戦型ＭＳより陸戦において不利とされる

アッガイのパイロットたる信念だった。
「私は根暗なのでね。狭いところの方が落ち着く」
「宇宙に住んでる人間の言葉とは思えないね」
ドナの答がおかしかった。クロエは少し笑う。既に夕日が差し込み始めていた。
「頭部機関砲の感想は？」
アッガイの頭部にはモジュール式の１０５ｍｍ機関砲が四門装備されている。彼女の部隊では必要に応じて取り換えることができた。今回の威力偵察では、１０５ｍｍ機関砲二門と２０ｍｍ機関砲二門の新しい組み合わせの試験も兼ねていた。
「２０ミリの発射速度が過剰な気もするわ。対空の流用だから仕方ないけれど」
「ふむ。報告しておく」
「あとＦＣＳの調整も微妙」
辛口コメントですね少尉、と機体に戻ったドナが笑う。風を浴びるのもいいが、告白すればエアコンの効いた機内の方が涼しくて快適だ。開放してしまった今では大して変わらないが。
「手を抜いたら死ぬのは私達よ」
クロエは呆れた、と肩を竦めて応える。
「操縦を手動に切り替え。コックピット閉鎖するわよ」
手慣れた動作でアッガイのオペレーションシステムのモードを変更する。気密隔壁の閉じ切る音が鳴り、僅かジェネレーターの駆動音がコックピットに響くのみとなった。
アッガイの推進方向を映し出すモニターには小さな船が映し出されている。落日の反射ではなく誘導灯が、赤く点滅する。
『こちら《ホテル・ボート》。帰還を歓迎する。チェックインの準備を』
「了解、《ホテル・ボート》。クイーンズルームをお願い」
ドナが無線機に吹き込む。《ホテル・ボート》はジオン公国軍河川哨戒隊の船だ。とはいっても、小型の客船に推進器やら申し訳程度の機関銃やら通信設備やらを詰め込んだだけの代物だが。
『悪いが用意できたのはお古のベッドだけだ。しかし飯はあるぞ』

「ありがとう。それで充分」
死と隣り合わせの戦場を征く兵士にとって、安息の寝床と食事があれば文句はなかった。今日も生き残ることができた二人を、大きくて丸い機体が仮住まいへと運んでいく。
アッガイの機体は背泳ぎのまま《ホテル・ボート》に係留される。船の甲板では半裸の若い兵士が忙しなくウィンチを操作していた。
「自己診断システム、オールグリーン。ＦＣＳスタンバイモード。排熱監視装置、循環制御装置停止。注水パイプ接続確認、排熱・冷却システム外部委譲。ジェネレーター出力安定。フロー正常」
「データリンクシステム、通信マネージ終了。各部以上なし。メモリ外すよ」
「オーケイ。こっちはおしまい」
作戦データや戦闘記録、機体の情報が書き込まれたトランプ大のメモリーカードとタブレット端末を携えたドナの手をクロエは引いてやる。男勝りな身長をシャープな骨格で繋ぎ、アスリートのような筋肉で形作られたクロエに比べて、背も低く小柄なドナは妹分のように見えた。
桟橋を渡りながら頭部に生えた二つのフックで《ホテル・ボート》に係留されたアッガイを眺める。ドナはアッガイを可愛い可愛いと褒めちぎってうるさいが、クロエには恐ろしく映る。ＭＳ―０６に比べても大柄な体躯。頭部に口を開いてる四門の大口径砲。腕部にはミサイルランチャーと高周波で振動するアイアンネイルが装備されている。ＭＳ―０６のジェネレーターを二基も抱えたこのＭＳＭ―０４アッガイは、偵察用ではあっても十分凶悪な兵器なのだ。
光学センサ、照準レーザー、赤外線妨害装置などが複合されたモノアイを一瞥し、クロエは船内に入った。
元河川遊覧客船《ホテル・ボート》、増強されたエンジンでアッガイを曳航する。常に稼働するエンジン音がモビルスーツに比べ煩いのがはじめは不満だったが、慣れればどうということもない。
「今日の偵察で中規模の集団がまた西に進んでいるのが分かりましたね。別の偵察隊の報告では、集結はこのミンドールという街である可

能性が高いそうで」
《ホテル・ボート》の艇長、つまるところ公国地球制圧軍東南アジア方面軍、制海中隊第三支援小隊長であるヒュー・ローリンソン曹長がクロエらに声をかけた。
「我々はしばらく河川周辺の作戦行動が命令されてるから、叩くとなれば動員されるでしょうね」
《ホテル・ボート》は第三支援小隊が運用するボートのうちの一隻で、他に《パパイア・ガレオン》《マングローブ》と愛称が付けられた同様の河川艇が存在する。それぞれ一機ずつのモビルスーツを支援する為に航行しており、第三支援小隊は制海中隊第三モビルスーツ小隊とを一体として連絡を密にしている。
偵察は、ジオン公国軍の地上戦において非常に重要視された。それは彼らに許された投入戦力が余りに少ないからであり、それを最大限有効活用しなければ、ＭＳの優位性をもってしても、数に勝る連邦陸軍には敵わないと容易に予想されたからである。
「防衛線を構築する時間は与えたくないでしょうね」
「ええ。既にかなり戦力が集中してきています」
狭い室内で、机に置かれたディスプレイに地図が表示され、光源が増える。地図の上には彼女たちが集めた、連邦軍の位置や規模が重ねられることで、それが一定方向へ集中していく様が見てとれた。
「少尉！　今、作戦司令部から司令書が」
隣に位置する通信室から、慌ただしく兵士が駆け込んでくる。軍服のズボンに下着を着た姿の彼の手には、一枚のプリントが握られている。
「司令部も動くと決めたらしい」
既に一読して呟いたクロエの持つ文書を、二人の曹長が覗き込んだ。
「十五日までに敵の集結地点及びその前哨基地を把握せよ、か。今日の部隊は、どこまで退がる気なんだろうね」
ドナは地図に映された今日の偵察情報を眺め、それがこれまでに比して大きな規模であることを確認すると、指でその地点とミンドール

とを結んだ。
「時間がない。今までの威力偵察ではなく、粘着して観察する必要があるな」
「ストーカーになれっていうのね」
兵士が持ってきた茶を口に運びながらドナが呟く。
「ストーカーも勝てば結構。ローリンソン、明日の早朝に出る。アッガイの準備をよろしく」
「お任せを、少尉」
体格の小さなローリンソン曹長が野戦帽を正し、敬礼をしてみせる。無精髭を蓄えた精悍な、漁師のような顔にはやはりこの船が似合う。
「私は整備班に話してくるね、バルカンのこと」
そう言って、ドナは階段を降りていった。
金属製のタラップを降りながらドナ・ワトソンは、露出した細い腕に巻かれた腕時計を一瞥する。
時刻は午後七時半。既に《ホテル・ボート》のランプが灯り、甲板をオレンジ色に染めていた。
「曹長！　アッガイの頭部機関砲はどうでしたか？」
「２０ミリのレートを分間五百発まで下げて、ＦＣＳももうちょっと調整が必要かな！」
声をかけた整備班の伍長のところまで駆け降りる。彼は年も近く、心許せる友人のような部下だ。ドナは軍隊の階級制度に馴染みきれないところもあってか、部下に気さくな面があった。それが整備班との絆を生んでいる。ＭＳは細かな整備が欠かせない巨大な精密機械であるから、その使用者には整備を抜かりなく行うものが必要であることを、彼女はよく理解していた。
かつてはここらの川で住民や観光客を乗せていた《ホテル・ボート》は今、ＭＳを曳航して進んでいる。濁流を掻き分ける音に強化されたエンジンの音が混ざり、さらに整備兵たちの声と整備器具の動作音が今の喧騒を作り出している。
「ＦＣＳは曹長が調整しますか？」

伍長、ヒューが工具を持った手で額の汗を拭いながら、アッガイの頭頂部あたりの甲板に立つドナを見上げて言った。彼がそのままアッガイの腹まで下がると、クレーンがゆっくり降りてくる。
「馬鹿！　曹長に当たったらどうすんだ！」
クレーンに吊るされた金属製のフックを掴みながら怒鳴る。ドナと同じ支給品のタンクトップは汗が滲んでいた。
「フックぐらい避けられるよ。ＦＣＳの調整は私がやる」
ヒューの腕を支えにして、甲板からアッガイの頭部に渡った。キュートな顔をしたアッガイも、モノアイが消えてクレーンのライトに照らされる姿は、妖怪のようだった。滑りやすいアッガイの表面を気をつけながら歩き、丸い腹部まで到達する。
コックピットを開けると、仰向けになったシートが見えた。ドナはそこへ飛ぶこむと、待機モードのＦＣＳを設定画面まで動かす。開かれた頭部は今、砲身周りが露出し、ヒューがそこにセンサーを取り付けているはずだ。
「砲身はまっすぐ向いてるー？」
「うんと……いや、すいません曹長。こりゃ砲身がずれてます。右にコンマ七」
そりゃ狙ったところに当たらない訳だ。照準器ではまっすぐ向いたつもりでも、砲身がずれているのだから。アッガイの頭部機関砲は、頭部の旋回だけでなく多少は微調整が効くようになっている。ＦＣＳと照準が狂っているように感じたのはこの為だ。
「しっかりして！　死ぬのは私たちなんだからね！」
クロエのようだと思いながらドナは怒ってみせる。まあ、ＦＳＣの再設定よりは機関砲の固定の方が、ドナにとっては手間が少なくて良い。
クロエがいつも収まっている席から、ドナは空を眺めた。きれいな星空だ。閉鎖型コロニーのサイド３からは、外壁のモノレールぐらいからしか見られない光景である。
「あの中に住んでたなんてねえ……」
空の闇に浮かぶ月を見て独りごちる。月の裏側に立てば、サイド３

が見えるかも知れない。
「ここからは同じに見えても、恒星はそれぞれ遠いし……コロニーは地球の周りに漂ってるようにしか見えないんでしょうね、向こうの星からすれば」
部下と機関砲を弄っていたヒューが彼女の独り言に答えた。そして続ける。
「まあ、向こうから見えるのはせいぜい太陽の光ぐらいで、地球はおろか、コロニーなんて見えやしないんでしょうけど」
夢のないこと言うな、と返しながらドナは思う。きっと地球よりよっぽど進んだ星に住んでいる人々は、今の地球を見て、心底馬鹿なことをしているなあと、そう思うのだろう。